長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第27集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

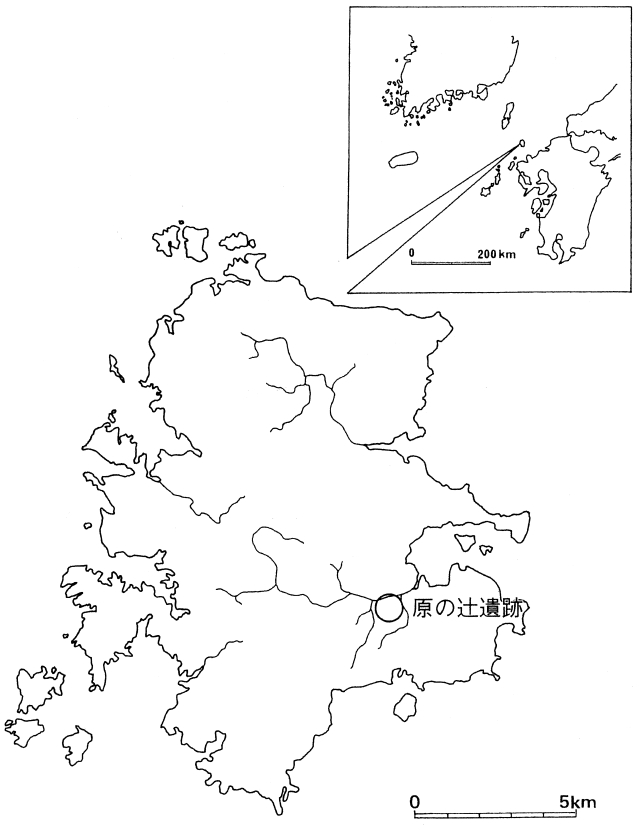
２０１８

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第27集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書



カラー写真１　調査区遠景（南西から）

カラー写真２　調査区近景（上が東）

カラー写真３　基本層序（１ｃ区）

カラー写真４　１号溝検出状況（２ａ区）

カラー写真５　１号溝遺物出土状況（２ａ区）

カラー写真６　１号溝完掘状況（２ａ区）

カラー写真７　２号溝遺物出土状況（２ｂ区）

カラー写真８　２号溝断面（３区）

カラー写真９　１号遺構（１ａ区）

カラー写真10　２号遺構（１ａ区）

発刊にあたって

本書は、国庫補助を受けて実施した、平成28年度原の辻遺跡調査研究事業の報告書です。

原の辻遺跡は、これまでの調査で、多重の環濠や日本最古の船着き場跡などが確認されるとともに、中国や朝鮮半島との盛んな交流を物語る数多くの遺物が出土していることから、中国の歴史書「魏志倭人伝」に記載された「一支国」の国邑（こくゆう）と特定されました。「魏志倭人伝」の中には30余りの国の名前が記されていますが、国邑が特定されたのは原の辻遺跡だけで、当時の国の規模や構造を解明できる非常に学術的な価値の高い遺跡とされ、平成12年11月には弥生時代の集落遺跡としては全国で３例目の特別史跡として指定を受けました。また、昭和49年以降の発掘調査で出土した原の辻遺跡の遺物の中で、遺構や場所が明確で遺跡の時代や対外交流の歴史を裏付けることができる資料1670点が、平成25年６月19日に重要文化財に指定されました。

平成28年度の範囲確認調査は、壱岐市芦辺町深江平触字高原で実施しました。その結果、溝などが確認され、環濠と河川に挟まれた丘陵北部低地の土地利用の様相が確認されるとともに、朝鮮半島系の土器も出土し、対外交流の拠点としての原の辻遺跡の具体像を明らかにする上での貴重な成果を得ることができました。

発掘調査の実施に当たり、御理解と御協力をいただきました地元関係者の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、これらの調査成果が学術的な資料として広く活用され、さらには地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

平成30年３月31日

長崎県教育委員会教育長

池　松　誠　二

例　　言

1．本書は、原の辻遺跡調査研究事業として実施した、平成28年度の原の辻遺跡発掘調査報告書である。

2．本事業は、遺跡範囲内の環濠や旧地形等の状況調査を目的として、平成14年度から実施している。

3．本書に収録した調査区の所在地は、長崎県壱岐市芦辺町深江平触字高原である。

4．平成28年度の調査は長崎県教育委員会が主体となり、長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室が担当した。

調査組織

調査指導委員会	委員長	西　谷　　正	（九州大学名誉教授）
	委　員	大　坪　志　子	（熊本大学埋蔵文化財調査研究センター助教）
	委　員	工　楽　善　通	（大阪府立狭山池博物館館長）
	委　員	佐　古　和　枝	（関西外国語大学教授）
	委　員	徐　　光　輝	（龍谷大学教授）
	委　員	髙　倉　洋　彰	（西南学院大学名誉教授）
	委　員	武　末　純　一	（福岡大学教授）
	委　員	村　上　恭　通	（愛媛大学教授）

［委員記載は50音順］

長崎県埋蔵文化財センター

所　　長		岩　永　正　弘
東アジア考古学研究室長		川　道　　寛
東アジア考古学研究室	主任文化財保護主事	古　澤　義　久（調査・整理担当）
東アジア考古学研究室	文化財保護主事	楠　本　正　樹（調査担当）
調　査　課	文化財調査員	宮　木　貴　史（調査補助）

また、龍谷大学大学院生　王達来氏、生富文氏、市川勇樹氏が研修の一環として遺構実測にあたった。

5．本書で使用した遺構・遺物の実測、製図、写真撮影は、長崎県埋蔵文化財センターが行った。

6．本書に収録した遺物・図面・写真類は、長崎県埋蔵文化財センターで保管している。

7．本書で用いた座標は旧日本測地系である。

8．本書で用いた方位は座標北である。

9．本書の中国語要旨の翻訳は王達来氏に依頼した。また韓国語要旨の校閲は釜山広域市文化芸術課金恩螢氏に依頼した。

10．出土した韓半島系土器については現物資料を基に釜山博物館職員と意見交換し、多くの御教示を得た。

11．本書のうち「Ⅰ遺跡の立地する環境　1．地質的環境」の項の執筆は川道寛が行い、それ以外の項の執筆と編集は古澤義久が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の立地する環境
　1．地質的環境……1
　2．歴史的環境……4
　3．民俗的環境……6

Ⅱ　調査の経緯と進行……8

Ⅲ　芦辺高原地区の調査……10
　1．調査概要……10
　2．基本層序……10
　3．遺構及び出土遺物……16
　4．堆積層出土遺物……47

Ⅳ　総括……59
　中国語・韓国語要旨……66

付　編　平成28年度原の辻遺跡調査研究事業発掘調査における自然科学分析……68
　（株式会社　古環境研究所）

挿 図 目 次

図１　壱岐の表層地質…… 1
図２　印通寺系黒曜石の産状…… 2
図３　壱岐島内産黒曜石の蛍光Ｘ線分析判別図…… 3
図４　『壱岐名勝図誌』所載「津合橋」 …… 7
図５　平成28（2016）年度調査研究事業調査区位置図（１/8,000） …… 9
図６　芦辺高原地区調査区位置図……11
図７　芦辺高原地区の発掘調査箇所……11
図８　１区平面図・土層図……13～14
図９　２区平面図・土層図……13～14
図10　３区平面図・土層図……15
図11　１ｂ区１号溝(1)……17
図12　１ｂ区１号溝(2)……18
図13　１ｂ区１号溝(3)……19
図14　１ｂ区１号溝(4)……20
図15　２ａ区１号溝(1)……21
図16　２ａ区１号溝(2)……22
図17　２ａ区１号溝(3)……23
図18　２ａ区１号溝(4)……24
図19　１号溝（１ｂ区）出土遺物……25
図20　１号溝（１ｂ区，２ａ区）出土遺物……26
図21　１号溝（２ａ区）出土遺物……27
図22　１号溝（２ａ区），２号溝（１ｃ区，２ｂ区，３区）出土遺物 ……28
図23　１ｃ区２号溝(1)……30
図24　１ｃ区２号溝(2)……31
図25　１ｃ区２号溝(3)……32
図26　２ｂ区２号溝(1)……33
図27　２ｂ区２号溝(2)……34
図28　３区２号溝(3)……35
図29　３区２号溝(4)……36
図30　１号遺構（１ａ区） ……39～40
図31　１号遺構（１ａ区）出土遺物(1)……41
図32　１号遺構（１ａ区）出土遺物(2)……42
図33　１号遺構（１ａ区）出土遺物(3)……43
図34　１号遺構（１ａ区）出土遺物(4)……44
図35　２号遺構（１ａ区） ……45

図36　２号遺構（１ａ区）出土遺物……46
図37　２層・サブトレンチ（１ａ区）出土遺物……48
図38　２層（２ａ区），１層（１ａ区）出土遺物 ……49
図39　１層（１ａ区，１ｂ区）出土遺物……50
図40　１層（１ｃ区，２ａ区）出土遺物……51
図41　１層（２ｂ区，３区）出土遺物……52
図42　芦辺高原地区と周辺の様相……60
図43　周辺関連遺構……61

表　目　次

表１　土器・陶磁器観察表……53
表２　古式土師器甕口縁部金雲母混入様相……63

写 真 目 次

カラー写真１　調査区遠景（南西から）
カラー写真２　調査区近景（上が東）
カラー写真３　基本層序（１ｃ区）
カラー写真４　１号溝検出状況（２ａ区）
カラー写真５　１号溝遺物出土状況（２ａ区）
カラー写真６　１号溝完掘状況（２ａ区）
カラー写真７　２号溝遺物出土状況（２ｂ区）
カラー写真８　２号溝断面（３区）
カラー写真９　１号遺構（１ａ区）
カラー写真10　２号遺構（１ａ区）

Ⅰ　遺跡の立地する環境

1．地質的環境

(1)　壱岐の表層地質

壱岐島の地質は下位より、砂岩・頁岩からなる勝本層群、砂岩・泥岩・火山岩・凝灰岩・珪藻土からなる壱岐層群、玄武岩・安山岩・流紋岩・砂礫層からなる芦辺層群、そして玄武岩・安山岩からなる郷ノ浦層群に分けられる（壱岐団体研究会1973）。勝本層群の形成年代は浮遊性有孔虫化石層序から始新世とされる。湯ノ本と筒城を西北西から東南東方向に結ぶ断層線の南北で地形が大きく異なり、北側は標高が高くなだらかな台地となるのに対し南側は比較的起伏に富んでいる。壱岐の基盤層である勝本層群は湯ノ本－筒城線の北側にのみ分布している（図１）。

また、全島に分布する火山岩類の噴出時期を佐野貴司は、K-Ar 年代によって第１期（4.3-3.5Ma）、第２期（3.5-2.8Ma）、第３期（2.5-2.2Ma）、第４期（1.7-1.4Ma）、第５期（1.0-0.6Ma）の５期に区分する（佐野1995）。このことから火山岩からなる壱岐層より上位の地層の形成年代は中新世以降と考えられる。

これら、中新世以降に噴出した火山岩類は玄武岩を主体とし、大部分が標高100m 以下の低平で浸食の進んだ溶岩台地を形成している。台地上には、高尾山・津ノ上山・御津ノ辻・鹿ノ辻・岳ノ辻・久美ノ尾などのスコリア丘（噴石丘）が点在している。この中で、島の南部に位置する岳ノ辻は、海抜212m の島内最高点の山頂を持ち、底面の東西方向の長径1.2km、南北1.5km、溶岩台地からの比高約100m 以上と島内のスコリア丘の中では最も地形的に大きい。岳ノ辻スコリア丘は、郷ノ浦層群の最上部に位置し、佐野（1995）の第５期、松井ほか（1997）の新期の火山活動に属し、約0.9-0.6Ma に活動したと考えられており（長岡・中川2003）、壱岐島では最も新しい活動の火山体の一つである。

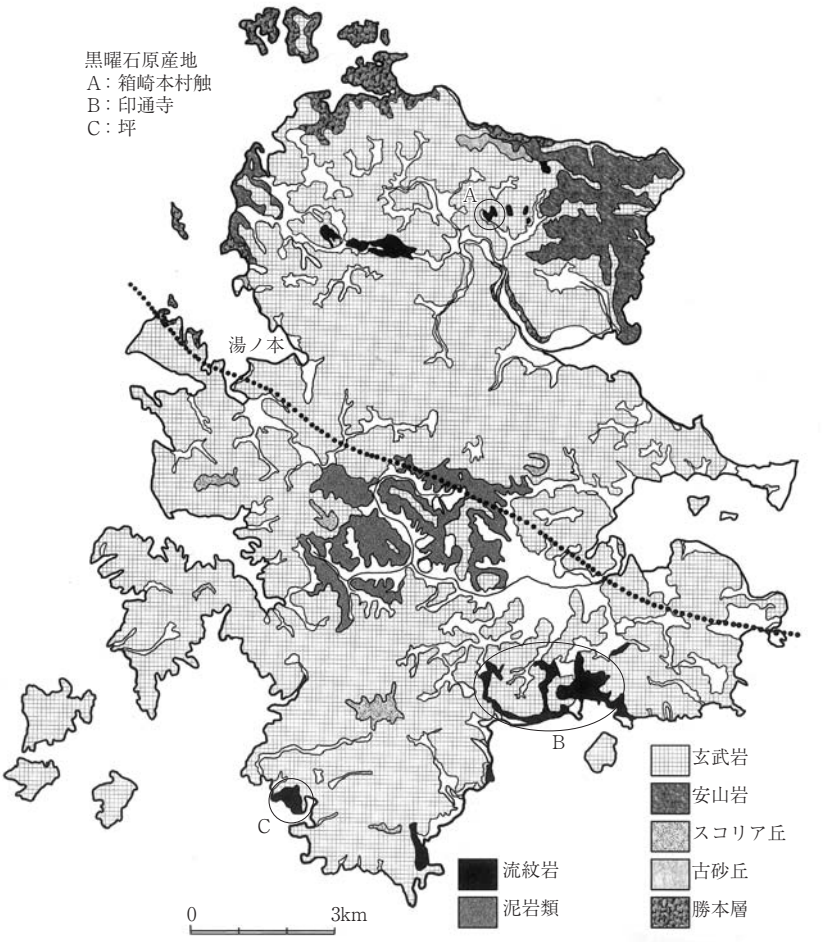


図１　壱岐の表層地質

⑵　壱岐島内における黒曜石原産地

旧石器時代から縄文時代にかけての主要石材である黒曜石の原産地としては、佐賀県伊万里市腰岳、長崎県松浦市の星鹿・大崎半島、佐世保市針尾島などが著名であるが、火山島である壱岐島でも複数個所の流紋岩帯が存在しており、それらを給源とする黒曜石原産地が周知されている（坂田1982、川道ほか2017）。

石器石材の対象となるある程度の大きさを持つ原石が採集される原産地は、印通寺、箱崎本村触、坪の３箇所であり、江角等の原石は豆粒大で石器製作には適さない（坂田1982）。

箱崎本村触産黒曜石は、高源寺の裏山一帯の切り通しとその周辺に分布する。佐野の第１期にあたり壱岐で最も古い火山活動で噴出した非アルカリ流紋岩を起源とする。形状は角礫で、礫面は発泡が激しい。産状は、林道の切り通し等の土壌中に検出されており、土層を構成する礫である。

図２　印通寺系黒曜石の産状

印通寺産黒曜石の原産地名は、分析者によってまちまちであるので整理しておきたい。平人触と久喜ノ辻は同じ地点を指し、君ヶ浦は印通寺港背後急傾斜地であり、現在は急傾斜地崩壊対策事業による工事のためコンクリートで固められており原石の採集は困難である。これらの黒曜石は、壱岐層群久喜累層中の久喜流紋岩（佐野の第２期）に起因するもので原の辻遺跡でも土石流堆積物中に検出される。平人触・久喜ノ辻・君ヶ浦の計測データが判別図ではまとまることから総称して印通寺産と呼称する。原石の形状は基本的に角礫で、人頭大のものも認められる。

坪産黒曜石の起源となる坪・初瀬流紋岩類は印通寺産と同様佐野の言う第２期に噴出したもので、壱岐層群の初瀬累層に含まれ、郷ノ浦町坪触の金崎神社裏一帯に分布する。ここで坪産とした黒曜石は、坪・初瀬流紋岩類の分布範囲からは若干はずれ、北西の潮間帯に所在する馬立海岸遺跡で採集したものである。遺跡からは縄文時代後期の遺物と混在して、黒曜石原石が採集できる。原石の大きさは２～６cm 程度で一般的に小形である。形状は、一面に溶食による無数の窪みが認められ形状はまちまちである。

いずれの黒曜石も断口面は、漆黒であるが白色の結晶が多くみられ、石材としてはあまり良質ではない。剝片剝離の際、白い結晶を夾雑物となり、リングは波打ち、折れる場合がほとんどで、石器製作に適した剝片を獲得することが困難である。

蛍光Ｘ線分析による判別図では、Rb 分率では坪・印通寺産が淀姫系エリアと近接するのに対し、箱崎本村触産は Rb 強度が強く計測した原産地の中でもっとも高い。一方 Sr 分率ではいずれの原産地とも Sr 強度の比率が極端に低いことが特徴的である（図３）。このことは箱崎本村触産黒曜石と坪・印通寺産黒曜石の形成年代および島の南北という地理的位置の違いによる噴出マグマの成分の差を物語るものであろう。

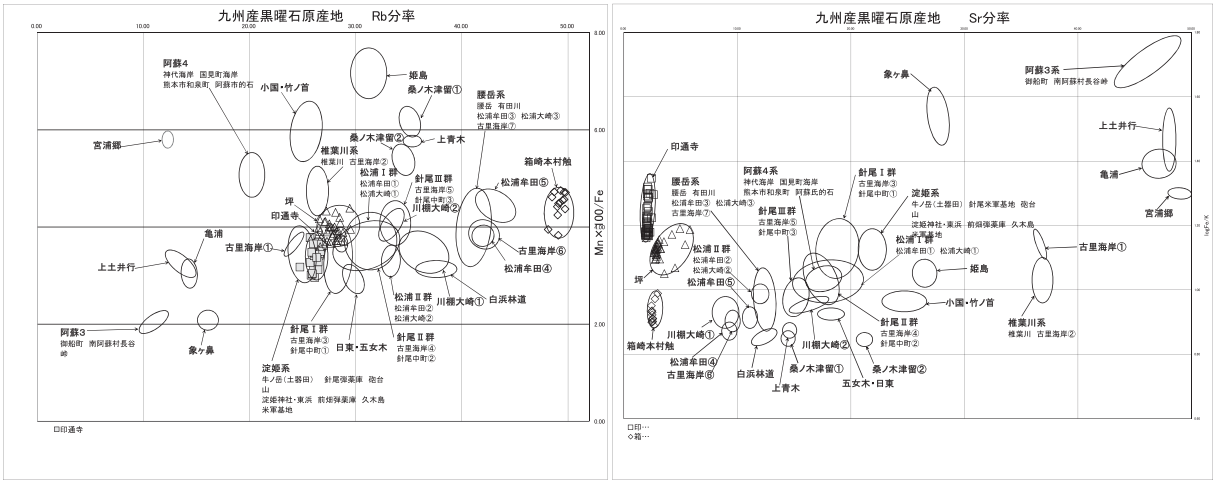


図３　壱岐島内産黒曜石の蛍光Ｘ線分析判別図

⑶　壱岐島内産黒曜石の需給関係

旧石器時代の遺跡で壱岐島内産黒曜石の使用が認められるのは、原の辻遺跡原地区・荒ノ木地区・原ノ久保地区および鶴田遺跡でいずれも深江田原に接する丘陵部に立地する。九州本土部の遺跡からの出土例は皆無である。島内産のうち印通寺産黒曜石のみが選択されており、坪・箱崎本村触産は開発されていない可能性が高い。

遺跡の所在する丘陵の基盤層は、長岡の地質区分によると土石流堆積物・火砕流堆積物・降下火砕物からなる礫層Ｂとされている（長岡2005）。この層自体に印通寺産黒曜石が構成礫として存在している。とすれば原の辻旧石器人による印通寺産黒曜石の利用のあり方は原産地遺跡というよりも偶然的なものと評価できよう。剝片剝離の痕跡が認められ、加工に適した剝片ができれば石器製作まで進むが製品化は困難であったものと思われる。

縄文時代における島内産黒曜石の利用状況は、壱岐島での蛍光Ｘ線分析がほとんどなされていないため島内の状況を論じることは現時点では不可能である。島外に目を転じると興味深い事実が浮かび上がる。九州本土部での島内産黒曜石の使用は、旧石器時代に引き続き認められないのに対し、玄界灘に浮かぶ沖ノ島に所在する沖ノ島遺跡、対馬島の越高遺跡・夫婦石遺跡・佐賀貝塚で島内産黒曜石の使用が認められる。特に沖ノ島遺跡からは島内３原産地の黒曜石原石が量的に保障される形で搬入され、石鏃等の石器製作が行われている。対馬の３遺跡からは印通寺産黒曜石が微量ではあるが検出されている。夫婦石遺跡では65点中僅かに１点、佐賀貝塚では計測した380点中４点と１％程度に過ぎない。腰岳産黒曜石がほとんどを占める中でそれを補完するという状況ではない。強いて言えば腰岳産原石が壱岐島を通過する際、偶然的に獲得されたものであろう。沖ノ島とは異なる石材獲得である。

［引用・参考文献］

壱岐団体研究会1973「壱岐島の地質－とくに中新統壱岐層群について－」『地質学論集』９、69-81頁、日本地質学会。

佐野貴司1995「壱岐火山群の地質：主にK-Ar年代に基づく溶岩流層序」『火山』40-４、329-347頁、日本火山学会。

長岡信治2005「原の辻遺跡周辺の地形地質」『原の辻遺跡総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所文化財調査報告書第30集。

2．歴史的環境

原の辻遺跡は深江田原平野に立地する約100ha の広大な環濠集落遺跡である。ここでは、原の辻遺跡自体の歴史的な変遷について概観する。

⑴　旧石器時代・縄文時代草創期

原の辻遺跡で最初に人類活動が確認されるのは旧石器時代ナイフ形石器文化期である。不條地区、八反地区、原地区、大川地区、柏田地区、池田大原地区、苣ノ木地区、原の久保地区、鶴田地区でナイフ形石器、剥片尖頭器、台形石器、石錐、抉入掻器などの遺物が出土している。遺構としては苣ノ木地区で落し穴状の土坑が１基発見されている。ナイフ形石器文化期における包含層が確認された地点の変遷は AT 降灰直前の鶴田遺跡（萩原編年中期段階１）→AT 降灰後の原３区（中期段階２）→苣ノ木地区（中期段階４）となる。このほか原位置から遊離した資料の中で時期が比較的明確なものとしては原の辻型台形石器、国府型、狸谷型ナイフ型石器、西北九州型角錐状石器が中期４期、基部裏面加工のナイフ型石器、枝去木型台形石器が後期段階２とみられる。原の辻遺跡では AT 降灰前後に最初の人類の足跡がみられ、その後旧石器時代後・晩期まで連綿と継続している。

原の辻遺跡では川原畑地区、不條地区、八反地区、高元地区、原地区、芦辺高原地区、石田大原地区、大川地区、原ノ久保Ａ地区で20点以上の細石刃、細石刃核が出土している。細石刃核には旧石器時代の野岳型が不在で、全てを縄文時代草創期の所産とみることができる。細石刃文化期の遺物は丘陵部での出土が激減し、低地部での出土量が丘陵部の５倍弱にのぼることから標高の低い地点への進出が進行したものと想定される。

⑵　縄文時代

確実に縄文時代早期以降と考えられる遺物として、坂の下式土器、局部磨製石鏃、剥片鏃、石匙、楔形石器、鎌崎型スクレイパーが不條地区、八反地区、高元地区、石田高原地区、苣ノ木地区、石田大原地区、大川地区、原ノ久保Ａ地区、原ノ久保Ｂ地区、池田大原地区、原地区で出土している。このほか多くの打製石鏃や磨石・凹石・敲石、石皿などが出土しているが弥生時代のものと判別が困難である。これまでのところ弥生時代以降の堆積層から出土しており、遺構等も確認されていない。時期としては坂の下式土器、剥片鏃、基部のみを研磨する局部磨製石鏃、鎌崎型スクレイパーなどから縄文時代後期前葉を中心とする時期に土地が利用されたことが想定されるが、石匙などの一部の遺物は縄文時代早・前期に位置づけられる可能性がある。これまで出土した縄文時代遺物は土器よりも石匙や石鏃などの石器が多く、原の辻遺跡周辺は一時的な野営地や狩猟場であった可能性が高いものと思われる。

⑶　弥生時代

Ⅰ期　原の辻遺跡集落形成期（弥生時代前期後葉～前期末）

弥生時代の原の辻遺跡における最古の遺物は板付Ⅱ式であり、それ以前の遺物はほとんど知られていない。前項で述べたとおり縄文時代に拠点集落が確認されず、また弥生時代早期・前期中葉までの遺物もほとんど知られていないことから原の辻遺跡の集落は、前代から連綿と継承されたものではなく、弥生時代前期後葉に突如、誕生したものであるとみるのが穏当である。この段階の居住域は丘陵先端部の高元地区にみられ、東側低地部には大溝が掘削された。墓域は原地区に集約して形成され、後に大原地区に移動する。

Ⅱ期　原の辻遺跡集落確立期（弥生時代中期初頭～中期中葉）

丘陵裾部に環濠が廻り、丘陵部全体で居住域がみられる。この時期には多くの外来系遺物がみられ北西低地部に多くの粘土帯土器が集中して出土する。西側低地部に船着き場が設けられる。北側丘陵の閏繰地区で列埋葬が確認されている。Ⅰ期から形成された大原地区の墓域が拡張する。

Ⅲ期　原の辻遺跡集落第１次盛行期（弥生時代中期後葉～中期末）

Ⅲ期はⅡ期で確立した環濠集落が盛行する時期であり、集落自体の規模は拡張していく。丘陵頂部ではあまり建物が建てられず、公共性が高い空間であった。この最頂部を取り囲む形で有力者の居住域があったものとみられる。低地部では環濠が複雑化し、多重の環濠が掘りめぐらされる。小規模な青銅器・鉄器生産が行われていた可能性があるが、大規模な工房は確認されていない。この時期にも大陸系遺物は多く確認されており、対外交流の拠点であった。墓域は大原地区に加え、大川地区、原の久保地区、苣ノ木地区に拡がる。

Ⅳ期　原の辻遺跡集落後退期（弥生時代後期前葉）

紀元前後を境に集落は一時衰退する。船着き場は機能を失っている。低地部で粒子の細かい灰白色の粘質土層が確認されており、大規模な水害に伴う低地部の水没によって衰退したという考えがある。墓域は大川地区、原の久保地区、苣ノ木地区で確認されていることから、集落の拠点がほかの地点に移動した可能性がある。

Ⅴ期　原の辻遺跡第２次盛行期（弥生時代後期中葉～後期後葉）

環濠も再掘削され、丘陵部に生活拠点が戻る。丘陵頂部は祭儀場として利用された。居住区は祭儀場東側斜面に集中して築かれている。墓域はⅣ期に築造されたものが拡大する傾向にある。

Ⅵ期　原の辻遺跡解体期（古墳時代初頭）

古墳時代初頭までは低地に環濠も存在し、環濠内で生活が営まれていたものの、その後、多重の環濠も埋没し、集落は解体する。

川道寛2014「旧石器時代～縄文時代草創期の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』４
川道寛・古澤義久編2016『原の辻遺跡総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集
福田一志・中尾篤志編2005『原の辻遺跡総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集
古澤義久・田中聡一2014「縄文時代の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』４
松見裕二2013「原の辻遺跡の概要」『原の辻遺跡－原の辻遺跡出土資料集成－』壱岐市文化財調査報告書第21集
宮﨑貴夫2008『原の辻遺跡壱岐に甦る弥生の海の王都』同成社

3．民俗的環境

壱岐島には口承伝承が多く残っているが、中でもよく知られた口承に壱岐二島伝説がある。原の辻遺跡が所在する深江田原平野では、特にこの伝説に関係する口承が多い。壱岐二島伝説とは、壱岐はかつて二つの島であったが、地震によって揺り合わさって一つの島になったという伝説である。勿論、史実としてこのような出来事は存在しなかったことは林徳衛の研究（林1975）などによって明白である。

この伝説は吉野秀政（1713年～1788年頃？）が寛保２（1742）年に平戸藩主の松浦誠信から撰述の命を受け、著した『壱岐国続風土記』に既にみえることから18世紀には既に成立していたということがわかる。また、『壱岐国続風土記』も底本の一つとし、後藤正恒と吉野靹千代により文久元（1861）年に著された『壱岐名勝図誌』でも同様の記述がみられる。まず、『壱岐名勝図誌』のうち深江田原に関する記事のうち、壱岐二島伝説に関係する記述について概観する。

〇深江村

「（前略）村を深江と名付けし故ハ続風土記云、東河内より立石の潟長江に海水通り、船舶往来し、其後地震のため山崩れて内海埋みしかとも、しハらくハ石田・池田・湯岳・筒城の間に大なる江ありて、海水たゝよへり。中にも当村深くして漸かたまりて水田となる。故に深江といへるならん。舩板柱のたくひ今なほ川底及田地にありと。（後略）」

ここでは、壱岐二島伝説が述べられ、深江田原にある深江村の地名が生まれたことや、船板や柱の類が今なお川底や田地にあるということが述べられている。

〇津合橋

「（前略）伝云、むかし両郡の間海なりし時、此所渡場の津なりしとそ。然るに地震のためゆりあひて、纔の川筋となれり。故後世、橋かけ渡して津合橋といへりとそ。」

ここでももともと海であって渡し場のある津であったが、地震のため小さな川筋となったという二島伝説が記されている（図４）。

〇大豆喰石

「津合橋の巽七十四間道傍にあり。此石、竪一丈一尺五寸、横四尺二寸二分、高二尺四寸五分、土より上現るゝ所周匝四間二尺五寸余。口の様なる所三尺三寸余、背の中に凹なる所、長三尺五分あり。里俗伝云、むかし郡界海なりし時、唐船碇を捨たりしか、化して石となる。今云大豆喰石是也。又云、口は深江に向へり。故に当村ハ豆あしゝ。尻ハ池田に向へり。故に池田は大豆豊饒と。」

ここでは大豆喰石の位置、寸法などが述べられた後、一帯が海であった頃、唐船が碇を捨てたものであるのか、石となったことが述べられている。そしてこの石は口が深江に向いているので、深江村では大豆の生産がよくなく、尻は池田に向かっているので、池田は大豆が豊饒であるという内容が述べられている。なお、現在、大豆喰石の所在について数人の住民に聞き取りを行ったが、その存在を確認することができなかった。

〇比売大明神

「（前略）神社考云、砥宮と称すれとも、砥によしなけれは、考るに、式に所載の弥左支刀神社ならむ。そハ此所むかし海岸なりし時ハ、真崎の渡ある所なりけらし。式の弥左支刀も仮字にて、正しく御岬渡の意なるへく、然れハこれそ式の神と思はるゝ。」

図 4　『壱岐名勝図誌』所載「津合橋」

ここでは比売神社は祇宮というが、延喜式所載の弥左支刀神社であると考えられ、その語源は、昔、附近が海岸だったとき岬の渡しがあったからであり、弥左支刀は当て字で、本来は御岬渡という意味であったという内容である。

このほかにも1939年の耕地整理工事によって破壊された原の辻遺跡を調査した鴇田忠正は、その報告において次のような説話が口承されていることを記述している（鴇田1944）。

○茶船の積荷

「島の古老の説く処によれば、深江田原は昔時海であって、現在の壱岐島を東西に両断していたもので、何時の頃にか大地震の結果、土地が隆起して両島繋がり、現在の壱岐島が形成され、発見される土器は昔時茶船が沈んだ為であると。」

内海湾から幡鉾川を遡上し約1.5km に所在する島内随一の深江田原平野という地形的な条件が壱岐二島伝説を生み出している。そして、ここで注目されるのは、例えば、大石→唐船の碇石、川底や田地にみられる木→船板や帆柱、土器→茶船の積荷と解釈されたように、実際に深江田原平野でみられる物件が、その伝説が真実味を帯びるようにする物証として作用したことである。

今次の調査でも多量の土器が出土し、古墳時代の溝底部からは大木が出土しているが、このような事例は既往の発掘調査からも明らかなように原の辻遺跡周辺では一般的なことである。そのような原の辻遺跡という巨大遺跡を抱えた深江田原平野であるからこそ、壱岐二島伝説が真実味を帯びて弘布されるに至ったものと考えられる。

鴇田忠正1944「長崎県壱岐郡田川村原ノ辻遺跡の研究」『日本文化史研究』星野書店
林徳衛1975「壱岐二島説は真実か」『島の科学』12

Ⅱ　調査の経緯と進行

1．調査の経緯

原の辻遺跡は、壱岐在住の小学校教員松本友雄によって明治37（1904）年頃に発見された。本格的に調査が開始されたのは昭和26（1951）年の東亜考古学会による調査であり、昭和36（1961）年まで継続的に実施された。その後、昭和49（1974）年、長崎県教育委員会が行った石田大原地区における調査では弥生中期を主体とする墓域が確認され、長崎県教育委員会は昭和50(1975)年～昭和52(1977)年の３ヵ年計画で範囲確認調査を実施した。また、平成３（1991）年から実施された幡鉾川流域総合整備事業に伴う遺跡周辺の低地一帯を対象とした範囲確認調査を経て、平成５（1993）年以降、広大な面積の発掘調査が実施された。これらの結果、原の辻遺跡は約100ha の範囲に及び台地を多重環濠で囲む大規模環濠集落であることが判明したため、平成７（1995）年『魏志』倭人伝に記された「一支国」の王都と特定された。その後、平成９（1997）年には国史跡に指定され、平成12（2000）年には弥生集落遺跡では登呂遺跡（静岡県）、吉野ヶ里遺跡（佐賀県）に続いて３例目となる国特別史跡に指定された。

平成14（2002）年以降、長崎県教育委員会は原の辻遺跡の集落構造の把握を目的とした調査研究事業を進めているが、これまでの調査では相対的に丘陵北部及び東部低地部の調査が遅れており、土地利用について不分明な部分が大きかった。そのため平成24（2012）年度、平成25（2013）年度は北側低地部の川原畑地区を調査し、平成27（2015）年度は芦辺高原地区北側を調査したところ、弥生時代の河川跡を検出した。そこで、平成28（2016）年度は芦辺高原地区南側を調査区とし、環濠に囲まれた丘陵部の居住域と河川の間の土地利用の状況について明らかにすることを目的とした調査を実施した。

2．調査の進行

平成28（2016）年度は、平成28（2016）年10月31日から同年12月26日まで調査を行った。まず調査区の設定を行い、バックホウによる表土と客土の掘削後、人力による掘削を進めた。この調査では発掘作業が順調に進む一方で、雨天と湧水による水抜き作業に時間をとられることも多かった。その後、12月12日には原の辻遺跡調査指導委員会を開催し、指導委員から現地指導を得た。12月15日には航空写真を撮影、12月19日から６日間にわたり埋め戻しを行い、12月26日に全作業を終了した。発掘調査期間中には、発掘調査の体験・実習を実施した。11月22日と11月29日には長崎県立壱岐高等学校東アジア歴史・中国語コースの１・２年生14人が原の辻遺跡発掘体験実習として発掘作業を体験した。11月15日には NHK の番組取材を受けた。

楠本正樹2016「平成17年度～平成26年度の調査経過」『原の辻遺跡総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集

福田一志・中尾篤志2005『原の辻遺跡総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集

図 5　平成28（2016）年度調査研究事業調査区位置図

Ⅲ　芦辺高原地区の調査

１．調査概要

調査区は、現在の水路から10m 西側に暗渠を避けるように３箇所設定した（図６）。北から南へ１区～３区とし、１区は５ｍ×30m、２区は５ｍ×20m、区は５ｍ×10m で、総調査面積は300㎡である。表土と客土をバックホウで掘削した後、安全と土壌排出等作業上の理由から、小区画を設定した。１区は調査区内を３分割し、西から１ａ区（2.5m×8.25m)、１ｂ区（2.5m× ９m)、１ｃ区（2.5m×8.25m)とし、それぞれの小区画間は１ｍ離れている。２区は調査区内を２分割し、西から２ａ区(2.5ｍ×8.25m)、２ｂ区（2.5m×8.25m）とし、小区画間は１ｍはなれている。３区は小区画を１箇所（2.5m×7.5m）設定した（図７）。小区画内は人力で掘削した。また、調査期間中、降雨や湧水などの影響で土層が崩落する可能性があったので、不整形に土層を除去した箇所がある。

発掘調査の結果、１ｂ区、２ａ区と繋がる溝が１条（１号溝)、１ｃ区、２ｂ区、３区と繋がる溝が１条（２号溝)、１ａ区で溝である可能性のある遺構が２条（１号遺構、２号遺構）発見された。調査終了後は、掘削面に砂を30cm 程度、敷いた上で埋め戻し、遺構等の保護を行った。

２．基本層序

今次調査では調査区全体で大きく土層が変化することはなかったので、統一的に層序番号を配した。客土下の土層は次のとおりである（図８～図10)。

１層：褐色（7.5YR4/4）粘質土。明赤褐色（2.5YR5/8）が混じる。しまり弱。近世～近代堆積土。調査区全区でみられる。

２層：暗褐色（7.5YR3/4）粘質土。明赤褐色（2.5YR5/6）が混じる。しまり強。弥生時代～古墳時代包含層。１ａ区全域、１ｂ区西側、２ａ東側でのみ確認される。

３層：灰褐色（7.5YR4/2）粘質土。しまり弱。弥生時代以前の無遺物層。調査区全区でみられる。次のとおり細分される。

３ａ層：褐色（7.5YR4/6）が多く混じる。褐色部分は上部では幅が広く、下部では幅が狭い逆三角形状を呈し、植物等の痕跡であるとみられる。

３ｂ層：褐色がほとんど混じらない。

３ｃ層：にぶい黄褐色が多く混じる。

４層：黒褐色（7.5YR3/2～10YR3/2）シルト土。有機物堆積層であるとみられる。弥生時代以前の無遺物層。１ｂ区、１ｃ区、２ａ区でみられる。

５層：褐灰色（7.5YR6/1）粘質土。明褐色（7.5YR5/6）混じり。しまり極めて弱。弥生時代以前の無遺物層。１ａ区、１ｂ区、１ｃ区、３区でみられる。次のとおり細分される。

５ａ層：明褐色（7.5YR5/6）混じり。

５ｂ層：明褐色（7.5YR5/6）が主となり、褐灰色はほとんど混じらない。シルト質が強い。

６層：灰黄褐色（10YR4/2）に黒褐色（10YR3/2)、黄褐色（10YR5/6）が混じる粘質土。弥生時代以前の無遺物層。１ｂ区、１ｃ区、２ａ区、２ｂ区でみられる。

７層：黒褐色（7.5YR3/2）粘質土。シルトが混じる。しまり弱。弥生時代以前の無遺物層。調査区

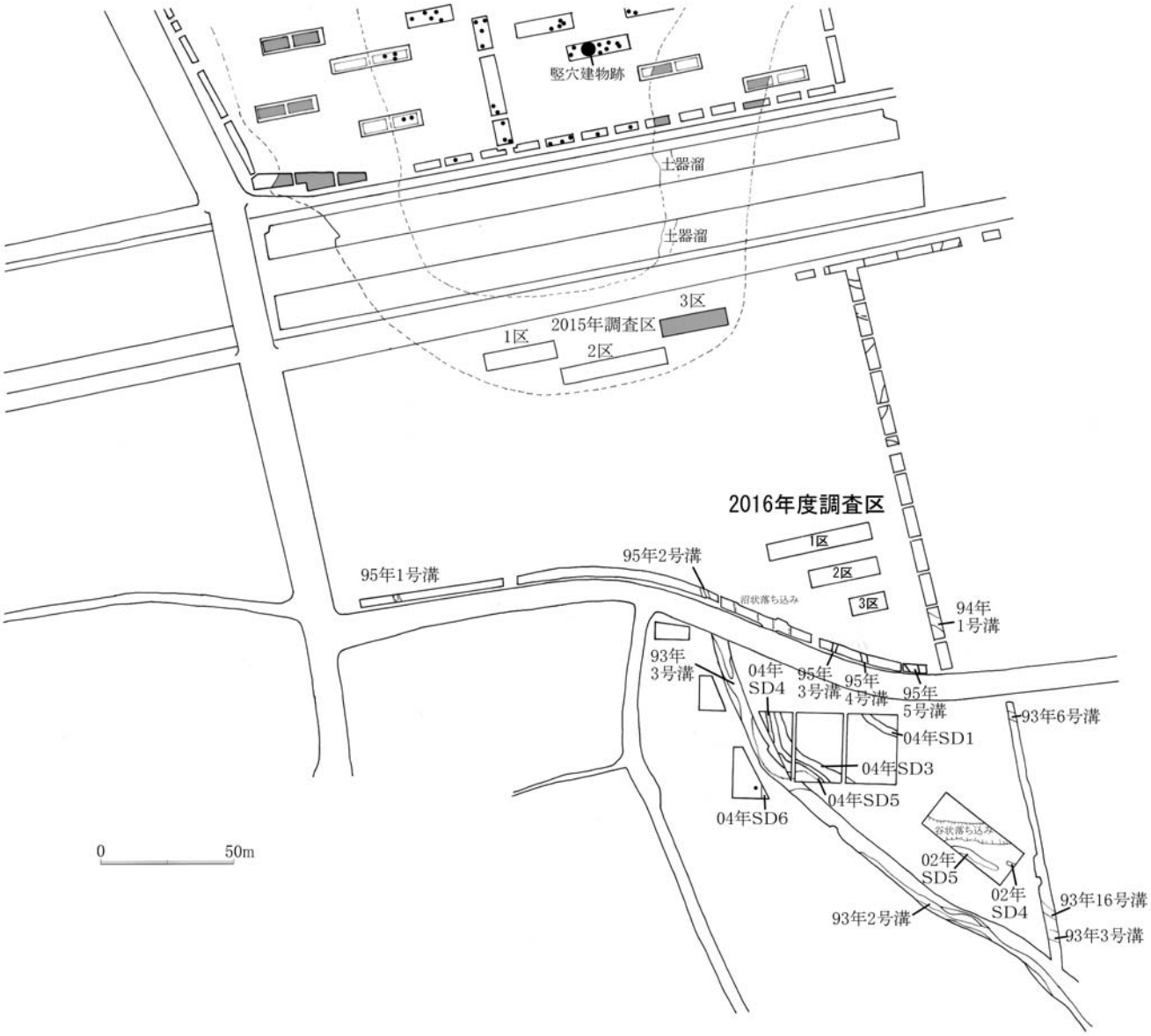


図 6　芦辺高原地区調査区位置図

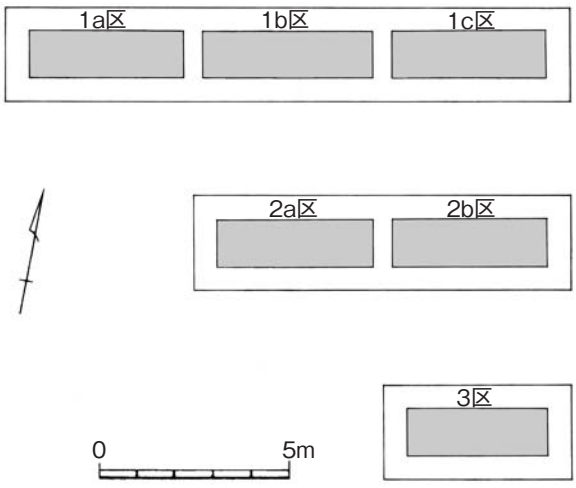


図 7　芦辺高原地区の発掘調査箇所

全区でみられる。

1層が近世～近代堆積層、2層が弥生時代～古墳時代堆積層、3層以下が弥生時代以前の無遺物層と整理される。3区の3c層の花粉分析結果によると寒冷期に多いハンノキ属やフウロソウ属が出現することから、更新統である可能性が指摘されている（本書自然科学分析書参照）。3区3c層の標高は4.0m前後で、2013年度調査川原畑地区1b区では更新統と完新統の境界が標高約2.6mであること（古澤編2014）と比べると、かなり高い。元来、丘陵側の土地が高かった可能性に加え、更新統由来の堆積層である可能性も考えておきたい。

古澤義久編2014『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第12集

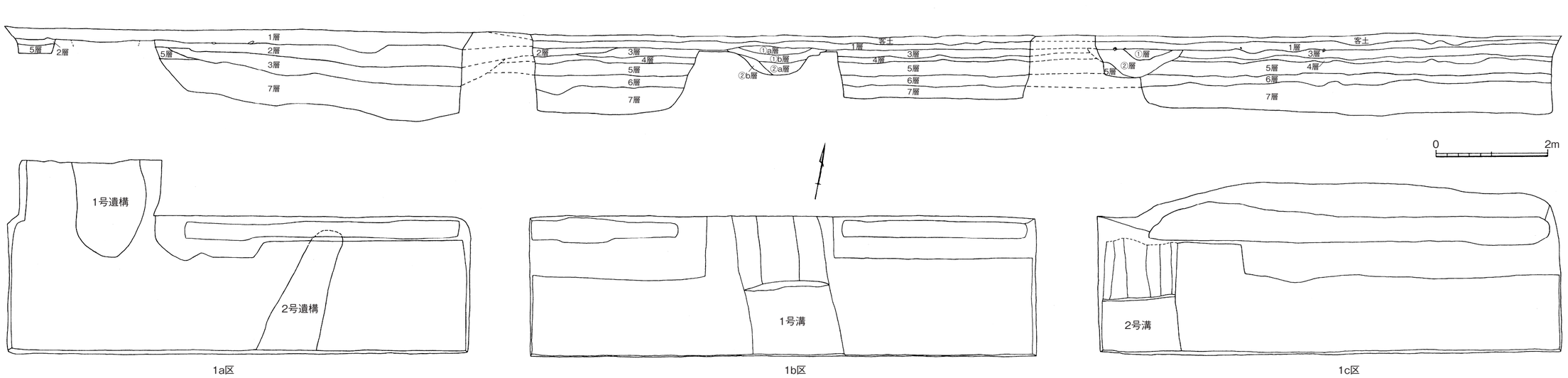


図 8　1 区平面図・土層図

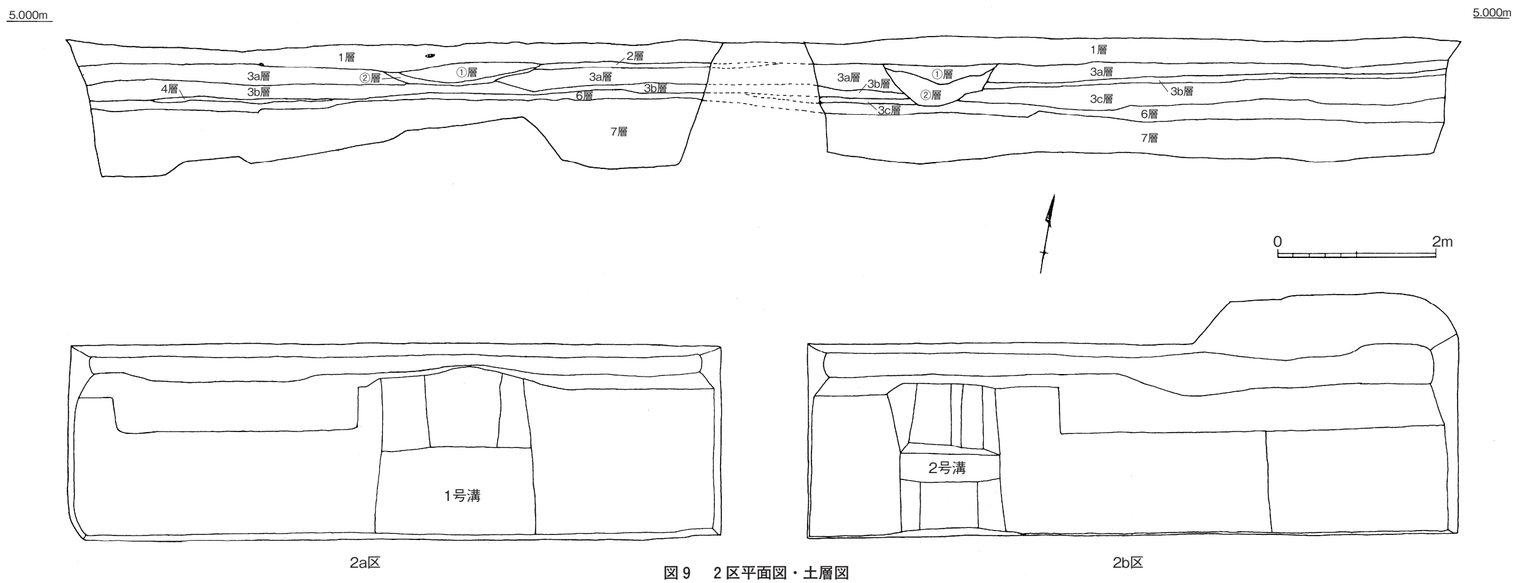


図 9　2 区平面図・土層図

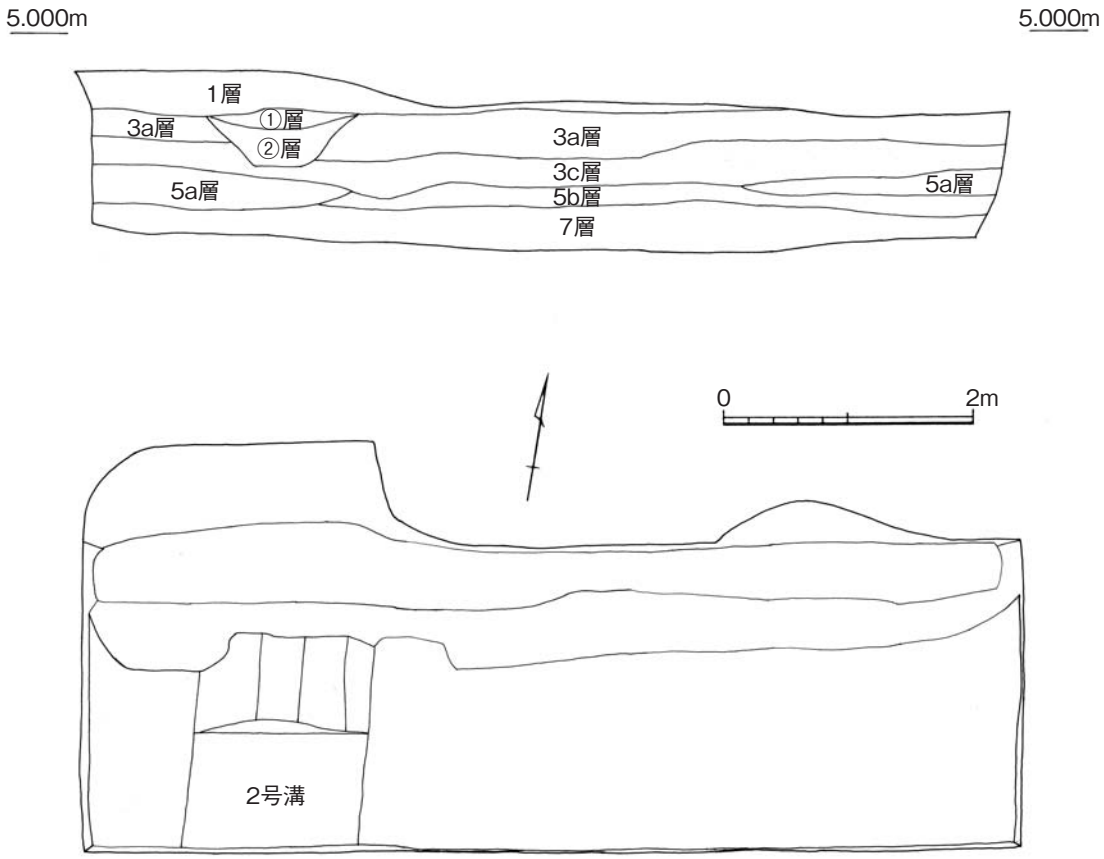


図10　3区平面図・土層図

3．遺構及び出土遺物

⑴　1号溝（図11～図18）

【調査】

1層除去後に1b区と2a区で検出した。溝内の北側を掘削し、調査した。南側は遺構内部は掘削せず、検出面の遺物のみを採集した。

【構造】

南北方向に伸びる溝である。1b区では弥生時代以前の無遺物層である3層、4層、5層を掘り込んで構築されている。2a区では弥生時代～古墳時代の包含層である2層と弥生時代以前の無遺物層である3a層と3b層を掘り込んで構築されている。幅は1b区では検出面で150cm、2bでは検出面で188cmである。底面の幅は1b区では68cm、2a区で94cmである。断面は逆台形を呈し、残存深は1b区では40cm、2a区では28cmである。底面の標高は1b区では4.00m、2a区では4.10mで北側に向かって標高が低くなっている。

【覆土】

覆土は大きく2層にわかれ、上層である①層は黒褐色粘質土、下層である②層は褐灰色粘質土である。土層を細分すると次のとおりである。

〈1b区1号溝〉（図14）

①a層：黒褐色（7.5YR3/2）粘質土。暗褐色（7.5YR3/3）、褐色（7.5YR4/4）、灰褐色（7.5YR8/1）が斑に混じる。灰白色（7.5YR8/1）の砂を多量に含む。しまり強。有機物を多く含む。

①b層：灰褐色（7.5YR4/2）粘質土。褐色（7.5YR4/2）が混じる。しまり強。有機物を多く含む。

②a層：褐灰色（7.5YR4/1）粘質土。部分的に黒褐色（7.5YR3/1）が混じる。しまり強。

②b層：褐灰色（7.5YR5/6）粘質土。明褐色（7.5YR5/6）がわずかに混じる。しまり強。

〈2a区1号溝〉（図18）

①a層：黒褐色（7.5YR3/2）粘質土。部分的に暗褐色（7.5YR3/4）混じり。明褐灰色（7.5YR7/1）のシルトを多量に含む。しまり強。

①b層：灰褐色（7.5YR4/2）粘質土。暗褐色（7.5YR4/2）と褐色（7.5YR4/4）が多量に混じる。しまり強。

②a層：褐灰色（7.5YR4/1）粘質土。褐色（7.5YR4/4）が混じる。しまり強。

②b層：褐灰色（7.5YR5/1）粘質土。褐色（7.5YR4/4）と黒色（7.5YR1.7/1）が混じる。しまり強。

②c層：褐灰色（7.5YR5/1）粘質土。明褐灰色（7.5YR7/1）のシルトが多量に混じる。しまり強。

【遺物出土状況】

①層でも②層でも多量の遺物が出土したが、大部分は磨耗が甚だしい小片であり、流れ込みや土層堆積段階での埋没によるものと考えられる。人為的に据え置いた状況の遺物は確認されなかった。

【遺物】

〈1号溝②層（1b区）〉（図19）

1～8は弥生土器である。**1**，**2**は弥生時代中期甕口縁部である。**3**は甕の底部で、**4**は甕の胴下半部である。**5**，**6**は壺胴部である。**7**，**8**は弥生時代後期の断面台形の突帯がめぐる壺胴部である。**9**，**10**は古墳時代前期の甕の口縁部である。**11**は凹石であるが、磨面も確認される。長さ12.6cm、幅7.95cm、厚さ4.2cm、重さ720gである。

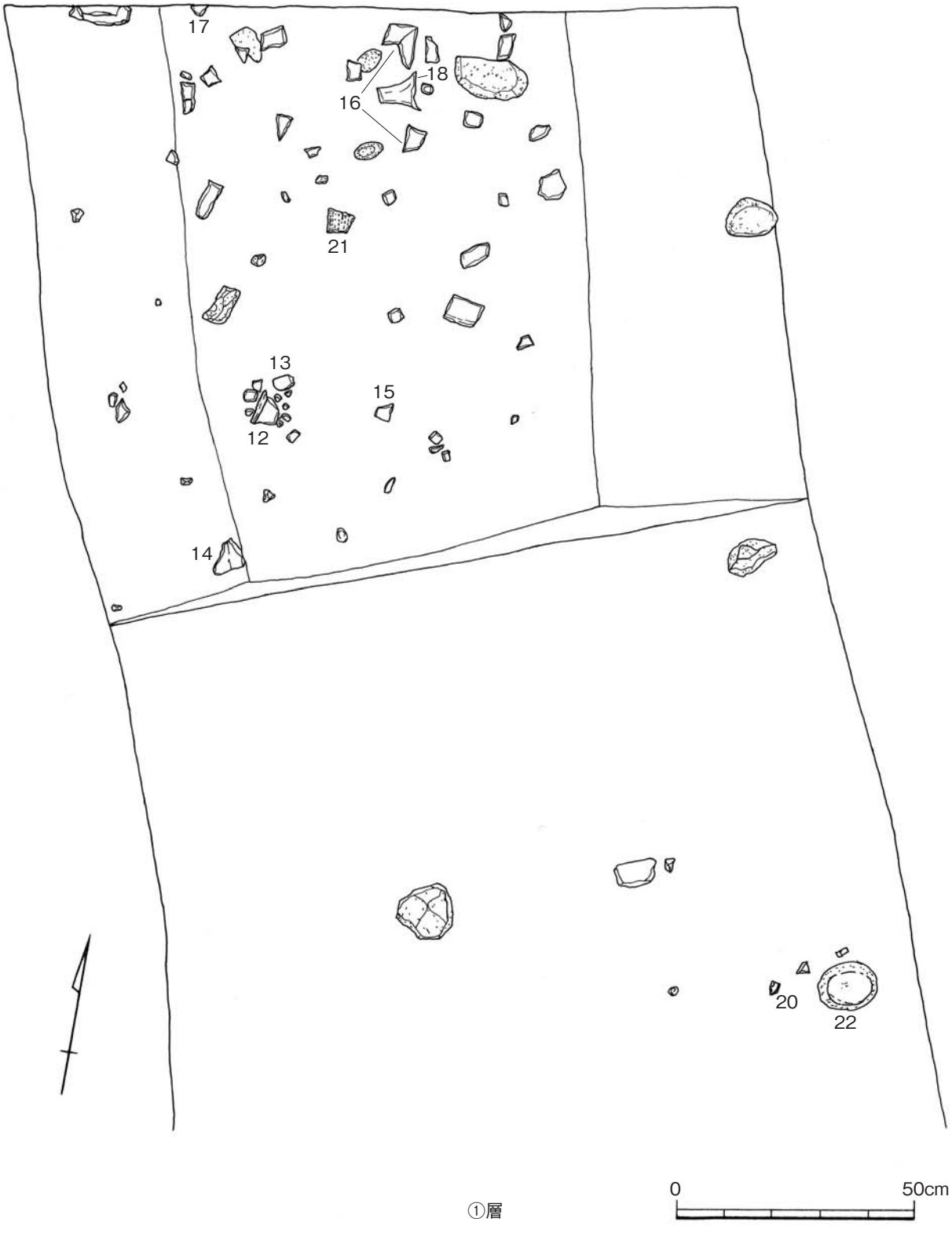


図11　1b区1号溝(1)

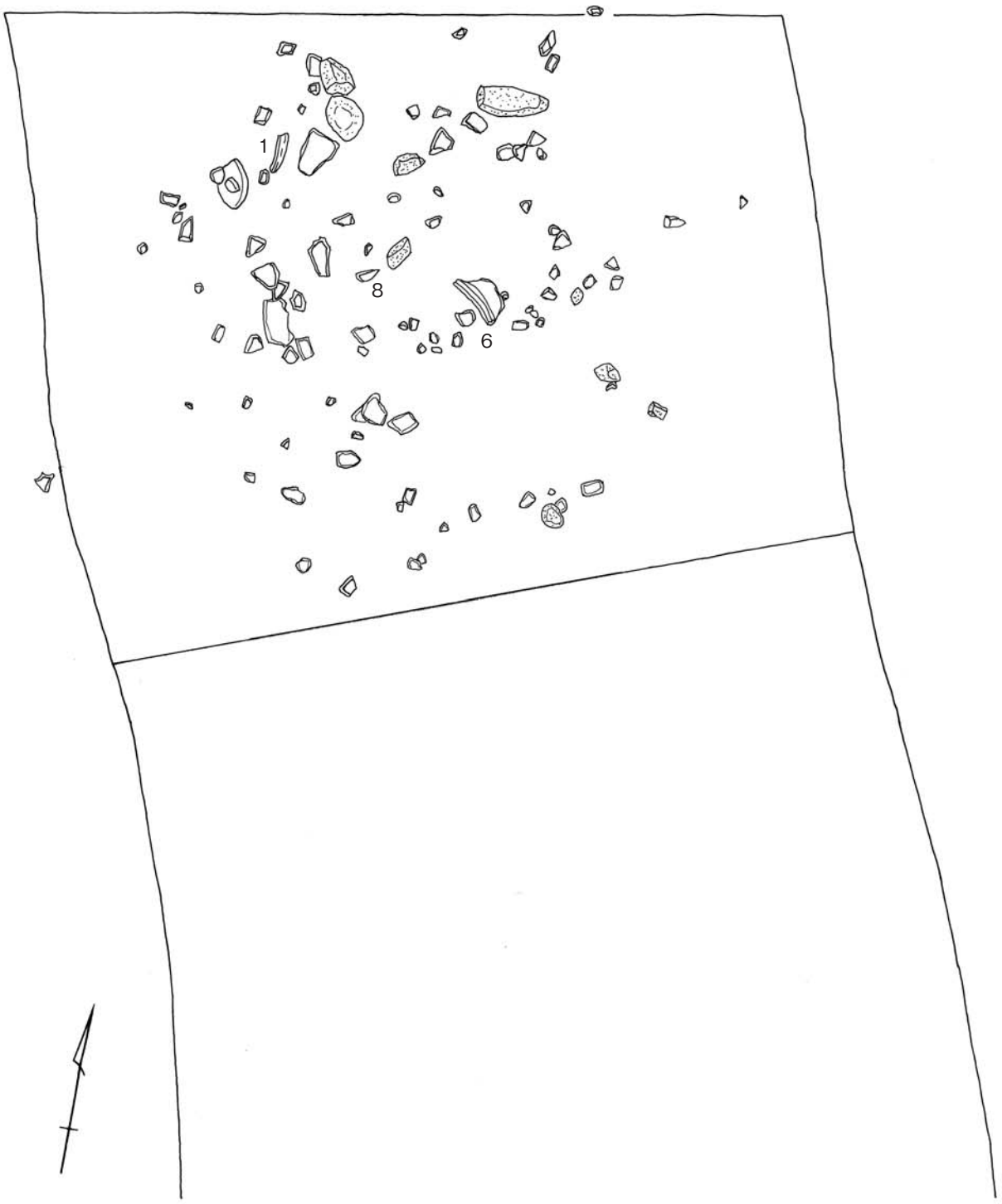


図12　1b区1号溝(2)

図13　1b区1号溝(3)

図14　1b区1号溝(4)

①層１面

0　50cm

図15　２a 区１号溝(1)

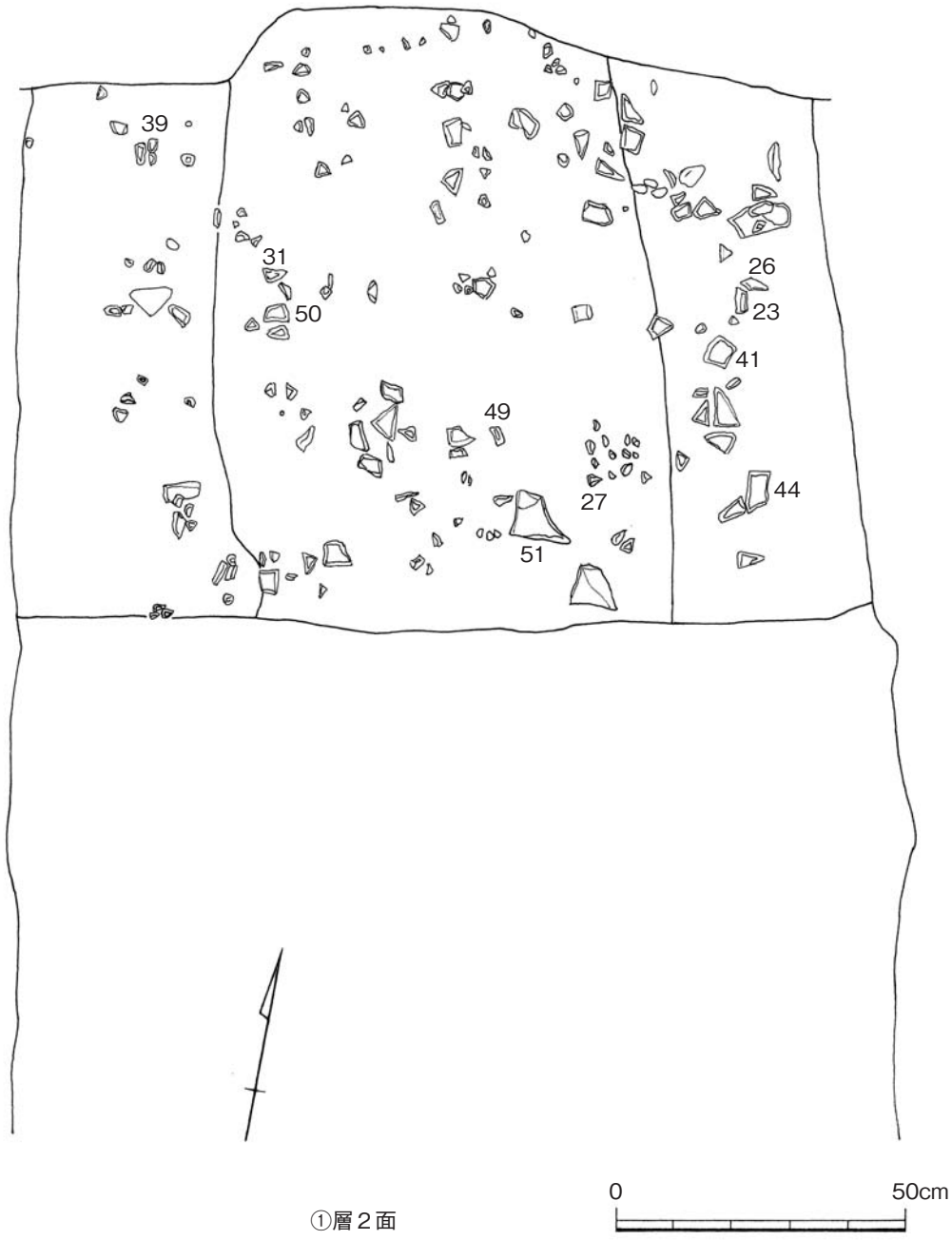


図16　２ａ区１号溝(2)

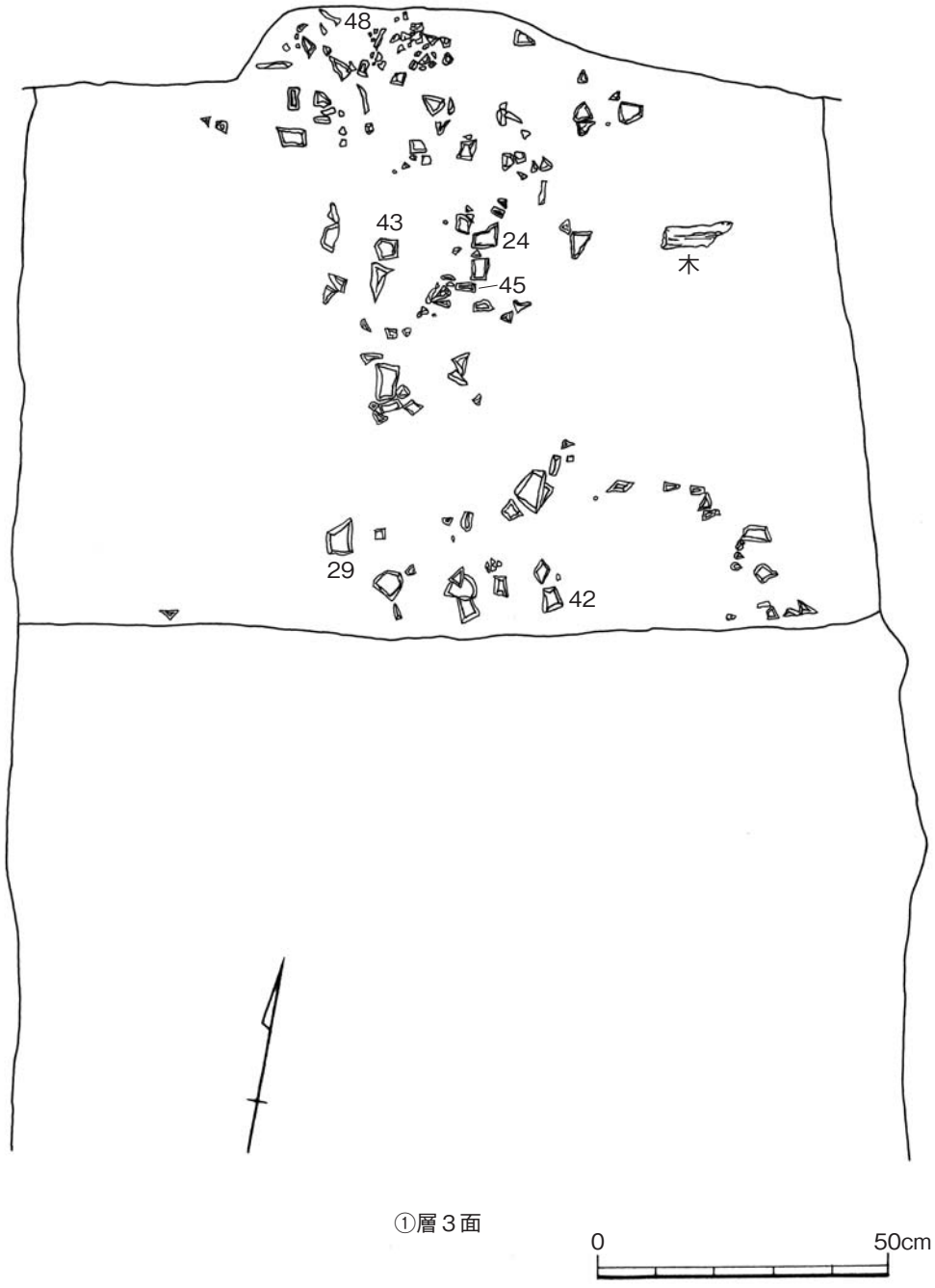
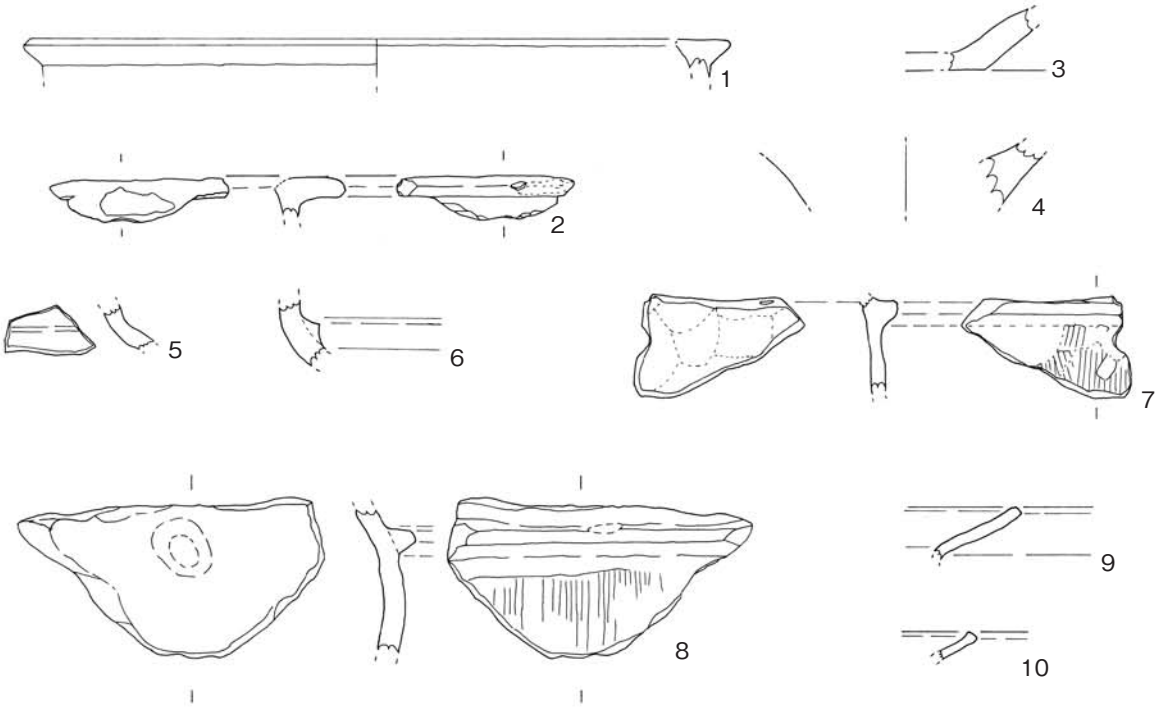
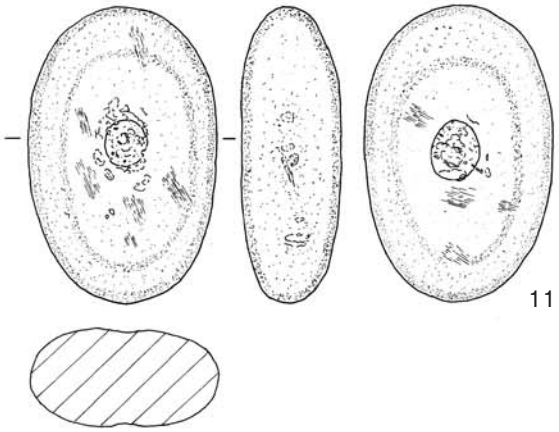


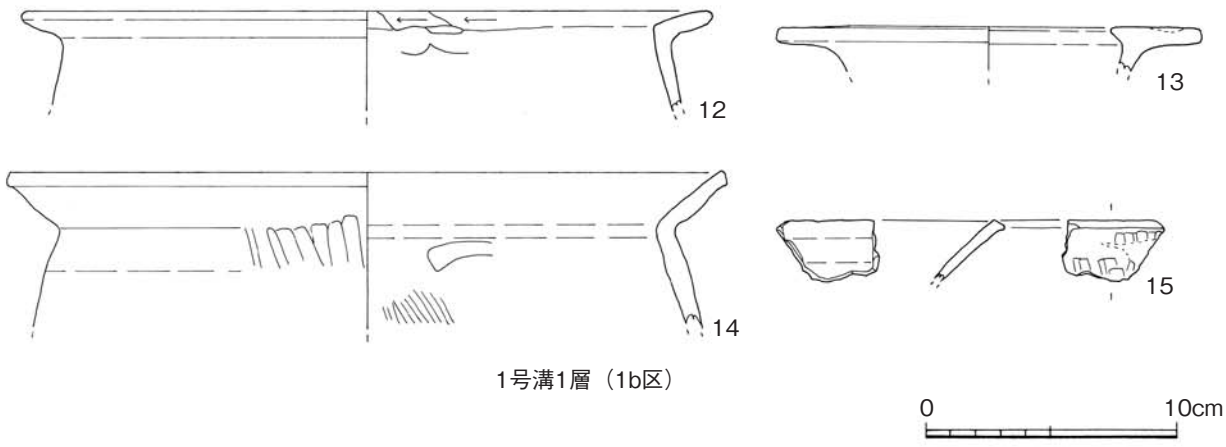
図17　２ａ区１号溝(3)

図18　2a区1号溝(4)



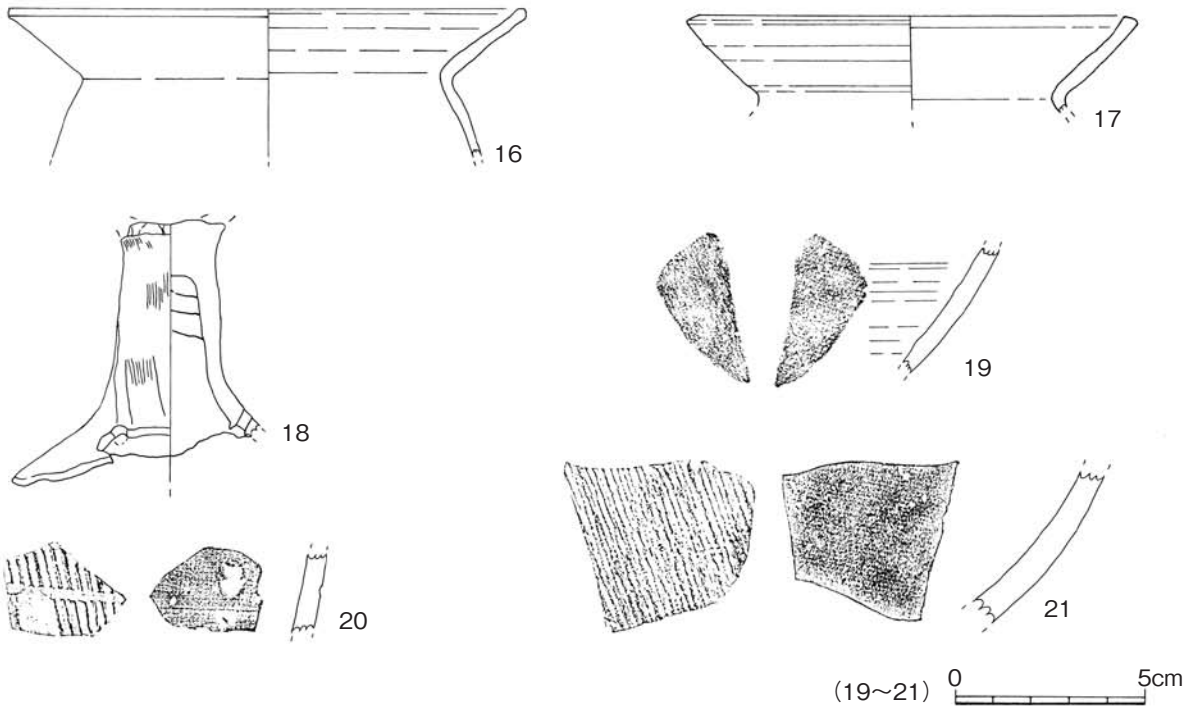


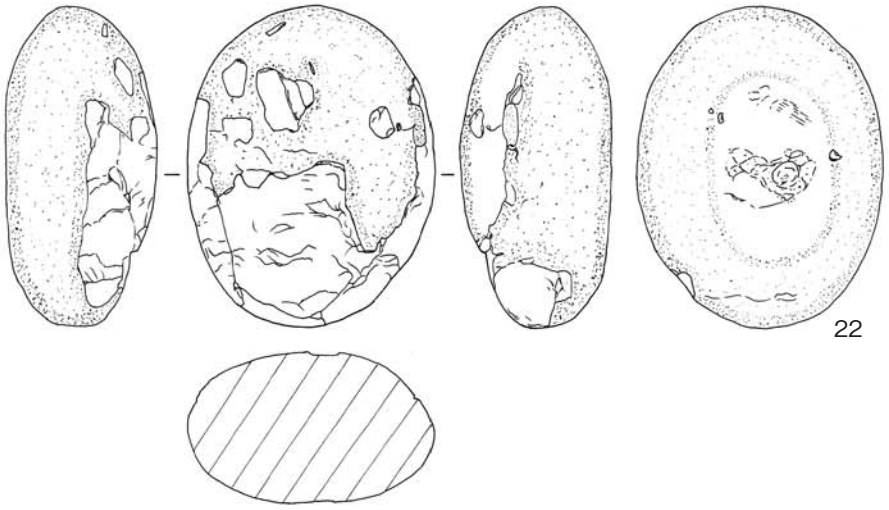
1号溝②層（1b区）



1号溝1層（1b区）

図19　1号溝（1b区）出土遺物





1号溝①層（1b区）

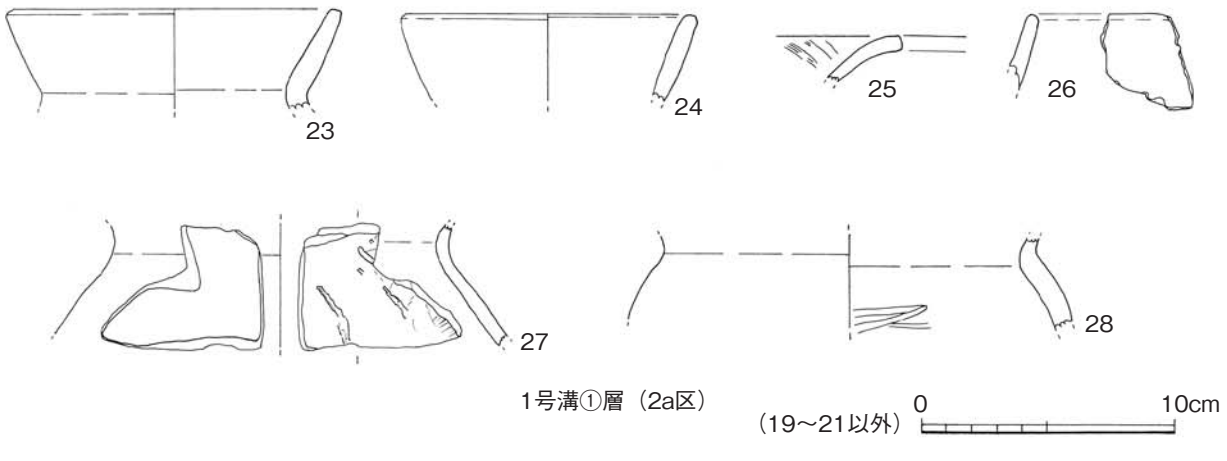
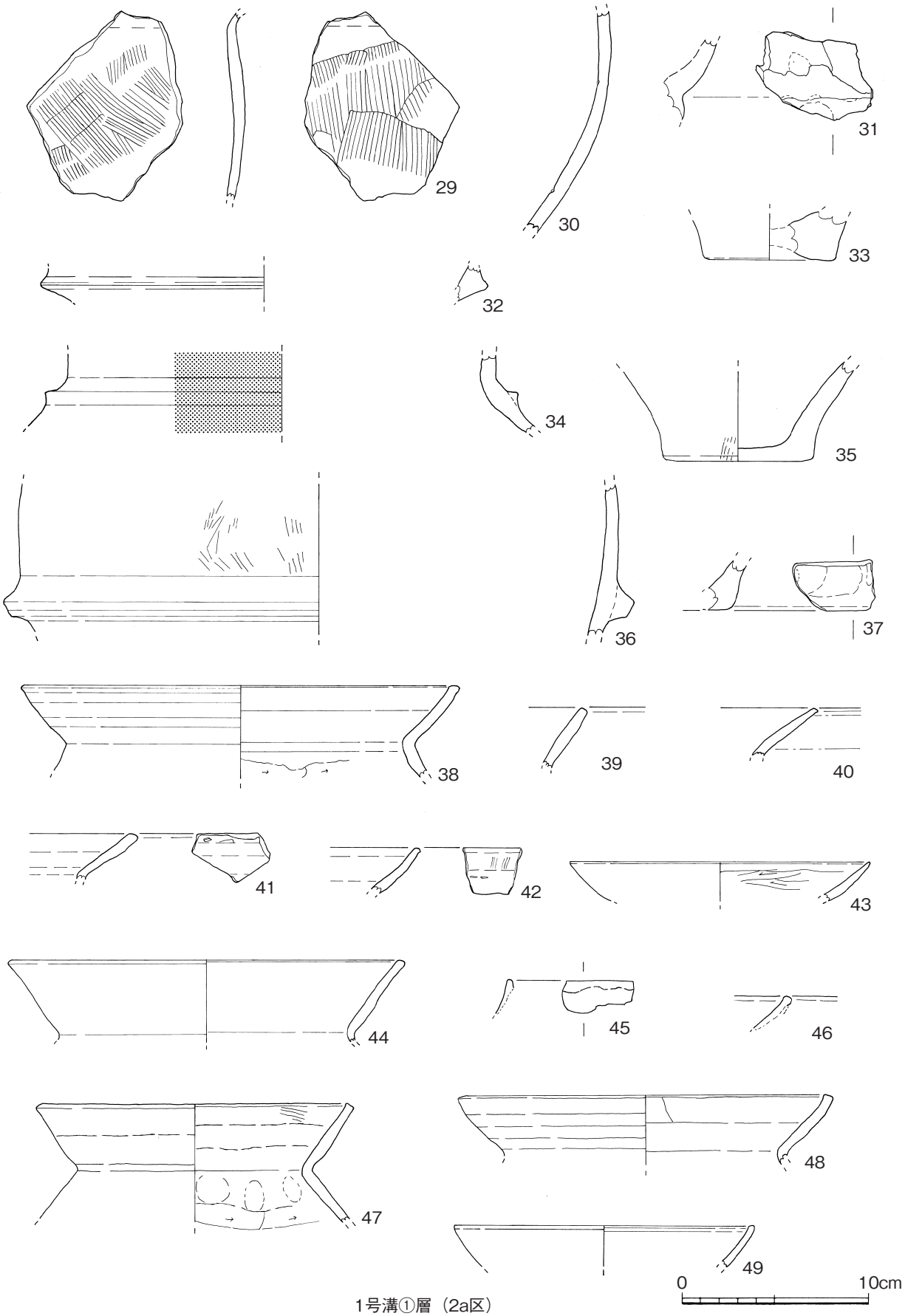
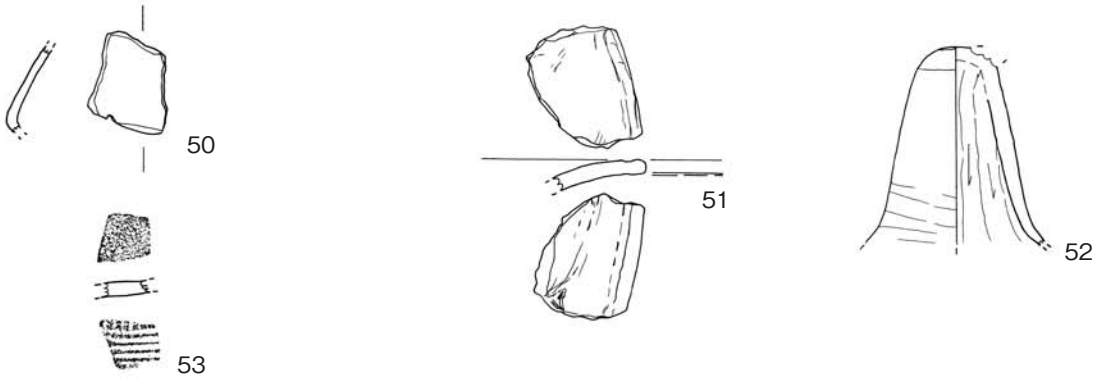


図20　1号溝（1b区，2a区）出土遺物

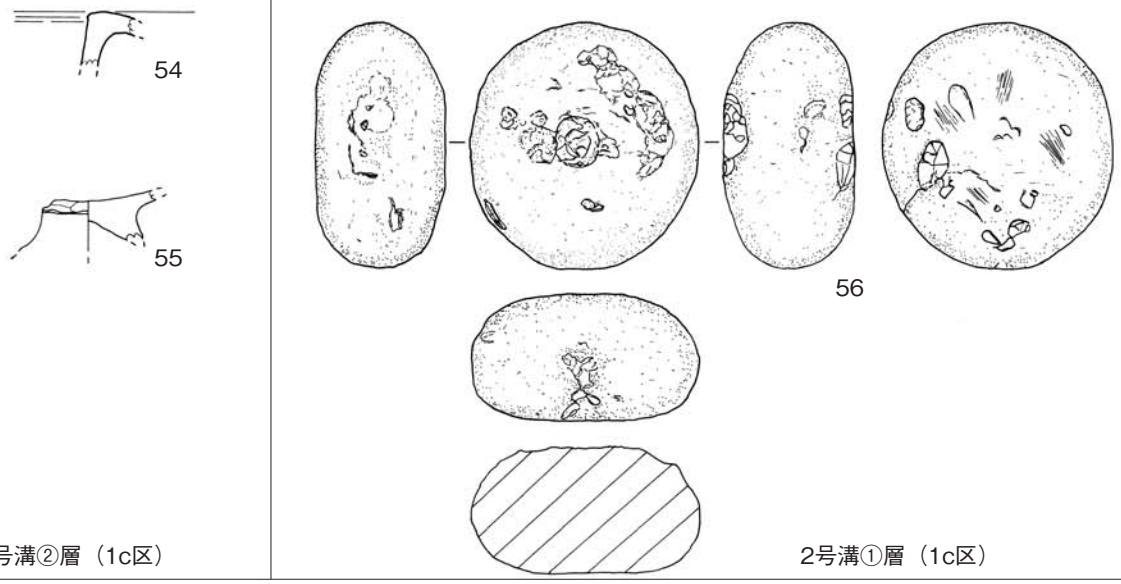


1号溝①層（2a区）

図21　1号溝（2a区）出土遺物



1号溝①層（2a区）

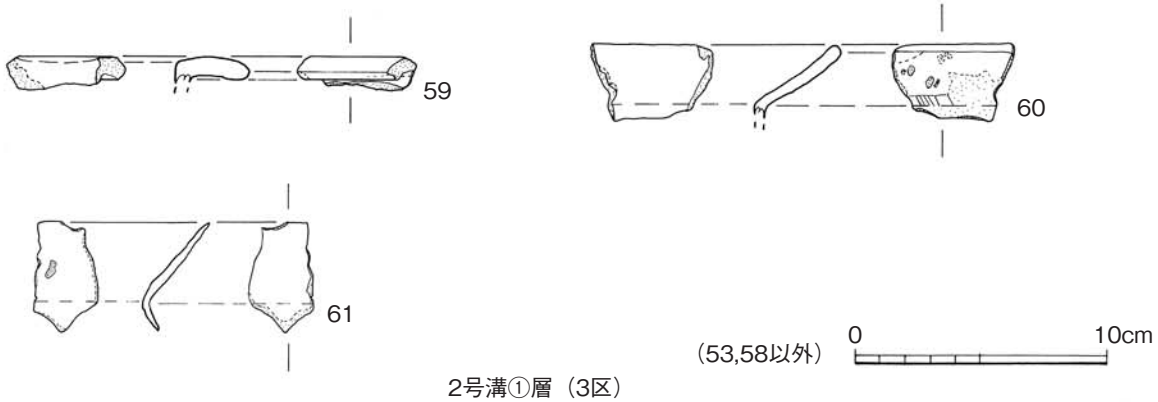


2号溝②層（1c区）

2号溝①層（1c区）

2号溝①層（2b区）

（53,58）



（53,58以外）

2号溝①層（3区）

図22　1号溝（2a区），2号溝（1c区，2b区，3区）出土遺物

〈１号溝①層（１ｂ区)〉（図19、図20）

12は弥生時代中期甕口縁部である。**13**は弥生時代中期壺口縁部である。**14**は弥生時代後期甕口縁部である。**15～17**は古墳時代前期甕口縁部である。**18**は古墳時代前期高坏である。脚裾部に３箇所の焼成前穿孔がある。**19**は楽浪系土器である。内外面とも回転ナデで調整される。**20**は古式陶質土器である。外面は縄（原体Ｚ撚）タタキ後、沈線が廻る。内面はナデ調整である。**21**は古式陶質土器である。外面は縄（原体Ｚ撚）タタキが施され、内面はナデ調整である。**22**は敲石・磨石である。長さ12.7cm、幅9.7cm、厚さ5.95cm、重さ1.140g である。

〈１号溝①層（２ａ区)〉（図20、図21、図22）

23～37は弥生土器である。**23**，**24**，**25**は弥生時代後期の甕である。**26**は口縁部、**27**は壺胴部、**28**は短頸壺胴部である。**29**，**30**は甕胴部である。**32**は断面三角形の突帯が廻る胴部である。**34**は壺肩部で、外面は丹塗りである。**36**は弥生時代後期の断面台形の突帯が廻る壺胴部である。**33**，**35**，**37**は弥生土器甕底部である。

38～52は古墳時代前期の土器である。**38～42**，**44～49**は甕口縁部である。**43**は坏口縁部である。**50**は甕の胴部である。**52**は高坏脚部である。**53**は楽浪系土器底部である。外面は縄（原体Ｓ撚）タタキを二方向に施す。内面はナデ調整が施される。

⑵　２号溝（図23～図29）

【調査】

１層除去後に１ｃ区、２ｂ区、３区で検出した。溝内の北側を掘削し、調査した。南側は遺構内部は掘削せず、検出面の遺物のみを採集した。

【構造】

南北方向に伸びる溝である。１ｃ区では弥生時代以前の無遺物層である３ａ層、４層、５層、６層を掘り込んで構築されている。２ｂ区では弥生時代以前の無遺物層である３ａ層、３ｂ層、３ｃ層を掘り込んで構築されている。３区では、弥生時代以前の無遺物層である３ａ層、３ｃ層を掘り込んで構築されている。幅は１ｃ区では西側肩線が土層観察ベルト内にあるので性格には把握できないが検出面で130cm 以上、２ｂ区では検出面で130cm、３区では検出面で140cm である。底面の幅は１ｃ区では36cm、２ｂ区で45cm、３区で32cm である。断面は逆台形を呈するが、東側にテラス状の平坦部分がある。残存深は１ｃ区では38cm、２ｂ区では39cm、３区では52cm である。底面の標高は１ｃ区では4.00m、２ｂ区では3.98m、３区では3.90m である。

【覆土】

覆土は大きく２層にわかれ、上層である①層は黒褐色粘質土、下層である②層は褐灰色粘質土である。土層を細分すると次のとおりである。

〈１ｃ区２号溝〉（図25）

①ａ層：黒褐色（7.5YR2/2）粘質土。黒色（7.5YR1.7/1）粒子を多量に含む。部分的に暗褐色（7.5YR3/4）が混じる。しまり強。

①ｂ層：灰褐色（7.5YR3/1）粘質土。黒色（7.5YR1.7/1）粒子を多量に含む。赤褐色（5YR4/6）が混じる。しまり強。

②ａ層：褐灰色（7.5YR4/1）粘質土。部分的に赤褐色（5YR4/6）が混じる。しまり強。

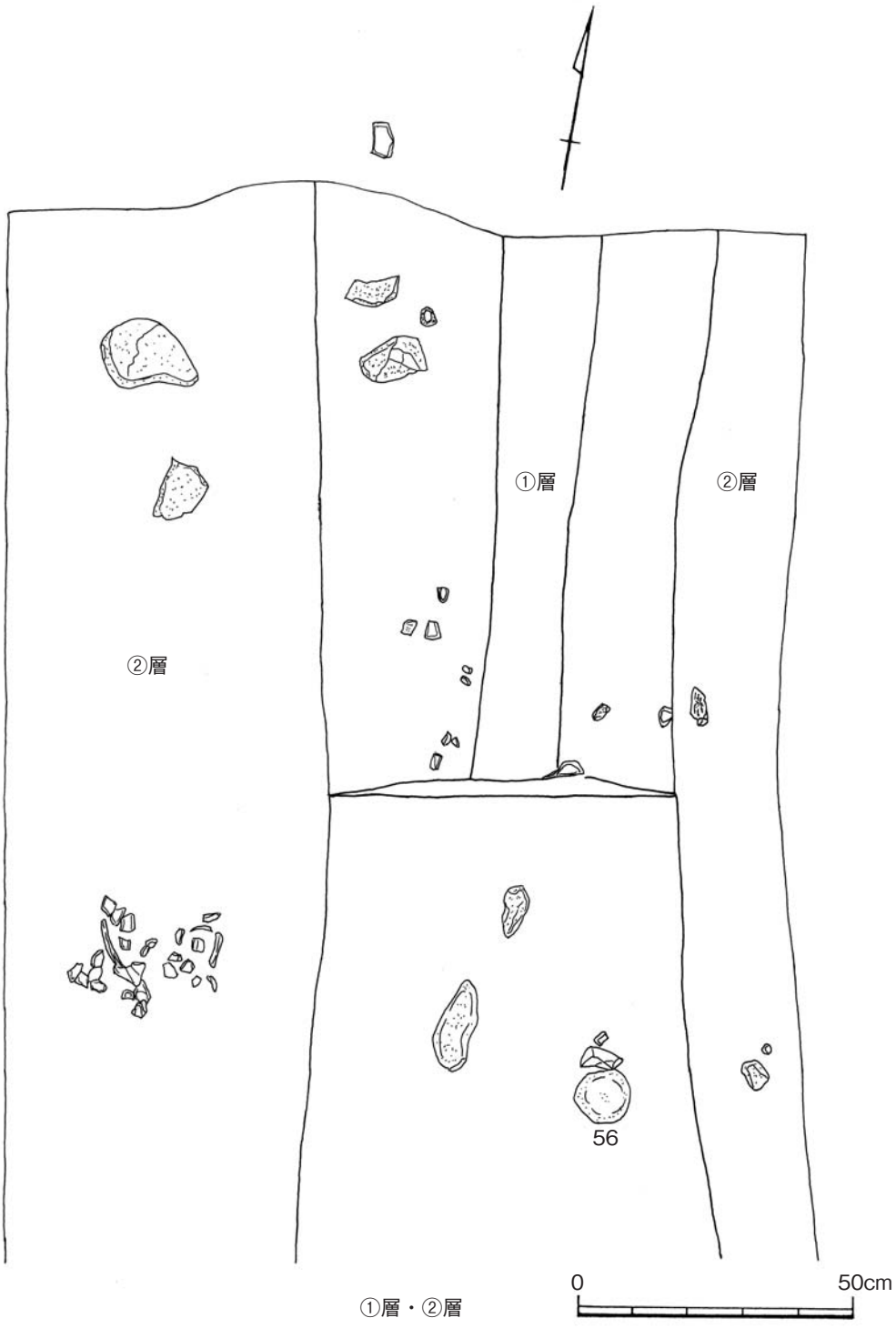


図23　1c区2号溝(1)

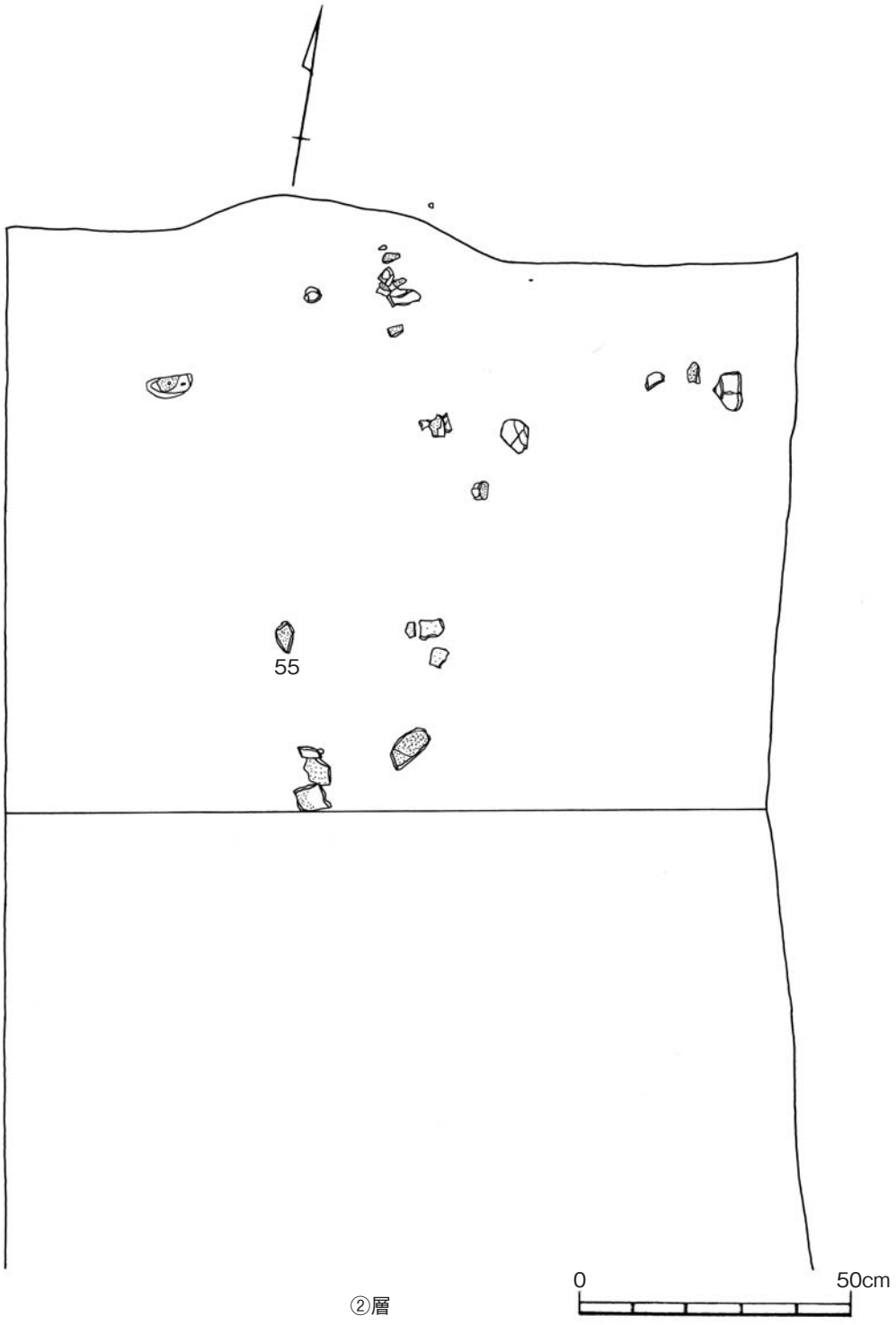


図24　1ｃ区２号溝(2)

図25　1c区2号溝(3)

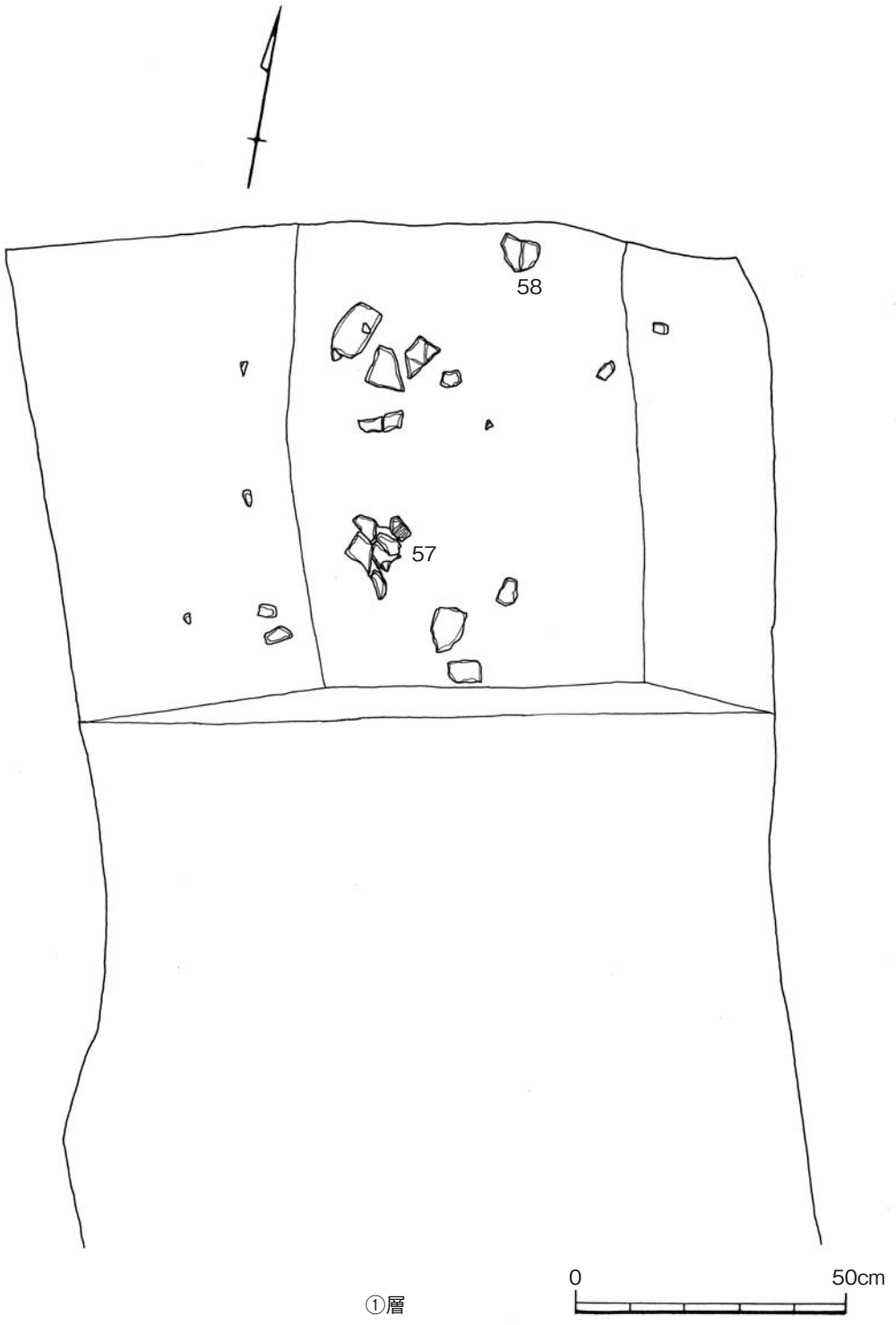


図26　2 b 区 2 号溝(1)

図27　2 b 区 2 号溝(2)

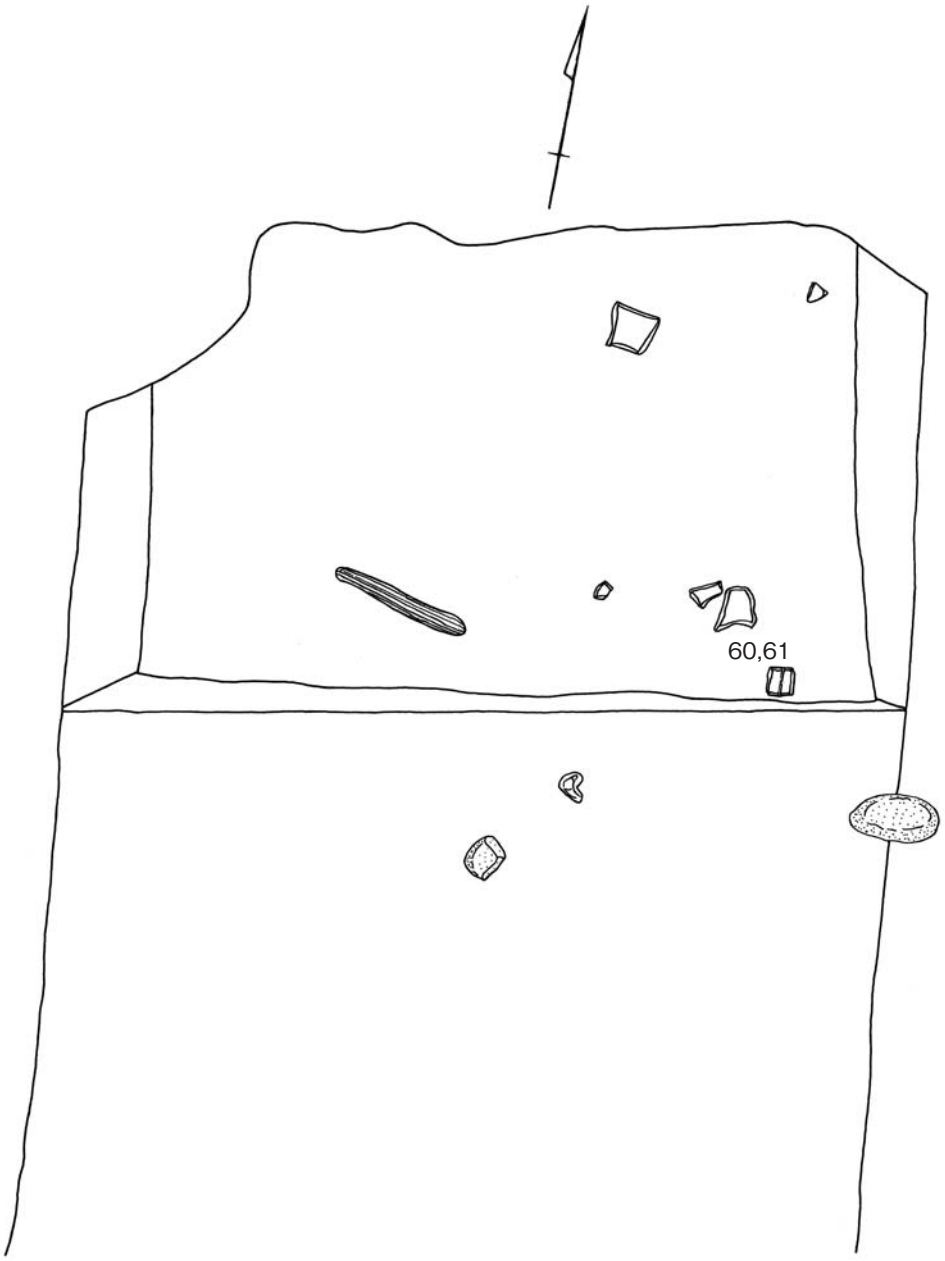


図28　3区2号溝(3)

図29　3区2号溝(4)

②ｂ層：褐灰色（7.5YR4/1）粘質土。褐灰色（7.5YR5/1）と赤褐色（5YR4/6）が混じる。しまり強。

②ｃ層：褐灰色（7.5YR4/1）粘質土。褐灰色（7.5YR5/1）が多く混じる。しまり強。

〈２ｂ区２号溝〉（図27）

①ａ層：黒褐色（7.5YR2/2）粘質土。黒色（7.5YR1.7/1）、褐色（7.5YR4/3）混じり。灰白色（7.5YR8/1）の砂が混じる。しまり強。

①ｂ層：灰褐色（7.5YR4/3）粘質土。黒色（7.5YR1.7/1）混じり。しまり強。

②ａ層：褐灰色（7.5YR4/1）粘質土。褐色（7.5YR4/3）が多量に混じる。しまり強。

②ｂ層：褐灰色（7.5YR5/1）粘質土。褐色（7.5YR4/3）混じり。しまり強。

②ｃ層：褐灰色（7.5YR4/1）粘質土。褐色（7.5YR4/1）が多量に混じる。しまり強。

〈３区２号溝〉（図29）

①ａ層：黒褐色（7.5YR3/1）粘質土。褐灰色（7.5YR4/1）と暗褐色（7.5YR3/3）が多く混じる。しまり強。

①ｂ層：黒褐色（7.5YR3/1）粘質土。にぶい黄褐色（10YR4/3）と褐色（7.5YR4/4）混じり。黒色（7.5YR1.7/1）粒子多く含む。しまり強。

①ｃ層：黒褐色（7.5YR3/1）粘質土。黒色（7.5YR1.7/1）が帯状にはいる。しまり強。

②ａ層：褐灰色（7.5YR4/1）粘質土。黒色（7.5YR1.7/1）と灰褐色（7.5YR6/2）が粒状に混じる。しまり強。

②ｂ層：褐灰色（7.5YR4/1）粘質土。褐色（7.5YR4/4）が粒状に混じる。しまり強。

【遺物出土状況】

１号溝と比較すると遺物量は少ない。①層でも②層でも遺物が出土するが、②層出土遺物は少ない。遺物の大部分は磨耗が甚だしい小片であり、流れ込みや土層堆積段階での埋没によるものと考えられる。人為的に据え置いた状況の遺物は確認されなかった。

【遺物】

〈２号溝②層（１ｃ区）〉（図22）

54は弥生時代中期の甕口縁部である。**55**は古墳時代前期の高坏脚部である。

〈２号溝①層（１ｃ区）〉（図22）

56は敲石・磨石である。長さ9.7cm、幅9.0cm、厚さ5.1cm、重さ745g である。

〈２号溝①層（２ｂ区）〉（図22）

57は古墳時代前期甕胴部である。**58**は甕口縁部であるとみられる。外反する口縁で口縁部を肥厚させる。肥厚部下端には刻目が連続的に加えられる。口縁部とみた場合、擬粘土帯土器である可能性がある。ただし、天地が逆で壺の頸部に隆帯が付加されたものである可能性もある。

〈２号溝①層（３区）〉（図22）

59は弥生時代中期の甕口縁部である。**60**，**61**は古墳時代前期の甕口縁部である。

⑶　1号遺構（図30）

【調査】

1層除去後に検出した。1a区西側で検出した。その後、調査区北側を拡張して1層を除去し、延伸状況を確認した。遺構内部は掘削せず、検出面の遺物のみを採集した。

【構造】

南北方向に溝状に伸びる遺構である。弥生時代～古墳時代の包含層である2層を掘り込んで構築されている。幅は検出面で120cmである。南側は円形に収束する。

【覆土】

覆土は検出面観察においては黒褐色（7.5YR3/2）粘質土で、しまりが強い。

【遺物出土状況】

検出面においても多量の遺物が出土している。遺物は遺存状態が比較的良好で、完形に近い器台なども出土している。人為的に投棄され埋没した可能性もあるが、遺構端部にあたるので埋没過程でそれほど大きく位置を動かなかった可能性もある。

【遺物】（図31～図34）

62～80，**99**は弥生土器である。**62**，**63**，**65**は弥生時代中期の甕口縁部で、**64**は甕底部である。**66**は甕棺の口縁部である。**67**は甕胴部である。**68～70**，**72**，**73**，**75**，**78～80**は弥生時代後期～終末期の甕口縁部である。**71**は弥生時代後期前葉の器台である。**74**，**76**，**77**は壺頸部である。**99**は弥生時代中期の蓋で、焼成後穿孔がなされる。

81～98，**100～102**は古墳時代前期の土器である。**81～88**は甕口縁部で、**95**は山陰系の複合口縁壺口縁部である。**89～93**，**98**は甕胴部である。**94**，**96**，**97**は甕底部である。**100～102**は高坏脚部である。**100**は焼成前穿孔が3箇所みられる。**103**は陶質土器の平底の底部である。底部はナデ調整、胴部は内外面回転ナデ調整であるが、外面はミガキ状に調整され、内面には工具痕跡が残る。**104**，**105**は敲石・磨石である。**104**は長さ10.5cm、幅9.7cm、厚さ5.9cm、重さ900gである。**105**は長さ11.3cm、幅10.5cm、厚さ4.6cm、重さ720gである。

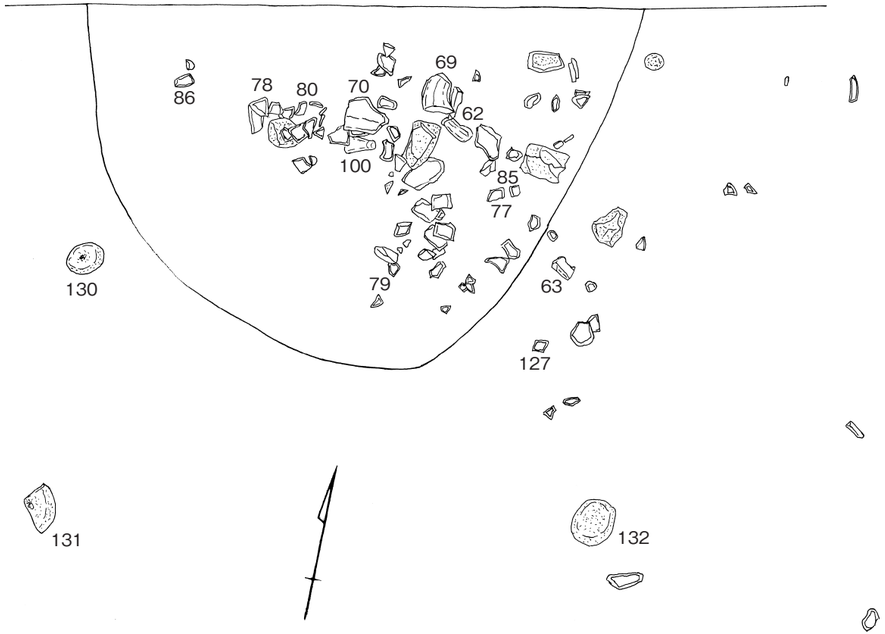
⑷　2号遺構（図35）

【調査】

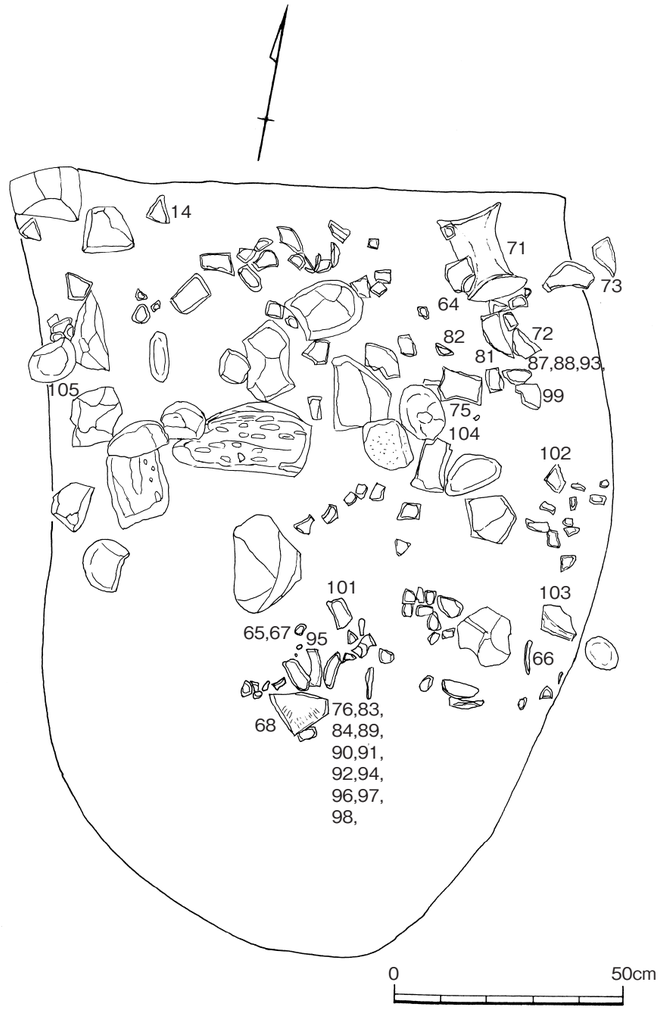
1層除去後に検出した。1a区中央で検出した。検出面まで掘削し、遺物を取り上げた。遺構内部の掘削は行っていない。北側は土層観察用のサブトレンチにより断ち切られているが、ここで堆積土層を観察した。また、調査区南側に土層観察用のサブトレンチを設定し、2号遺構の堆積土を観察した。

【構造】

南北方向に溝状に伸びる遺構である。弥生時代～古墳時代の包含層である2層を掘り込んで構築されている。検出面での幅は南側で97cm、北側で54cmとなっており、北側へ収束していく状況が看取された。収束部は1a区北側のサブトレンチに断ち切られ状況が不分明であるが、1a区北壁には2号遺構の土層が観察されなかったので、サブトレンチ内で収束していることは確実である。断面は皿状で、残存深は北側で4cm、南側で12cmである。底面の標高は北側で4.47m、南側では4.38mであり、北側に収束すると同時に立ち上がっていることがわかる。



検出面（拡張前）



検出面（拡張後）

図30　1号遺構（1a区）

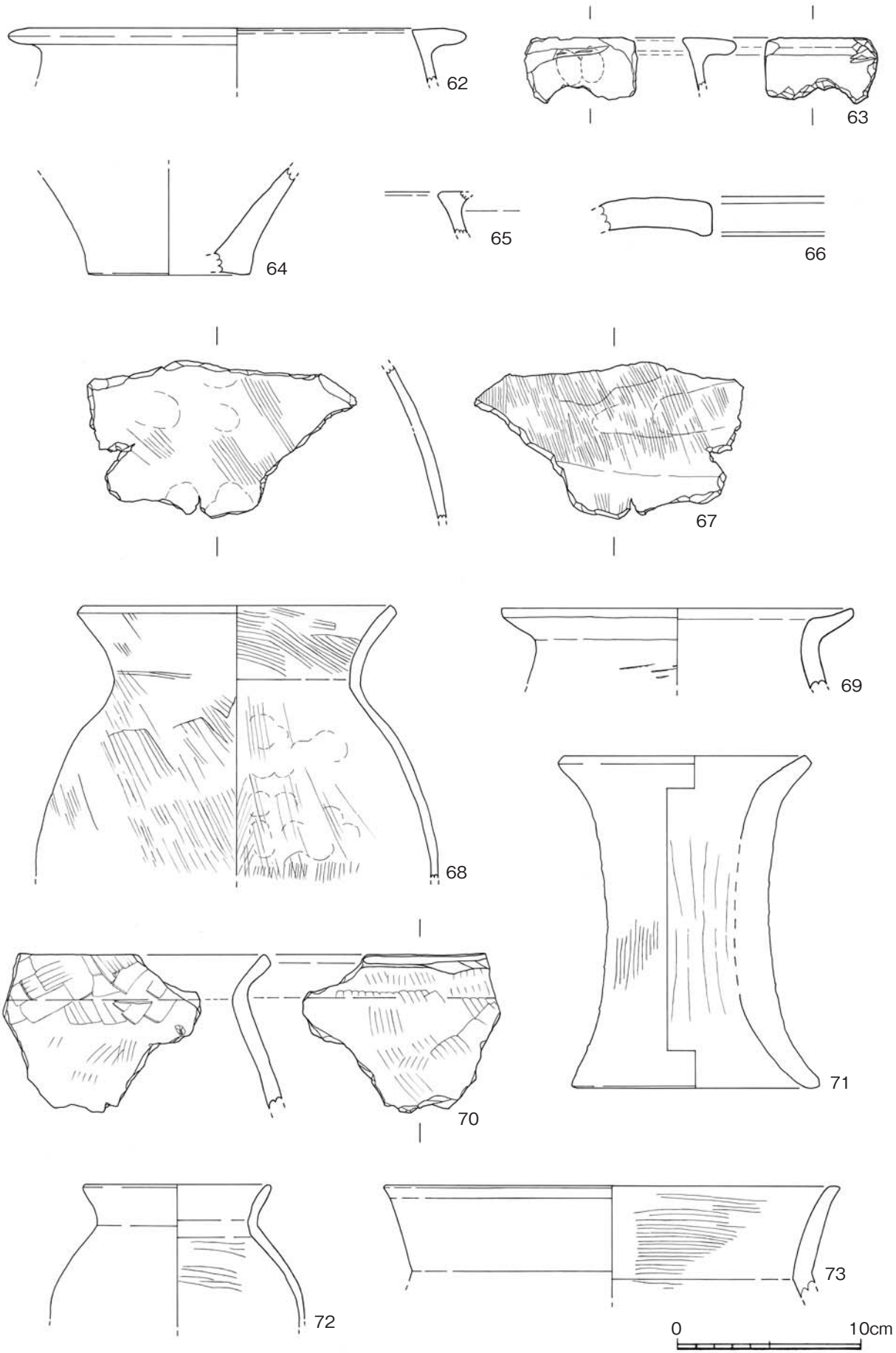


図31　1号遺構（1a区）出土遺物(1)

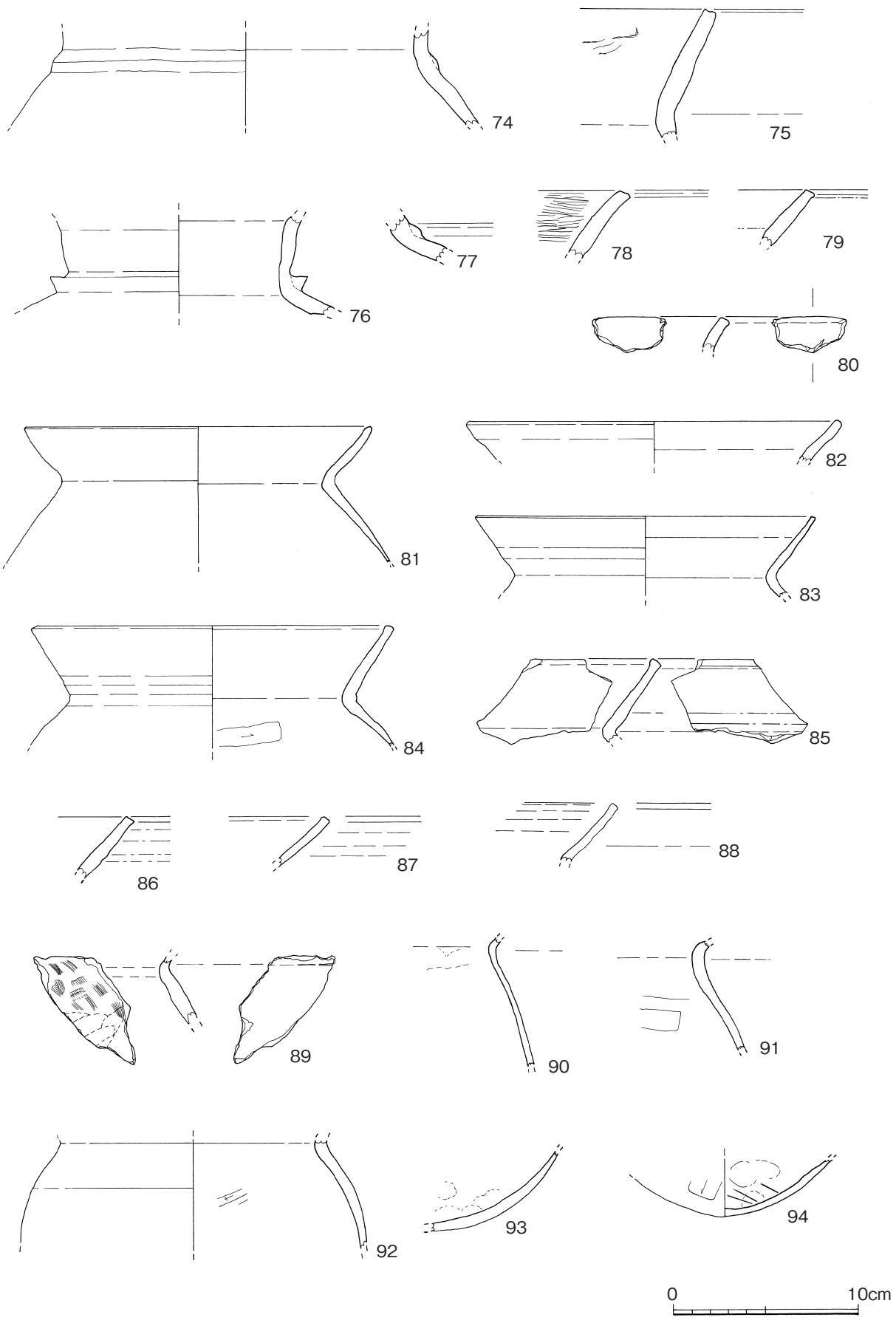


図32　1号遺構（1a区）出土遺物(2)

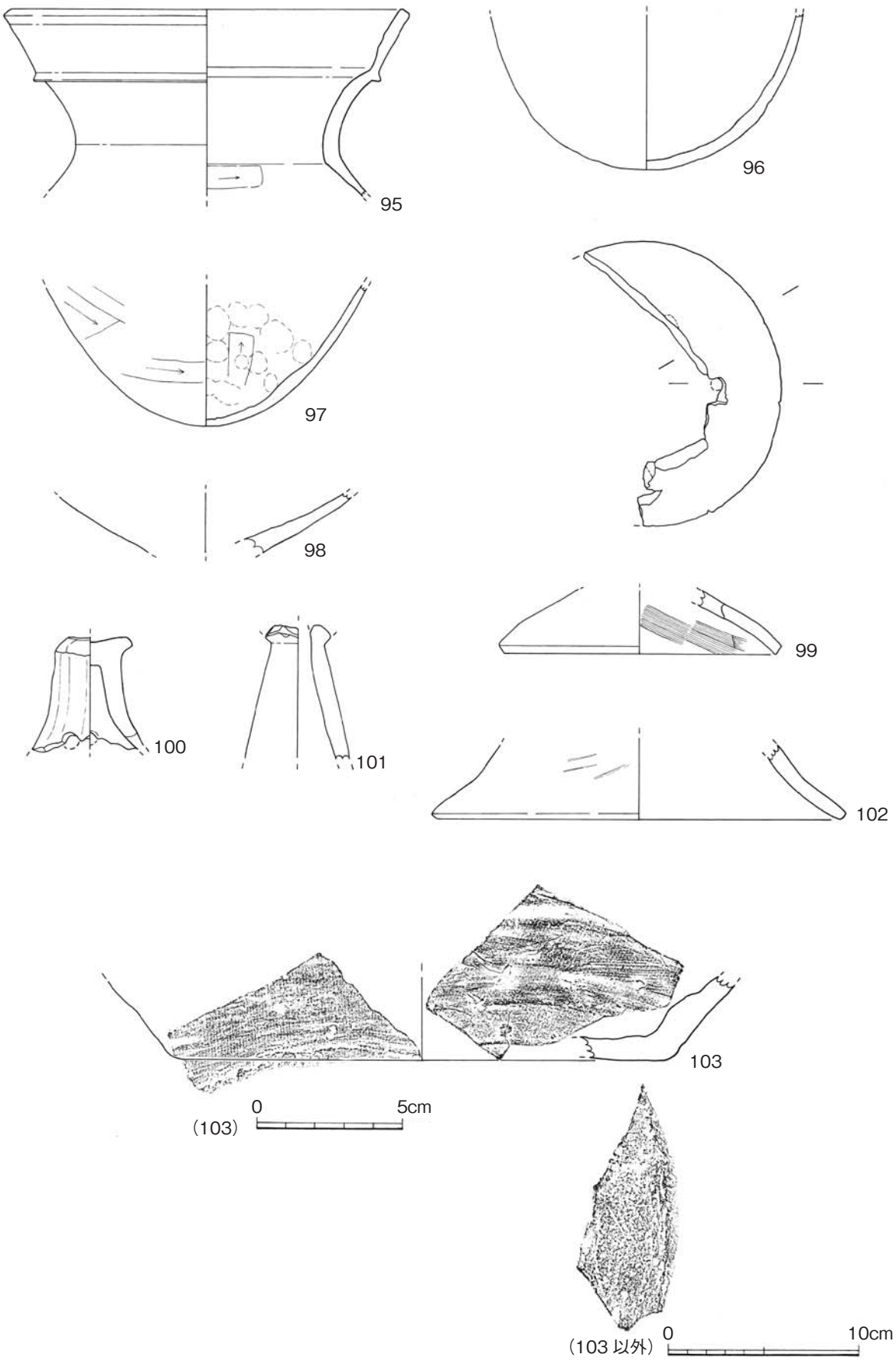


図33　1 号遺構（1 a 区）出土遺物(3)

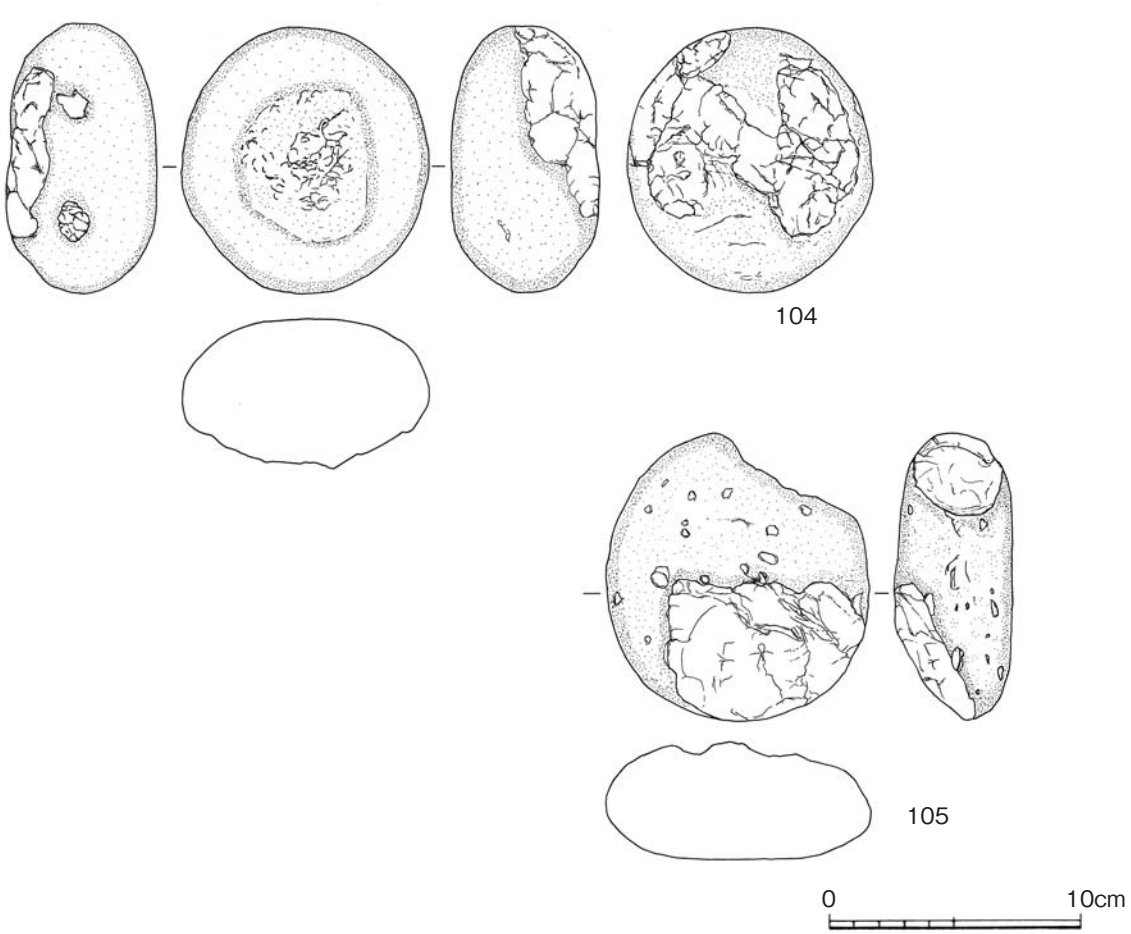


図34　1号遺構（1a区）出土遺物(4)

【覆土】

覆土は大きく2層にわかれ、上層である①層は黒褐色粘質土、下層である②層は褐灰色粘質土である。

①層：黒褐色（7.5YR3/1）粘質土。しまり強。

②層：褐灰色（7.5YR4/1）粘質土。褐色（7.5YR4/2）混じり。しまり強。

【遺物出土状況】

検出面においても多量の遺物が出土している。遺物は遺存状態が比較的それほど良好ではなく、磨耗が甚だしい遺物が多い。流れ込みや土層堆積段階での埋没によるものと考えられる。

【遺物】（図36）

106～120は弥生土器である。**106～114**，**116**は弥生時代中期甕口縁部である。**115**は弥生土器甕底部、**116**は弥生時代中期壺底部である。**118**，**119**は口縁部である。**120**は脚部である。

121～124は古墳時代前期の甕である。**121～123**は甕口縁部で、**124**は頸部である。

125は石鎌の未製品である。残存長5.8cm、幅3.65cm、厚さ0.5cm、残存重14.43gである。**126**は黒曜石製ナイフ形石器片である。残存長1.7cm、幅0.85cm、厚さ0.3cmである。

4.500m
A
A´
①層
②層
122
4.500m
4.500m
B
B´
①層
4.500m
B
B´
125
109
126
119
107
118
123
112
110
113
106
108
111
120
116
A
A´
0
50cm

図35　2号遺構（1a区）

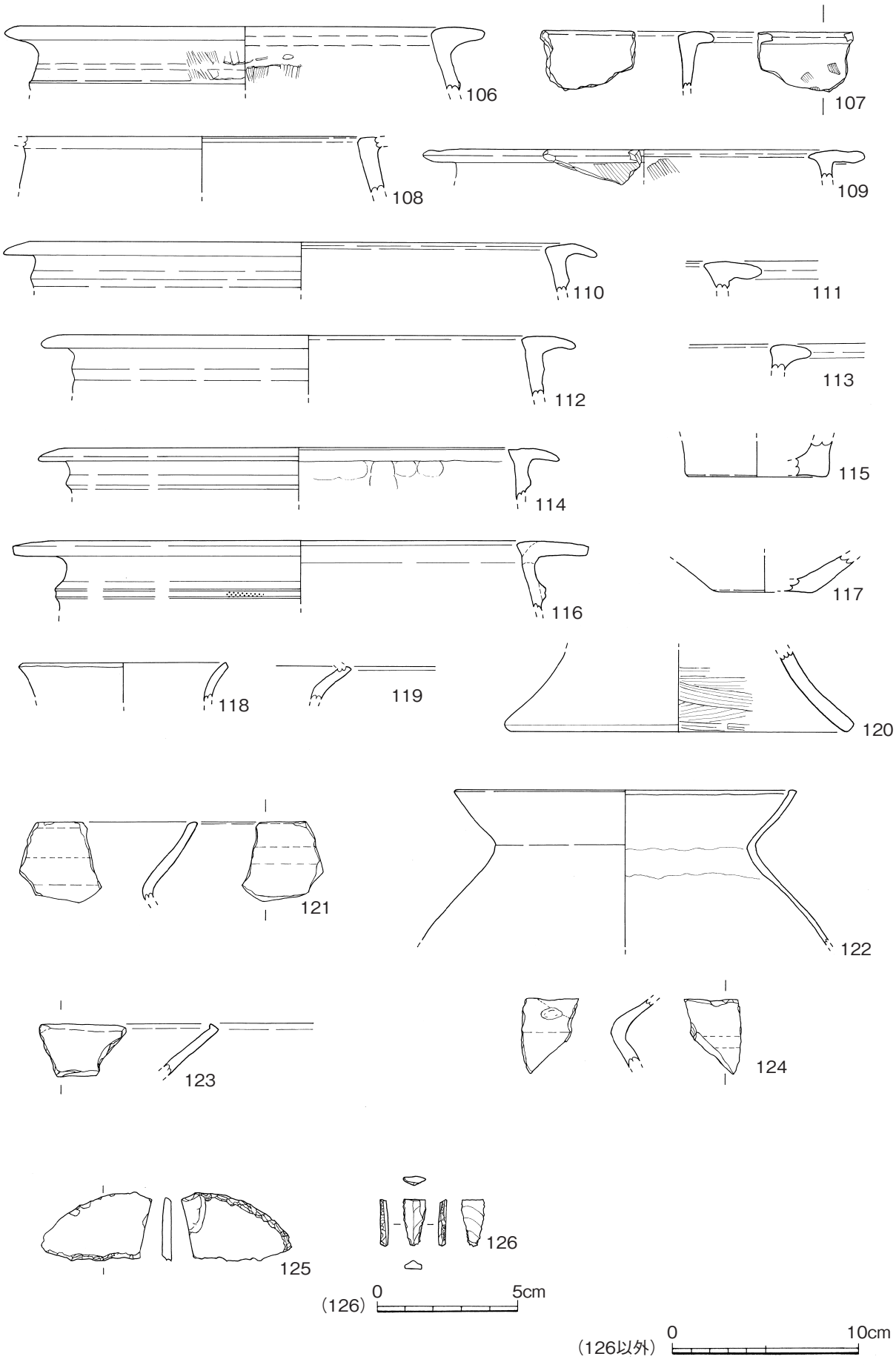


図36　2号遺構（1a区）出土遺物

4．堆積層出土遺物

⑴　2層出土遺物

弥生時代～古墳時代包含層である2層から出土した遺物については次のとおりである。

〈1a区2層〉（図37）

127は弥生時代中期甕口縁部である。**128**は弥生土器甕底部である。**124**は弥生土器胴部である。**130～132**は敲石・磨石である。130は長さ9.5cm、幅8.3cm、厚さ5.6cm、重さ710gである。131は残存長11.3cm、残存幅7.7cm、厚さ5.7cm、残存重590gである。132は長さ10.85cm、幅9.8cm、厚さ6.1cm、重さ945gである。

〈1a区サブトレンチ〉（図37）

土層観察用に調査区北側に開削したサブトレンチで出土したもので2層に伴うものとみられる。**133**，**134**は弥生時代中期甕底部である。**135**は弥生時代中期高坏口縁部である。**136**は古墳時代前期甕頸部である。

〈2a区2層〉（図38）

137は弥生時代中期甕口縁部である。**138**は壺の肩部で断面三角形の突帯が廻る。**139**は弥生時代高坏脚部で外面に丹塗りが施される。**140**は古墳時代前期の高坏口縁部である。

⑵　1層出土遺物

近世～近代包含層である1層から出土した遺物については次のとおりである。

〈1a区拡張部1層〉（図38）

1号遺構の直上の層にあたり、本来は1号遺構に伴う遺物であった可能性がある。**141**は弥生時代中期甕の口縁部とである。**142**は弥生土器底部である。**143**は弥生時代中期高坏脚部である。**144**は古墳時代前期甕口縁部である。**145**は古墳時代前期の小型丸底坩口縁部である。

〈1a区1層〉（図38、図39）

146～154，**156～159**は弥生時代中期甕である。**155**は壺肩部である。**160**は弥生時代後期甕口縁部である。**161**は弥生時代終末期の甕底部である。**162～165**は古墳時代前期甕口縁部である。**166**は古墳時代前期高坏脚部である。**167**は石鎌の未製品である。残存長6.0cm、幅4.7cm、厚さ0.6cm、残存重22.7gである。**168**は楽浪系土器胴部で内外面とも回転ナデ調整が施される。**169**は近世陶器である。

〈1b区1層下面〉（図39）

170，**171**は弥生時代中期甕口縁部である。**172**は須恵器甕である。**173**は弥生土器器台である。**174**は弥生時代中期壺底部である。

〈1b区1層上面〉（図39）

175は古式陶質土器底部附近である。外面は縄（原体Z撚）タタキが2方向で施される。内面は拍子痕があり、不整方向にナデが施される。**176**は古式陶質土器胴部である。外面は縄（原体Z撚）タタキが施された後、沈線を廻らせる。内面は強い横ナデが施される。**177～179**は弥生時代中期甕口縁部である。**180**は弥生時代中期壺口縁部である。**181**は弥生土器甕底部である。**182**は弥生土器高坏脚部である。**183**は古墳時代前期甕口縁部である。**184**は須恵器である。

〈1c区1層下面〉（図40）

185は古墳時代前期高坏皿部である。**186**は弥生時代後期前半壺口縁部である。

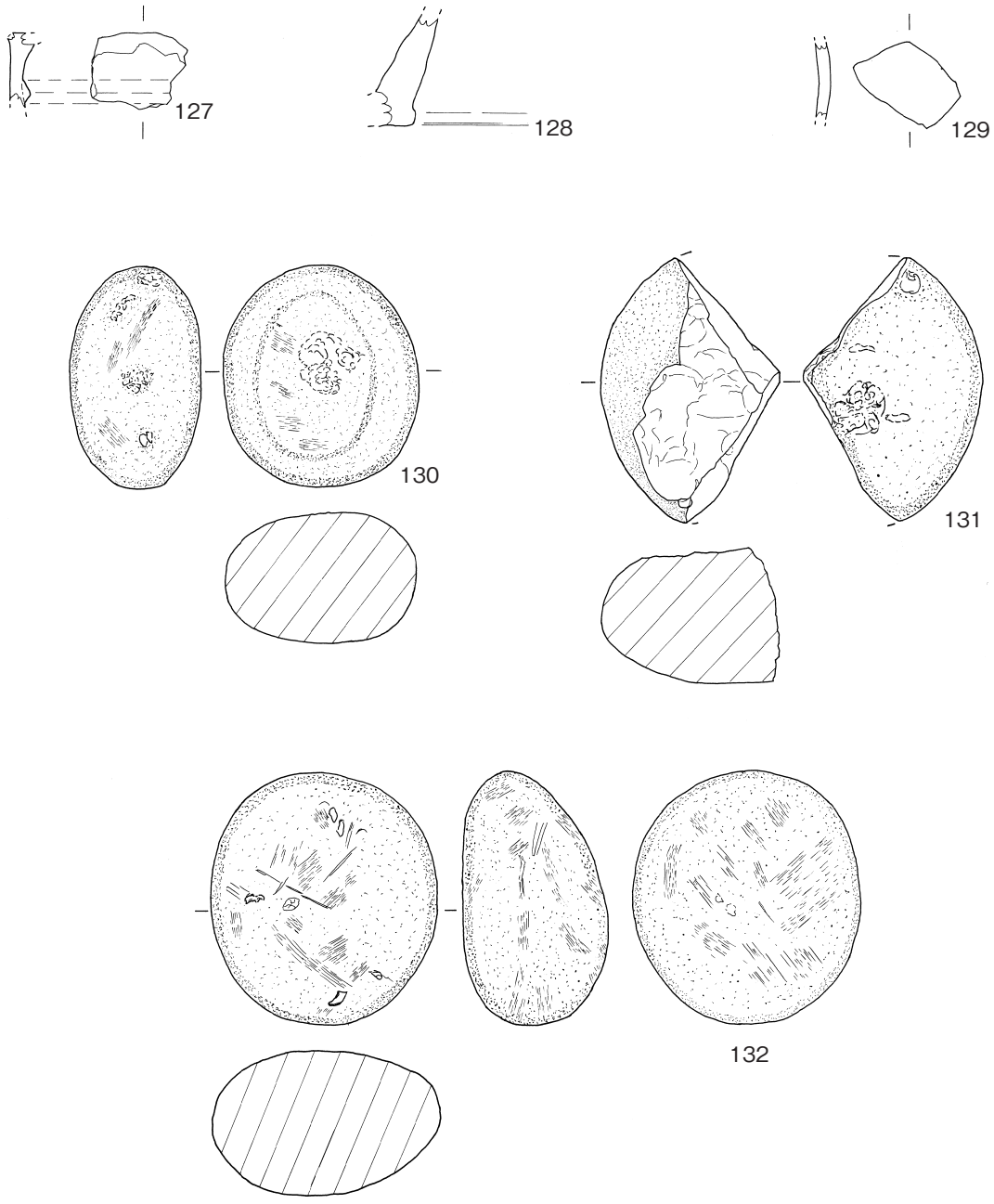
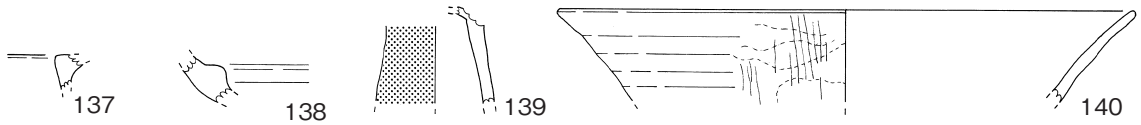
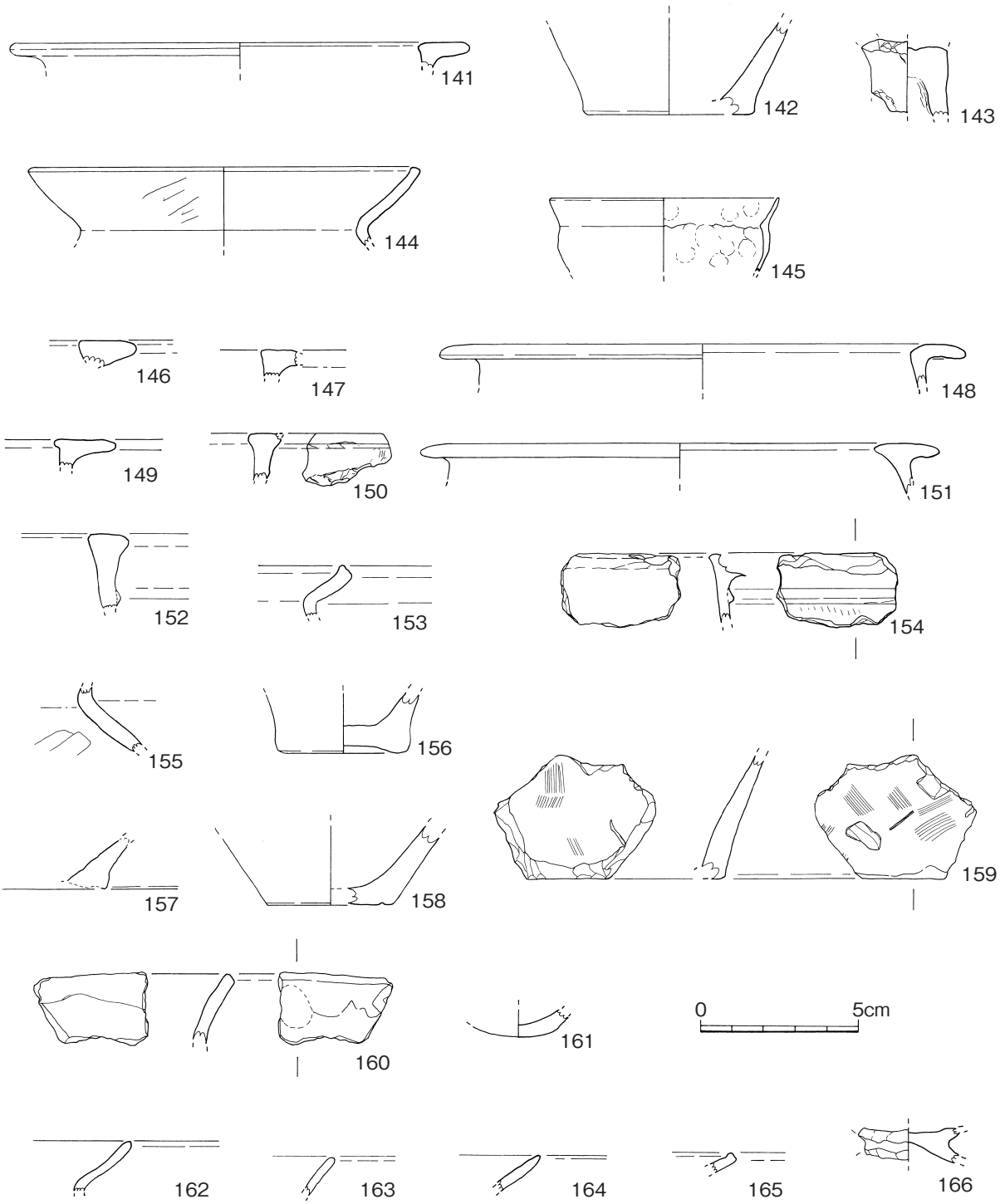


図37　2層・サブトレンチ（1a区）出土遺物



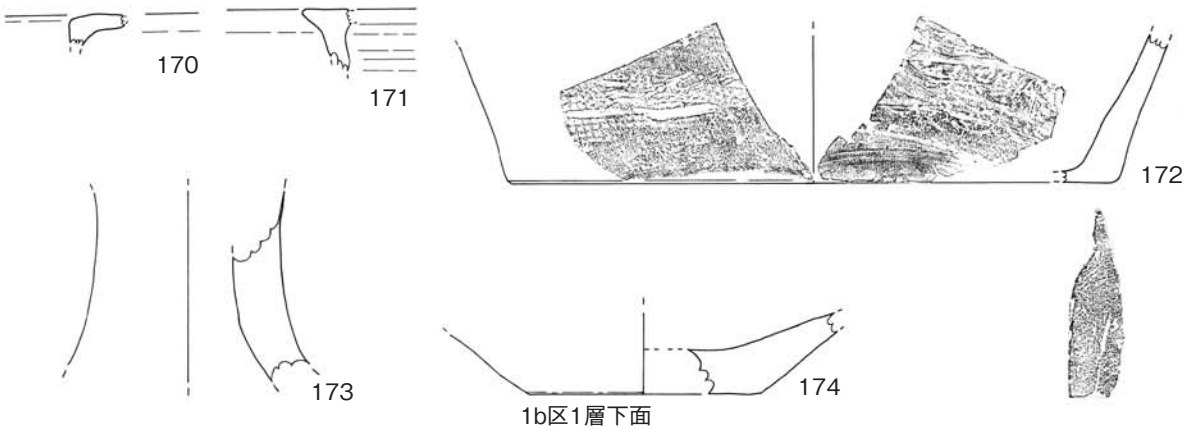
2a区2層



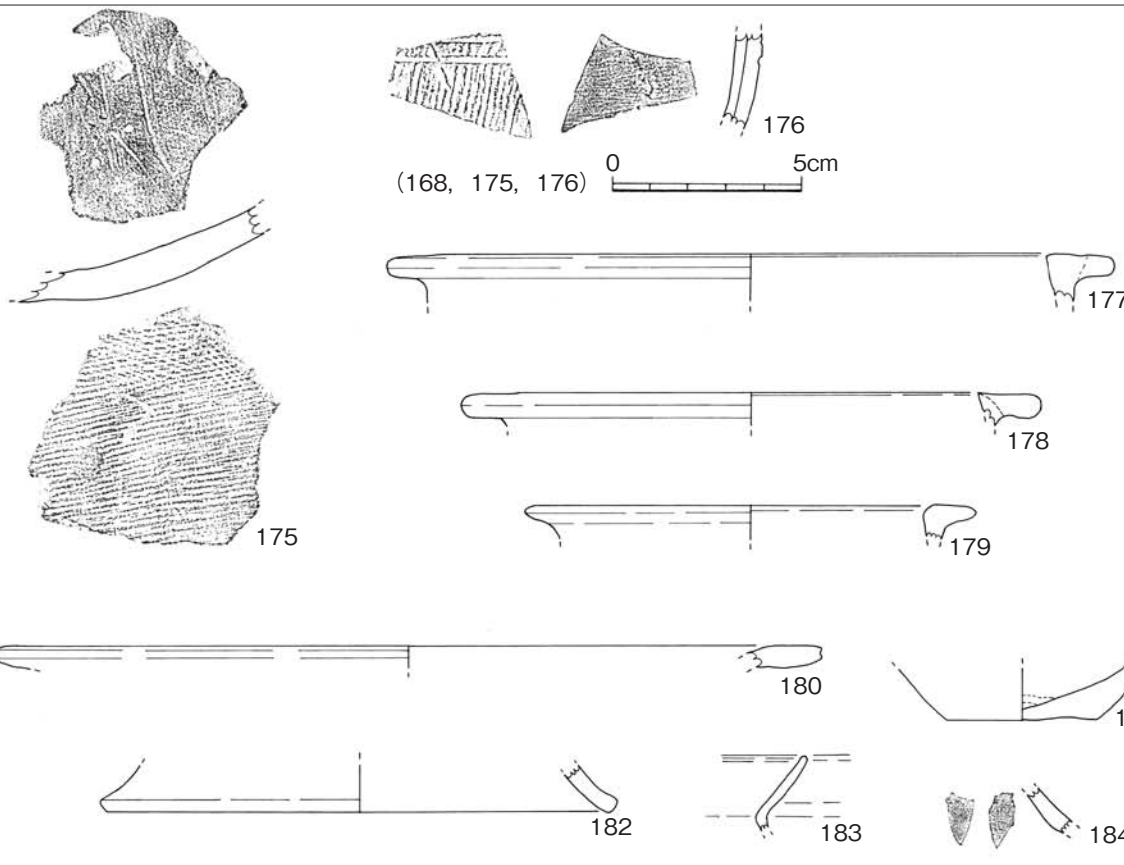
1a区1層

図38　2層（2a区），1層（1a区）出土遺物

1a区1層



1b区1層下面



1b区1層上面

(168, 175, 176 以外)
0
10cm

図39　1層（1a区，1b区）出土遺物

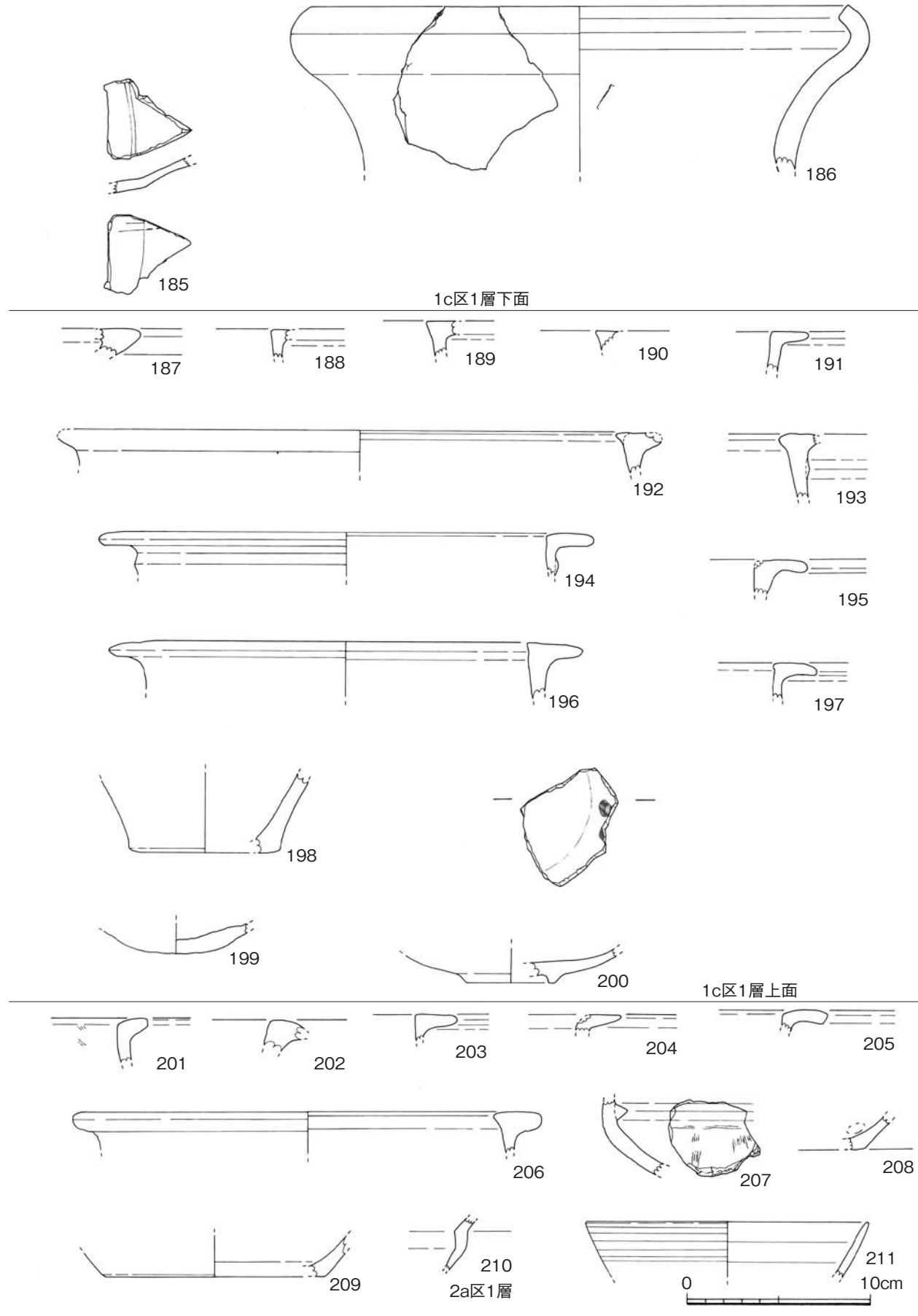


図40　1層（1c区，2a区）出土遺物

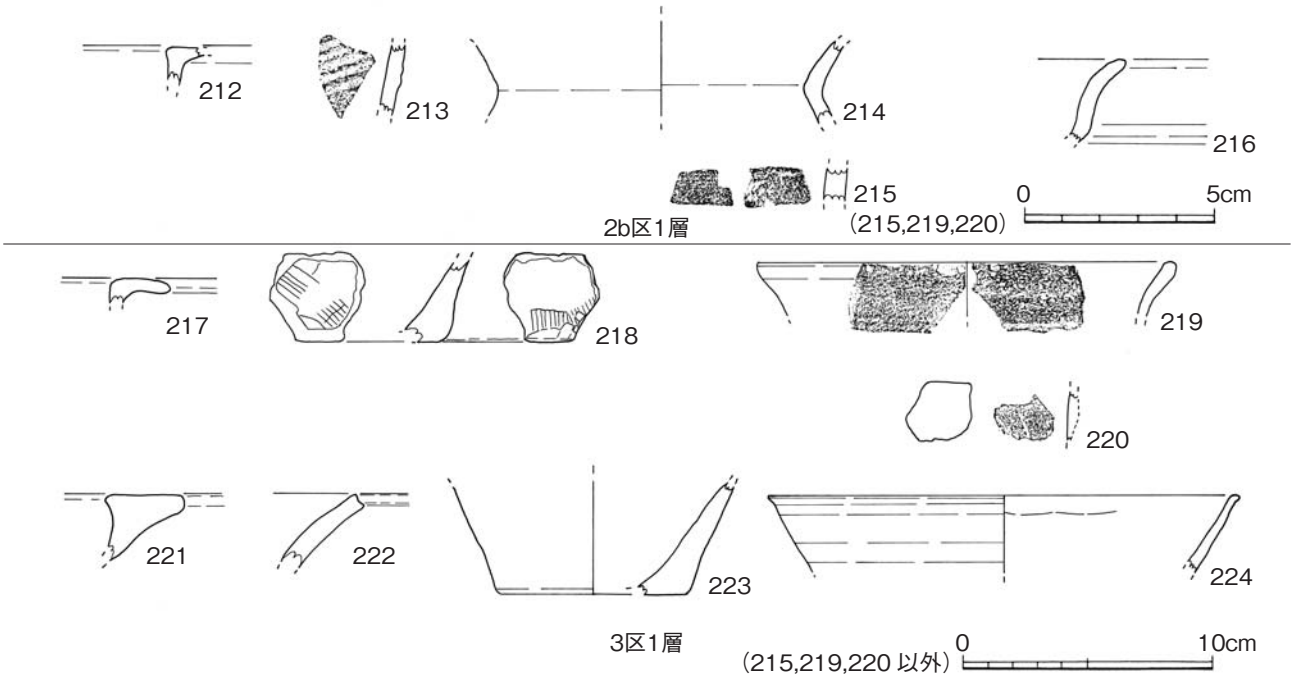


図41　1層（2b区，3区）出土遺物

〈1c区1層上面〉（図40）

187～197は弥生時代中期甕口縁部である。**198**は弥生土器甕底部である。**199**は弥生時代終末期甕底部である。**200**は近世肥前磁器である。

〈2a区1層〉（図40）

201～206は弥生時代中期甕口縁部である。**207**は断面三角形の突帯が廻る壺頸部である。**208**，**209**は弥生土器底部である。**210**は古墳時代前期鉢である。**211**は朝鮮時代磁器碗口縁部である。

〈2b区1層〉（図41）

212は弥生時代中期甕口縁部である。**213**は弥生時代後期甕胴部である。外面には平行タタキが施される。**214**は弥生時代後期甕頸部である。**215**は三韓系瓦質土器無文部である。**216**は弥生時代後期高坏口縁部である。

〈3区1層〉（図41）

217は弥生時代中期甕口縁部である。**218**は弥生土器甕である。**219**は楽浪系壺口縁部である。**220**は古式陶質土器である。**231**は弥生時代中期高坏である。**222**は弥生時代後期甕口縁部である。**223**は弥生土器底部である。**224**は南宋代白磁である。

表１　土器・陶磁器観察表

報告番号	調査区	遺構・層位	時期・型式	器種	部位	口径・底径(cm)	色調（外面）		色調（内面）		胎土	調整（外面）	調整（内面）	備考
							色	Hue	色	Hue				
1	1b	1号溝②層	須玖Ⅰ式	甕	口縁	27.8	にぶい褐 明褐	7.5YR5/4 7.5YR5/6	にぶい褐	7.5YR5/4	石英・長石	磨耗	磨耗	長石が大粒
2	1b	1号溝②層	須玖Ⅱ式	甕	口縁		橙 明赤褐	5YR6/8 5YR5/8	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	ナデ	磨耗	各大粒
3	1b	1号溝②層	弥生	甕	底		にぶい黄褐	10YR5/3	赤褐	5YR4/8	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
4	1b	1号溝②層	弥生	甕	胴		明赤褐 褐灰	2.5YR5/6 10YR4/1	橙 黄灰	5YR6/6 2.5Y5/1	長石・石英	ナデ	ナデ	
5	1b	1号溝②層	弥生	壺	肩		橙	5YR7/6	褐	7.5YR4/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
6	1b	1号溝②層	弥生	壺	頸		橙	7.5YR6/6	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英	ナデ	ナデ	
7	1b	1号溝②層	弥生後期	壺	胴		明赤褐 黒	5YR5/6 5Y2/1	明赤褐	5YR5/6	長石・石英・金雲母（微量）	ハケメ	ナデ	
8	1b	1号溝②層	弥生後期	壺	胴		明赤褐	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
9	1b	1号溝②層	古墳前期	甕	口縁		灰白	2..5Y6/2	灰黄	2..5Y7/2	長石・石英	ナデ	ナデ	
10	1b	1号溝②層	古墳前期	甕	口縁		明赤褐	5YR5/6	橙	5YR6/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
12	1b	1号溝①層	須玖Ⅰ式	甕	口縁	27.1	にぶい黄褐	10YR6/4	灰黄褐	10YR4/2	長石・石英	ナデ	ナデ	
13	1b	1号溝①層	須玖Ⅱ式	壺	口縁	16.7	浅黄	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
14	1b	1号溝①層	弥生後期	甕	口縁	28.4	にぶい黄橙	10YR6/4	明褐	7.5YR5/6	長石・石英・砂粒	ナデ	ハケメ	
15	1b	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁		橙	7.5YR7/6	浅黄橙	7.5YR8/4	長石・石英	ナデ	ナデ	
16	1b	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁	20.5	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	石英・長石	磨耗	磨耗	
17	1b	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁	17.8	橙	7.5YR6/6	浅黄橙	10YR8/3	長石・石英・角閃石	ナデ	ナデ	焼成前穿孔３箇所
18	1b	1号溝①層	古墳前期	高坏	脚		にぶい橙	7.5YR7/4	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英	ナデ	ナデ	
19	1b	1号溝①層	楽浪系		胴		灰白	N7/0	灰白	N7/0	泥質	回転ナデ	回転ナデ	
20	1b	1号溝①層	陶質土器		胴		灰	N6/0	灰	N6/0	泥質	縄（原体Ｚ撚）タタキ→沈線	横ナデ	
21	1b	1号溝①層	陶質土器		胴		灰	N5/0	灰	N4/0	泥質	縄（原体Ｚ撚）タタキ	横ナデ	
23	2a	1号溝①層	弥生後期	甕	口縁		灰黄褐	10YR4/2	灰黄褐	10YR4/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
24	2a	1号溝①層	弥生後期	甕	口縁	11.6	浅黄橙	10YR8/3	灰白	10YR8/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
25	2a	1号溝①層	弥生後期	甕	口縁		灰白 明黄褐	10YR8/2 10YR6/6	にぶい黄橙 にぶい黄橙	10YR7/3 10YR7/4	長石・石英	磨耗	磨耗	
26	2a	1号溝①層	弥生		口縁		灰黄褐	10YR4/2	にぶい黄褐	10YR4/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
27	2a	1号溝①層	弥生後期	甕	頸		褐灰	10YR4/1	褐灰	10YR5/1	長石・石英・赤粒	ナデ	ハケメ	
28	2a	1号溝①層	弥生後期	甕	口縁	19.8	橙	5YR6/6	にぶい黄	2.5Y6/3	長石・石英・金雲母	磨耗	ハケメ	
29	2a	1号溝①層	弥生後期	甕	胴		にぶい黄褐 黒	10YR5/3 2.5YR2/1	灰黄 灰黄褐	2.5YR6/2 10YR4/2	長石・石英・金雲母	ハケメ	ハケメ	
30	2a	1号溝①層	弥生	甕	胴		にぶい黄橙	10YR7/2	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
31	2a	1号溝①層	弥生		胴		橙	5YR7/6	褐灰	10YR5/1	長石・石英	磨耗	剥離	
32	2a	1号溝①層	弥生	壺	胴		灰黄褐	10YR5/2	明黄褐	10YR6/6	石英・長石	ナデ	ナデ	
33	2a	1号溝①層	弥生	甕	底	7	橙	5YR6/8	にぶい黄橙	10YR6/4	石英・長石	ナデ	ナデ	
34	2a	1号溝①層	弥生中期	壺	頸		橙	2.5YR6/8	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	丹塗り
35	2a	1号溝①層	須玖Ⅱ式	甕	底	8.1	明黄褐 浅黄	10YR6/6 2.5YR7/3	浅黄	2.5Y7/3	長石・石英	ハケメ	ナデ	
36	2a	1号溝①層	須玖Ⅱ式	壺	胴		にぶい黄橙	10YR7/2	灰白	2.5Y8/2	石英・長石	ハケメ	ナデ	
37	2a	1号溝①層	弥生	甕	底		にぶい橙	2.5YR6/4	暗灰黄	2.5Y5/2	長石・石英・金雲母	磨耗	磨耗	被熱

38	2a	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁	23.4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	ナデ	（口）ナデ、（胴）ケズリ	
39	2a	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁		灰黄褐	10YR5/2	黒褐	10YR3/1	長石・石英・金雲母	横ナデ	横ナデ	
40	2a	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁		にぶい黄褐 にぶい黄褐	10YR5/3 10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
41	2a	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁		にぶい黄褐	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR4/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
42	2a	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁		にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
43	2a	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁	16	橙	5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英	ナデ	磨耗	
44	2a	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁	21.2	橙	7.5YR6/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	
45	2a	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁		橙	5YR6/6	明赤褐	5YR5/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
46	2a	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁		明赤褐	5YR5/6	黒	10YR2/1	石英・長石	ナデ	ナデ	
47	2a	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁	16.9	にぶい橙	7.5YR7/4	黄灰	2..5Y4/1	長石・石英	ナデ	（口）ナデ、（胴）ケズリ	
48	2a	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁	20	橙	5YR6/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	ナデ	横ナデ	
49	2a	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁	16	橙	7.5YR6/6	灰白	5Y7/1	長石・石英・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	
50	2a	1号溝①層	古墳前期	甕	口縁		明赤褐	5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英	磨耗	磨耗	
51	2a	1号溝①層	弥生		口縁		橙 にぶい黄橙	2.5YR6/6 10YR7/2	橙 にぶい黄橙	5YR6/6 10YR7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
52	2a	1号溝①層	古墳前期	高坏	脚		淡赤橙	2.5YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
53	2a	1号溝①層	楽浪系		底		灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/1	泥質	縄（原体S撚）タタキ	ナデ	
54	1c	2号溝②層	須玖Ⅱ式	甕	口縁		にぶい黄	2.5Y6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
55	1c	2号溝②層	古墳前期	高坏	脚		浅黄橙	7.5YR8/6	浅黄橙	7.5YR8/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
57	2b	2号溝①層	古墳前期	甕	口縁		橙 にぶい黄橙	5YR6/6 10YR7/3	橙 にぶい黄橙	5YR6/6 10YR7/3	長石・石英	磨耗	磨耗	
58	2b	2号溝①層	擬粘土帯？	甕？	口縁？		黒 灰黄褐	10YR2/1 10YR5/2	褐 黒褐	7.5YR4/3 7.5YR3/1	長石・石英	ナデ	ナデ	
59	3	2号溝①層	須玖Ⅱ式	甕	口縁		にぶい黄橙 明褐	10YR6/4 7.5YR5/6	黄褐	10YR5/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
60	3	2号溝①層	古墳前期	甕	口縁		橙 明赤褐	5YR6/6 5YR5/6	黒褐 橙	2.5YR3/2 5YR6/6	長石・石英・金雲母	横ナデ	ナデ	
61	3	2号溝①層	古墳前期	甕	口縁		橙 黄灰	7.5YR6/6 2.5Y5/1	橙	5YR7/6	長石・石英・角閃石	磨耗	磨耗	
62	1a	1号遺構	須玖Ⅰ式	甕	口縁	24.6	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英	ナデ	ナデ	
63	1a	1号遺構	須玖Ⅰ式	甕	口縁		にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
64	1a	1号遺構	弥生	甕	底	8.7	橙	2.5YR6/6	にぶい黄褐	10YR4/3	石英・長石	ナデ	ナデ	被熱
65	1a	1号遺構	須玖Ⅰ式	甕	口縁		にぶい黄橙	10YR7/4	橙	2.5YR6/6	石英・長石	ナデ	ナデ	
66	1a	1号遺構	弥生	甕棺	口縁		にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄	2.5Y6/3	長石・石英・赤粒・砂粒	ナデ	ナデ	
67	1a	1号遺構	弥生	甕	胴		にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい黄褐	10YR5/3	長石・石英・金雲母	ハケメ	ハケメ	
68	1a	1号遺構	弥生終末	甕	口縁～胴	17.1	浅黄橙	10YR8/3	橙	2.5YR6/8	長石・石英	ハケメ	ハケメ	
69	1a	1号遺構	弥生後期	甕	口縁	18.8	浅黄	2.5Y7/3	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英	ハケメ	ナデ	
70	1a	1号遺構	弥生後期	かめ	口縁（破片）		灰白	10YR8/2	橙	7.5YR7/6	長石・石英	ハケメ	ハケメ	
71	1a	1号遺構	弥生後期	器台			にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英	ナデ	ナデ	
72	1a	1号遺構	古墳前期	甕	口縁～胴	10.1	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英	ナデ	ナデ・ケズリ	
73	1a	1号遺構	弥生後期	甕	口縁	24.4	橙	7.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ハケメ	
74	1a	1号遺構	弥生	壺	頸		にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英	ナデ	ナデ	

75	1a	1号遺構	弥生後期	甕	口縁		にぶい黄橙 橙	10YR7/4 7.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・砂粒	ナデ	ナデ	
76	1a	1号遺構	弥生	壺	頸		灰白	10YR8/1	灰黄褐	10YR6/2	石英・長石	ナデ	ナデ	
77	1a	1号遺構	弥生	壺	胴		橙	7.5YR6/6	明褐	7.5YR5/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
78	1a	1号遺構	弥生後期	甕	口縁		橙	7.5YR6/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
79	1a	1号遺構	古墳前期	甕	口縁		橙	7.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
80	1a	1号遺構	古墳前期	甕	口縁		にぶい黄橙	10YR5/4	浅黄	2.5Y7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
81	1a	1号遺構	古墳前期	甕	口縁	18.7	橙	5YR7/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	磨耗	磨耗	
82	1a	1号遺構	古墳前期	甕	口縁		橙 灰褐	5YR7/6 7.5YR5/2	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
83	1a	1号遺構	古墳前期	甕	口縁～頸	18.3	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
84	1a	1号遺構	古墳前期	甕	口縁	19.5	灰黄	2.5Y7/2	にぶい黄橙	10YR6/4	長石・石英・金雲母	ナデ	（口）ナデ、（胴）ケズリ	
85	1a	1号遺構	古墳前期	甕	口縁		にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
86	1a	1号遺構	古墳前期	甕	口縁		橙	5YR7/8	橙	2.5YR7/8	長石・石英	磨耗	磨耗	
87	1a	1号遺構	古墳前期	甕	口縁		橙	7.5YR6/6	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英	ナデ	ナデ	
88	1a	1号遺構	古墳前期	甕	口縁		灰黄	2.5Y7/2	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・黒雲母	ナデ	ナデ	
89	1a	1号遺構	古墳前期	甕	肩		にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英	ナデ	ハケメ	
90	1a	1号遺構	古墳前期	甕	肩		橙	5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英	磨耗	磨耗	
91	1a	1号遺構	古墳前期	甕	肩		にぶい黄橙	10YR7/2	灰黄褐	10YR6/2	長石・石英・金雲母	ナデ	（口）ナデ、（胴）ケズリ	鉄分付着
92	1a	1号遺構	古墳前期	甕	肩		橙	7.5YR6/6	にぶい橙	7.5YR7/3	長石・石英・金雲母・角閃石	ナデ	ケズリ	
93	1a	1号遺構	古墳前期	甕	底		浅黄橙	10YR8/4	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
94	1a	1号遺構	古墳前期	甕	底		橙	5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	ケズリ	ケズリ	
95	1a	1号遺構	古墳前期	複合口縁壺	口縁	21	にぶい橙	7.5YR7/4	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英・金雲母・角閃石	ナデ	（口）ナデ、（胴）ケズリ	
96	1a	1号遺構	古墳前期	甕	底		橙	2.5YR6/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	磨耗	磨耗	
97	1a	1号遺構	古墳前期	甕	底		橙	5YR6/6	浅黄橙	7.5YR8/3	長石・石英・金雲母・角閃石	ナデ	ケズリ	
98	1a	1号遺構	古墳前期	高坏	坏		橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英	磨耗	磨耗	
99	1a	1号遺構	弥生中期	蓋	蓋	14.6	にぶい赤褐	Hue5YR5/4	明赤褐	Hue5YR5/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ハケメ	焼成後専穿孔
100	1a	1号遺構	古墳前期	高坏	脚		橙	5YR7/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	ナデ	しぼり痕	焼成前穿孔３箇所
101	1a	1号遺構	古墳前期	高坏	脚		にぶい橙	5YR6/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	しぼり痕	
102	1a	1号遺構	古墳前期		脚		浅黄	2.5Y7/3	黒褐 にぶい黄橙	2.5Y3/1 10YR7/3	長石・石英	剥離	ナデ	
103	1a	1号遺構	陶質土器		底	17	暗青灰	5PB4/1	暗青灰	5PB4/1	長石・石英・赤粒	タタキ→回転ナデ	回転ナデ	
106	1a	2号遺構	須玖Ⅱ式	甕	口縁	25.6	明赤褐 赤褐	5YR5/8 5YR4/6	黄褐 にぶい黄	2.5Y5/3 2..5Y6/4	長石・石英	ハケメ	ナデ	
107	1a	2号遺構	須玖Ⅱ式	甕	口縁		にぶい褐	7.5YR5/4	灰褐	7.5YR4/2	石英・長石	ハケメ	ナデ	
108	1a	2号遺構	須玖式	甕	口縁		にぶい赤褐	5YR5/4	浅黄	2.5YR7/4	石英・長石	ナデ	ナデ	
109	1a	2号遺構	須玖Ⅱ式	甕	口縁	23.6	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英	ナデ	ナデ	
110	1a	2号遺構	須玖Ⅱ式	甕	口縁		橙 灰褐	5YR6/6 7.5YR6/2	にぶい橙 灰黄褐	7.5YR6/4 10YR5/2	長石・石英	ナデ	ナデ	
111	1a	2号遺構	須玖Ⅱ式	甕	口縁		にぶい褐	7.5YR5/4	橙	7.5YR6/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
112	1a	2号遺構	須玖Ⅱ式	甕	口縁	28.6	にぶい黄	2.5Y6/4	にぶい黄	2.5Y6/3	長石・石英	ナデ	ナデ	

113	1a	2号遺構	須玖Ⅰ式	甕	口縁		にぶい黄橙	10YR7/3	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
114	1a	2号遺構	須玖Ⅱ式	甕	口縁	27.8	橙	5YR7/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
115	1a	2号遺構	須玖Ⅱ式	甕	底	7.7	灰黄	2.5Y6/2	灰白	2.5Y8/2	長石・石英	磨耗	ナデ	
116	1a	2号遺構	須玖Ⅱ式	甕	口縁	30.7	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	丹塗り
117	1a	2号遺構	弥生	壺	底	5.4	浅黄橙	7.5YR8/4	橙	5YR6/8	長石・石英	ナデ	ナデ	
118	1a	2号遺構	弥生後期	甕	口縁	11.2	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
119	1a	2号遺構	弥生後期	甕	口縁		浅黄橙	7.5YR8/3	明褐	7.5YR5/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
120	1a	2号遺構	弥生後期		脚		浅黄	2.5Y7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英	磨耗	ハケメ	
121	1a	2号遺構	古墳前期	甕	口縁		にぶい橙 橙	5YR7/4 7.5Y6/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英	磨耗	ナデ	
122	1a	2号遺構	古墳前期	甕	口縁	18.2	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英	磨耗	（口）ナ デ、（胴）ケズリ	
123	1a	2号遺構	古墳前期	甕	口縁		にぶい黄橙	10YR7/4	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	磨耗	磨耗	
124	1a	2号遺構	古墳前期	甕	肩		にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英	磨耗	磨耗	
127	1a	2層	弥生中期	甕	口縁		明褐	7.5YR5/6	にぶい褐	7.5YR5/4	長石・石英	磨耗	磨耗	
128	1a	2層	弥生中期	甕	底		橙	5YR6/6	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石	磨耗	磨耗	
129	1a	2層	弥生		胴		灰白	10YR8/2	黄灰	2.5YR4/1	長石・石英	磨耗	磨耗	
133	1a	サブトレンチ	弥生中期	甕	底		橙 にぶい橙	5YR7/6 2.5YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英	ハケメ	ナデ	
134	1a	サブトレンチ	弥生中期	甕	底	8.2	橙	7.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英	磨耗	磨耗	
135	1a	サブトレンチ	弥生中期	高坏	口縁		橙	7.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR6/4	長石・石英	ナデ	ナデ	
136	1a	サブトレンチ	古墳前期	甕	頸		淡赤橙	2.5YR7/4	灰白	10YR8/2	長石・石英	ナデ	（口）ナ デ、（胴）ケズリ	
137	2a	2層	弥生中期	甕	口縁		橙	2.5YR6/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英	磨耗	磨耗	
138	2a	2層	弥生	壺	胴		橙 黄褐	7.5YR6/6 2.5Y5/3	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英	磨耗	磨耗	
139	2a	2層	古墳前期	高坏	脚	3.9	橙	5YR6/6	黄灰	2.5Y4/1	長石・石英・金雲母	磨耗	磨耗	
140	2a	2層	古墳前期	高坏	口縁	23	浅黄橙	7.5YR8/4	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英	ミガキ	ナデ	
141	1a	1層	須玖Ⅰ式	甕	口縁	21.9	橙	5YR6/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
142	1a	1層	弥生中期	甕	底	8.2	にぶい黄橙 にぶい橙	10YR7/3 5YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英	磨耗	磨耗	
143	1a	1層	古墳前期	高坏	脚		橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	長石・金雲母	ナデ	しぼり痕	
144	1a	1層	古墳前期	甕	口縁	18.7	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR5/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
145	1a	1層	古墳前期	小型丸底坩	口縁	11	橙	5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	剥離	磨耗	
146	1a	1層	須玖Ⅰ式	甕	口縁		橙	7.5YR7/6	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英	ナデ	ナデ	
147	1a	1層	須玖Ⅱ式	甕	口縁		にぶい黄	2.5Y6/4	にぶい褐	7.5Y6/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
148	1a	1層	須玖Ⅱ式	甕	口縁	25.2	浅黄	2.5Y7/4	浅黄	2.5Y7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
149	1a	1層	須玖Ⅱ式	甕	口縁		黄灰 浅黄	2.5Y6/1 2.5Y7/3	橙	7.5YR6/6	長石・石英・赤粒	ナデ	ナデ	
150	1a	1層	須玖式	甕	口縁		にぶい橙	7.5YR6/4	浅黄	2.5Y7/3	石英・長石	ナデ	ナデ	
151	1a	1層	須玖Ⅱ式	甕	口縁	24.8	明赤褐	5YR5/8	橙	2.5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
152	1a	1層	須玖式	甕	口縁		明赤褐	2.5YR5/6	赤褐	5YR4/6	石英・長石	ナデ	ナデ	
153	1a	1層	須玖Ⅱ式	甕	口縁		灰黄	2.5Y6/2	浅黄	2.5Y7/3	長石・雲母	ナデ	ナデ	遠賀川以東系

154	1a	1層	須玖Ⅱ式	甕	口縁		橙	7.5YR6/6	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石	ナデ	ナデ	
155	1a	1層	弥生	壺	肩		灰白 黄白	2.5Y7/1 2.5Y5/1	浅黄 褐	2.5Y7/3 2.5YR4/3	長石・石英・金雲母・赤粒	ナデ	ナデ	
156	1a	1層	須玖Ⅰ式	甕	底	6.2	橙	5YR6/6	明褐	7.5YR5/6	石英・長石	ナデ	ナデ	
157	1a	1層	弥生	壺	底		明赤褐	5YR5/6	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英	剥離	剥離	
158	1a	1層	弥生	壺	底	6.1	にぶい赤褐	2.5YR5/4	褐灰	10YR4/1	長石・石英	ナデ	ナデ	
159	1a	1層	弥生	甕	底		にぶい赤褐	7.5YR7/4	にぶい黄	2.5Y6/4	石英・長石	ナデ	ナデ	
160	1a	1層	弥生後期	甕	口縁		灰黄褐 明黄褐	10YR5/2 10YR6/6	灰黄褐 にぶい黄橙	10YR5/2 10YR7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
161	1a	1層	弥生後期	甕	底		黒 明黄褐	10YR6/1 10YR7/6	褐灰	10YR6/1	長石・石英・黒雲母	ナデ	ナデ	
162	1a	1層	古墳前期	甕	口縁		灰黄	2.5Y7/2	黄灰	2.5Y6/1	長石・石英	ナデ	ナデ	
163	1a	1層	古墳前期		口縁		にぶい橙	6/4	にぶい橙	6/4	長石・金雲母	ナデ	ナデ	
164	1a	1層	古墳前期	甕	口縁		灰黄	2.5Y6/2	浅黄	2.5Y7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
165	1a	1層	古墳前期	甕	口縁		橙	7.5YR6/6	にぶい赤褐	5YR5/4	石英・金雲母	ナデ	ナデ	
166	1a	1層	古墳前期	高坏	頸		橙	5YR6/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
168	1a	1層	楽浪系		胴		灰	7.5Y6/1	灰	7.5Y6/1	泥質	ミガキ状	回転ナデ	
169	1a	1層	近世陶器		胴		灰黄 にぶい褐	2.5Y6/2 7.5YR6/3	灰黄	2.5Y6/2	泥質	施釉・露胎	施釉	
170	1b	1層下面	須玖Ⅱ式	甕	口縁		にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
171	1c	1層下面	須玖Ⅱ式	甕	口縁		にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
172	1b	1層下面	須恵器		底	24.2	黄灰	2.5Y5/1	青灰	5PB6/1	長石・石英・黒粒	格子タタキ	当て具痕	
173	1b	1層下面	弥生中期	器台	胴		黄褐	2.5Y5/3	褐灰 にぶい黄褐	10YR4/1 10YR5/4	石英・長石	ナデ	ナデ	
174	1b	1層下面	弥生	壺	底	9.2	にぶい黄	2.5Y6/4	明黄褐	10YR6/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
175	1b	1層上面	陶質土器		底		オリーブ灰	2.5GY6/1	灰	N6/0	泥質	縄（原体Z撚）タタキ	不整方向ナデ	
176	1b	1層上面	陶質土器		胴		灰	N4/0	灰	N5/0	泥質	縄（原体Z撚）タタキ→沈線	横ナデ	
177	1b	1層上面	須玖Ⅰ式	甕	口縁	28.7	にぶい黄褐	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR7/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
178	1b	1層上面	須玖Ⅰ式	甕	口縁	22.9	橙	7.5YR6/6	にぶい黄褐	10YR6/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
179	1b	1層上面	須玖Ⅰ式	甕	口縁	10.6	明黄褐	10YR6/6	明黄褐	10YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
180	1b	1層上面	弥生	壺	口縁	52.6	にぶい黄褐	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR7/2	長石・石英	ナデ	—	
181	1b	1層上面	弥生	壺	底	6	明赤褐	2.5YR5/8	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
182	1b	1層上面	弥生		脚	22.1	にぶい黄褐	10YR5/3	暗黄灰	2.5YR4/2	長石・石英・角閃石	ナデ	ナデ	
183	1b	1層上面	古墳前期	甕	口縁		浅黄	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/4	長石・石英	ナデ	ナデ	
184	1b	1層上面	須恵器				灰	5Y4/1	灰	5Y5/1	長石	回転ナデ	ナデ	
185	1c	1層下面	古墳前期	高坏			にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
186	1c	1層下面	弥生後期	壺	口縁	31.3	にぶい黄	2.5Y6/4	にぶい黄	2.5Y6/4	長石・石英・砂粒	ナデ	ナデ	
187	1c	1層上面	弥生中期	高坏	口縁		橙	5YR6/8	橙	5YR6/8	長石・石英	ナデ	ナデ	
188	1c	1層上面	須玖Ⅱ式	甕	口縁		明赤褐	10YR6/6	明赤褐	10YR6/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
189	1c	1層上面	須玖Ⅱ式	甕	口縁		にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
190	1c	1層上面	須玖Ⅱ式	甕	口縁		橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	

191	1c	1層上面	須玖Ⅱ式	甕	口縁		浅黄	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
192	1c	1層上面	須玖Ⅱ式	甕	口縁		橙	7.5YR6/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
193	1c	1層上面	須玖Ⅱ式	甕	口縁		にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	石英・長石	ナデ	ナデ	
194	1c	1層上面	須玖Ⅱ式	甕	口縁	26.8	にぶい橙	7.5YR7/4	浅黄	2.5Y7/3	石英・長石	ナデ	ナデ	
195	1c	1層上面	須玖Ⅱ式	甕	口縁		明赤褐	5YR5/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
196	1c	1層上面	須玖Ⅰ式	甕	口縁	25.7	黄褐	10YR5/6	にぶい黄橙	10YR6/4	長石・石英	ナデ	ナデ	
197	1c	1層上面	須玖Ⅱ式	甕	口縁		明黄褐	10YR7/6	浅黄	2.5Y7/4	長石・石英	ナデ	ナデ	
198	1c	1層上面	弥生	甕	底	8.2	にぶい黄橙	10YR7/4	浅黄	2.5Y7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
199	1c	1層上面	弥生後期	甕	底		橙	7.5YR6/6	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
200	1c	1層上面	近世肥前磁器		底	4.9	明緑灰	2.5GY7/1	灰白	7.5Y7/1	長石	施釉	染付・施釉	
201	2a	1層	須玖Ⅰ式	甕	口縁		にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR5/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
202	2a	1層	須玖Ⅰ式	甕	口縁		明褐	7.5Y5/6	にぶい黄褐	10YR5/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
203	2a	1層	須玖Ⅰ式	甕	口縁		にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙 にぶい赤褐	10YR6/4 5YR5/4	長石・石英	ナデ	ナデ	
204	2a	1層	須玖Ⅱ式	甕	口縁		明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英	ナデ	ナデ	
205	2a	1層	須玖Ⅱ式	甕	口縁		明赤褐	2.5YR5/8	にぶい黄褐 明赤褐	10YR5/3 2.5YR5/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
206	2a	1層	須玖Ⅰ式	甕	口縁	25.6	浅黄	2.5Y7/3	にぶい黄	2.5Y6/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
207	2a	1層	弥生	壺	胴		にぶい黄橙 にぶい橙	10YR7/4 5YR6/4	浅黄 橙	2.5Y7/3 7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
208	2a	1層	弥生	壺	底		灰白 にぶい褐	10YR8/2 7.5YR5/4	灰白	10YR8/2	長石・金雲母	ナデ	ナデ	
209	2a	1層	弥生		底	12.2	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
210	2a	1層	古墳前期	小型丸底坩	胴		にぶい橙	2.5YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
211	2a	1層	朝鮮時代磁器	碗	口縁		灰黄 にぶい黄橙	Hue2.5Y7/2 Hue10YR6/4	灰黄 にぶい黄橙	Hue2.5Y7/2 Hue10YR6/2	長石	施釉	施釉	3a区1層でも同一媒体
212	2b	1層	須玖Ⅱ式	甕	口縁		明褐	7.5Y5/6	浅黄	2.5Y7/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
213	2b	1層	弥生後期		胴		にぶい褐	7.5YR5/4	浅黄	2.5Y7/3	長石・石英	平行タタキ	ナデ	
214	2b	1層	弥生後期	甕	頸		浅黄 橙	2.5Y7/4 7.5YR6/6	明黄褐	10YR7/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
215	2b	1層	三韓系		胴		灰	N6/0	灰白	7.5Y7/1	泥質	ナデ	ナデ	
216	2b	1層	弥生後期	高坏	口縁		橙	7.5YR	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
217	3	1層	須玖Ⅱ式	甕	口縁		橙 にぶい黄橙	5YR6/6 10YR7/3	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英	ナデ	ナデ	
218	3	1層	弥生		底		明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
219	3	1層	楽浪系	壺	口縁		にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	泥質	回転ナデ	回転ナデ	
220	3	1層	陶質土器		胴		にぶい橙	7.5YR6/4	灰	7.5Y6/1	泥質	剥離	ナデ	
221	3a	1層	弥生中期	高坏	口縁		明黄褐	10YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英（大粒）	ナデ	ナデ	
222	3a	1層	弥生後期	甕	口縁		にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい黄橙	10YR6/4	長石・石英	ナデ	ナデ	
223	3a	1層	弥生	甕	底	7.6	にぶい赤褐	5YR5/4	橙	7.5YR6/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
224	3a	1層	白磁	碗	口縁		灰白	Hue5Y7/1	灰白	Hue5Y7/1	長石	施釉	施釉	

Ⅳ　総括

１．１号溝・２号溝

⑴　年代

今次の調査では１ｂ区、２ａ区で１号溝、１ｃ区、２ｂ区３区で２号溝が検出された。１号溝、２号溝とも南北に伸びており、約４ｍの間隔がある。１号溝の覆土は大きく２層にわかれ、下層は褐灰色粘質土で上層は黒褐色粘質土である。下層では弥生時代中期以降の資料が出土しているが、最新遺物は古墳時代前期土器である。上層でも弥生時代中期遺構の資料が出土しているが、最新遺物は古墳時代前期の土器である。このことから下層、上層とも古墳時代前期に埋没したものと考えられる。

同様に２号溝の覆土は大きく２層にわかれ、下層は褐灰色粘質土で上層は黒褐色粘質土である。下層では弥生時代中期以降の資料が出土しているが、最新遺物は古墳時代前期土器である。上層でも弥生時代中期遺構の資料が出土しているが、最新遺物は古墳時代前期の土器である。このことから下層、上層とも古墳時代前期に埋没したものと考えられる。

溝の開削年代については、切り合い関係を基に考えることができる。１号溝は２ａ区で弥生時代中期～古墳時代前期の包含層である２層を掘り込んで構築されている。２ａ区２層には弥生時代中期以降の遺物が含まれていたが、最新遺物は古墳時代前期の土器であることから最終的な堆積は古墳時代前期になされたものと考えられる。そのため１号溝の開削年代の上限は古墳時代前期に求めることができる。２号溝はどの地区でも弥生時代以前の無遺物層に構築されていたため、開削の上限年代を求めることが困難である。１号溝と２号溝は走向がほぼ同じであることや規模、断面形態などからみて相互に無関係のものとは考えにくい。そのため２号溝の年代も１号溝とそれほど懸隔のあるものではないだろうと推定される。

この場合、１号溝、２号溝から出土した古墳時代前期以前の資料の供給源は、溝周辺である可能性もあるが、１号溝、２号溝から出土した資料の多くが磨耗を受けた小片であることから、丘陵部の居住域であった可能性も考えられる。

⑵　周辺遺構との関係

次に周辺の既往の調査成果と１号溝、２号溝との対応関係について考える。調査区北方では2015年度芦辺高原地区調査が実施されている（古澤編2017）。調査区東方・南方・西方では1993年度石田高原地区調査（副島・山下編1995）、1995年度芦辺高原地区調査（山下・川口編1997）、2002年度石田高原地区調査（中尾編2003）、2004年度石田高原地区調査（中尾編2005）などが行われている。

位置関係からみると今次調査１号溝は1995年３号溝（図43-１）に対応するようである。断面形態、規模、遺構覆土が下層に褐灰色系粘質土、上層に黒褐色系粘質土が堆積するという状況も類似している。1995年３号溝では図示はないが、弥生時代後期後半の土器が８片出土しているという。

一方、今次調査２号溝は1995年４号溝（図43-２）に対応するようである。断面形態、規模、遺構覆土が下層に褐灰色系粘質土、上層に黒褐色系粘質土が堆積するという状況も類似している。1995年４号溝では図示はないが､布留式と思われる甕などが69片出土しているという｡今次調査１号溝―1995年３号溝、今次調査２号溝―1995年４号溝という対応は覆土出土遺物からみても矛盾するものではない（図42）。

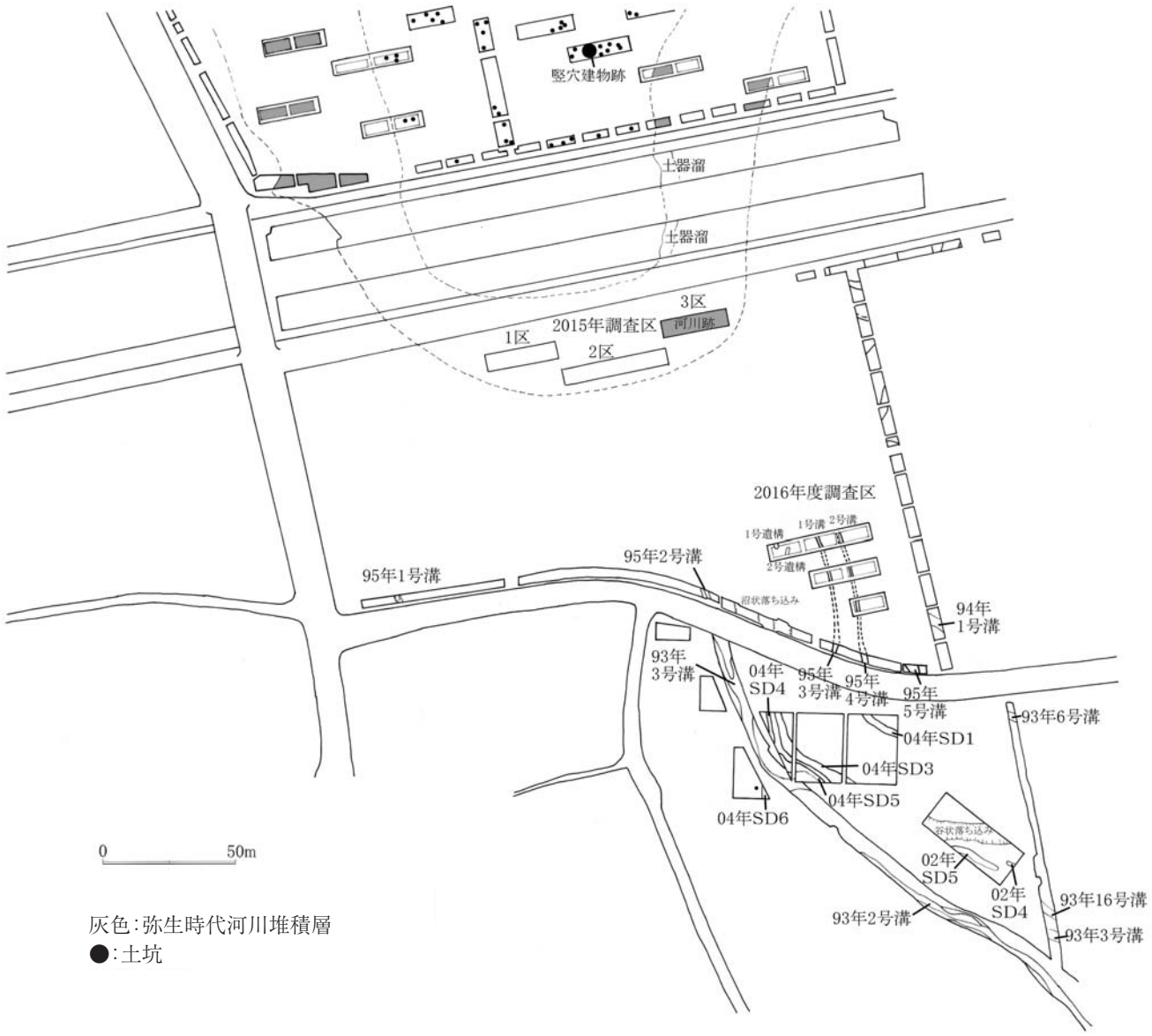
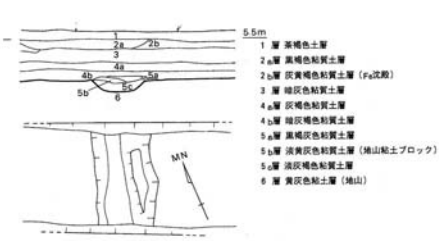


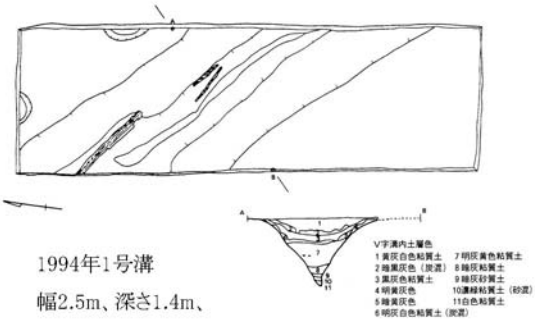
図42　芦辺高原地区と周辺の様相

なお、1995年３号溝・４号溝はいずれも弥生時代以前の無遺物層を掘り込んで構築されており、1995年度の調査成果のみからでは開削年代を知ることができなかったが、今次の調査によって開削年代が明らかになりつつあることは一つの成果であった。

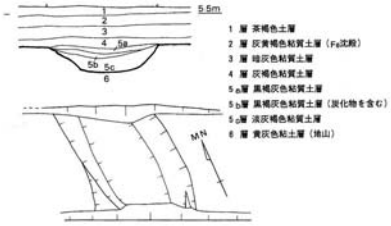
さらに南方の石田高原地区との関係を考えると、2004年調査区との対応が問題となる。2004年SD３、SD４、SD５はその走向からみて、1995年沼状落ち込みに続いていくものと思われる。2004年SD１（図43-３）は今次調査１号溝―1995年３号溝か、今次調査２号溝―1995年４号溝に連結する可能性がある。2004年SD１の覆土は大きく２層にわかれ、上層は黄褐色系粘質土とカーボン混じりの黒褐色粘質土で構成され、上層下面では古墳時代前期の土器がまとまって出土したという。間に黄褐色粘質土の無遺物層を挟み、下層は褐灰色粘質土で構成される。下層ではカーボン集中箇所から弥生時代中期の遺物が出土している。このことから2004年SD１は弥生時代中期に断面Ｖ字状の溝を掘削し



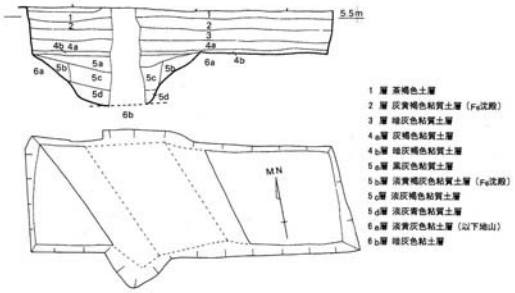
1995年3号溝
幅1.2m、深さ35cm、
底面標高3.96m　1



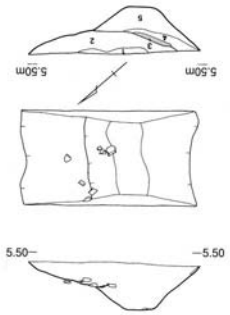
1994年1号溝
幅2.5m、深さ1.4m、
底面標高3.08m　4



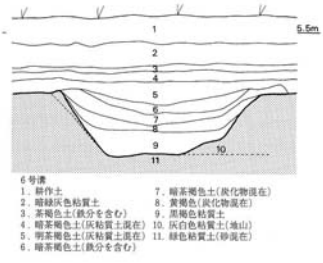
1995年4号溝
幅1.9m、深さ50cm、
底面標高3.88m　2



1995年5号溝
幅2.7m、深さ100cm、
底面標高3.16m　5



2004年SD1
幅2m、深さ55cm、
底面標高4.48m　3



1993年6号溝
幅2.3m、深さ72cm、
底面標高3.68m　6

図43　周辺関連遺構

たものの埋没し、古墳時代前期により幅広に浅く掘りなおしたものと考えられている（中尾編2005）。

今次調査の１号溝・２号溝とも覆土に無遺物層の間層はなく、また下層からも古墳時代前期の土器が出土しており、2004年 SD１とは状況が異なる。しかし古墳時代前期に掘りなおしたとみられている2004年 SD１との接続は充分に考えられるところである。以前は、1995年３号溝は弥生時代後期後半の遺物が出土したとされていたので、古墳時代には使用されておらず、一方で、1995年４号溝では

布留式土器が出土するので、古墳時代に掘りなおしたと考えられる2004年SD１に接続するのは、1995年４号溝であると考えられてきた（中尾編2005）。しかし、今次調査１号溝では古墳時代前期土器が出土し、これが1995年３号溝に接続していたことが推定されるに至ったので、2004年SD１に接続するのは、1995年３号溝と４号溝の双方に可能性がでてきたということになった。そうした現況下で改めて、2004年SD１の延伸状況を想定すると、注意されるのは2004年調査区ではSD１の西方にはSD３まで遺構の空白地帯があることである。この点からみると今次調査１号溝―1995年３号溝―2004年SD１と接続し、丘陵裾部に沿って大きく湾曲する古墳時代前期の溝が存在した可能性も考えられる。その場合、今次調査２号溝―1995年４号溝は2004年調査区よりやや東方に繋がっていたことになる。この可能性とは反対に従来の想定どおりの接続であったとすると、今次調査１号溝―1995年３号溝という溝は2004年調査区の北方で収束していたということになる。

1995年５号溝（図43-５）は規模などの面から環濠として推定されている（山下・川口編1997）。これと1993年６号溝（図43-６）が接続しているとみられているが（中尾編2005）、今次の調査区では確認されなかった。また、1994年１号溝（図43-４）の延伸状況も不分明である。今次の調査区と1994年調査区の約10mの間に環濠が延伸し、北上していた可能性や環濠が途中で収束すると可能性も考えられるが、よくわからない。

⑶　１号溝・２号溝の機能

1995年度３号溝・４号溝は水路関係の溝であると推定されている（山下・川口編1997）。また中尾篤志は古墳時代前期の北東低地部の状況について、環濠が埋没しはじめて、沼状落ち込みなどが形成され、地下水位が比較的高い環境の中で、治水を前提とした展開をみせると考えている。低地部の排水や水田経営に伴う給排水を目的とし、断面Ｕ字に浅く掘りなおした溝が特徴であるとする（中尾2005）。

今次調査１号溝・２号溝の遺物出土状況をみると床面でも遺物は出土しているが、遺存状況は不良で、また、覆土出土の遺物も磨耗を受けた小片が多い。人為的な土器等の投棄などの状況はみられない。溝の規模からみても環濠とは異なる。2015年度の調査では自然河川が検出されているが（古澤編2017）、今次調査１ｂ区１号溝北端から直線距離にして約60mで河川に到達する。このことからみて今次調査の１号溝・２号溝は丘陵部と河川を繋ぐ役割があったものとみられ、従来の想定のとおり給排水関係の機能があったものと考えられる。

２．１号遺構・２号遺構

⑴　年代

１号遺構では弥生時代中期以降の土器が出土しているが、古墳時代前期の土器が良好な遺存状況で出土しており、古墳時代前期に埋没したものと考えられる。また、２号遺構での出土品のうち最新遺物は古墳時代前期の土器で、同様に古墳時代前期に埋没したものと考えられる。

１号遺構と２号遺構はともに弥生時代～古墳時代の包含層である２層を掘り込んでいる。２層では弥生時代中期以降の遺物が出土しているが、最新遺物は古墳時代前期の土器である。そのため、１号遺構と２号遺構の開削年代の上限は古墳時代前期ということになる。

⑵　遺構の性格と延伸状況

１号遺構と２号遺構はともに１a 区で確認された溝状の遺構である。１号遺構は南部で立ち上がって収束し、２号遺構は北部で立ち上がって収束している。そして、約280cm 程度の距離で両遺構は相対している。このことから両遺構は溝の切れ目部分に該当する可能性がある。同様の遺構は2002年石田高原地区調査で確認されている。2004年 SD４と SD５は、弥生時代中期の溝であるとみられているが、約３m 程度の間隔をおいて相対するように位置している。この空白部が丘陵部への出入口の一つであったと推定されている。周辺では複数のピット群も確認された（中尾編2003）。

今次調査の１号遺構と２号遺構の間隔は2002年 SD４と SD５の状況と類似している。ただし、今次調査では遺構周辺にピットなどの遺構は確認されていない。同時代には１号溝や２号溝が東方に存在し、溝への接近時には出入口として機能していたのかもしれない。

１号遺構や２号遺構で特筆すべき点は、１号溝や２号溝での遺物出土状況が磨耗した細片が大部分で流れ込みによって堆積したものとみられたこととは対照的に、良好な遺存状況の遺物が少なくなく出土したことである。特に１号遺構では収束する南側端部を中心に古墳時代前期の甕などの複数個体が層をなして集中して出土した。人為的な投棄も考えられ、遺構の端部において何らかの特別な行為が行われた可能性も指摘しうる。

２号遺構は南側に延伸するが、この走向を保ったまま南下した場合は、1995年調査沼状落ち込みに繋がる可能性がある。

３．出土遺物

⑴　古墳時代前期土器

今次の調査では古墳時代前期の資料が多数出土した。原の辻遺跡の古墳時代前期編年については宮﨑貴夫の案に加え（宮﨑2005）、近年では宮木貴史と松元一浩によって整理されている（宮木・松元2017）。これらの編年案に照らすと、１号溝、２号溝、１号遺構、２号遺構で出土した古式土師器は古墳Ⅱ期（布留Ⅰ式併行期）・古墳Ⅲ期（布留Ⅱ式併行期）に属するものが多いようである。特に１号遺構で出土した複合口縁壺口縁部（95）は古墳Ⅲ期に属するものである。一方、これらの遺構に切られている２層から出土した最新遺物である古式土師器の高坏口縁部（140）は古墳Ⅰ期（布留０式併行期）の例に近いものと考えられる。このことから２層を切っている１号遺構・２号遺構の開削時期は古墳Ⅰ期を上限とするものと把握できる。

古式土師器の胎土に注目すると既に、1995年芦辺高原地区の調査で出土した弥生時代中期～古墳時代初頭の土器に金雲母を含むものが75～83％あることを根拠に、島外から土器そのものが交易品として持ち込まれたと推定されている（山下・川口編1997）。今次の調査で出土した古式土師器のうち個体数の確保された甕の口縁部について金雲母の混入の有無を整理したのが表２である。これによると調査区全区で金雲母の混入した胎土の甕口縁部は23点、混入されない甕口縁部は17点で、金雲母混和率は57.５％となる。本書「地

表２　古式土師器甕口縁部金雲母混入様相

	金雲母混入	金雲母非混入
１号溝②層		2
１号溝①層	10	6
２号溝①層	2	
１号遺構	6	5
２号遺構	1	2
１層	4	2
計	23	17

質的環境」でも触れたように、壱岐島は極一部に流紋岩帯があるが、原の辻遺跡が所在する深江田原をはじめ多くの地域が玄武岩地帯であるため、金雲母が混和した土器は島外からの搬入品であるとみられる。そのため、今次の調査区では従来の想定ほどではないがそれでも少なくない量の土器が島外から持ち込まれていたことを示しているものと考えられる。

⑵ 韓半島系土器

１号溝①層から楽浪土器２点、陶質土器２点、２号溝①層から擬粘土帯土器の可能性がある土器１点、１号遺構から陶質土器１点、１層から楽浪土器２点、三韓系瓦質土器１点、陶質土器３点が出土した。楽浪土器と陶質土器の出土が比較的多い。このうち陶質土器は今次の調査で多く出土した古墳時代前期の土器と併行関係にあるものと考えられる。一方、楽浪土器は磨耗が激しく小片で、流れ込みによる堆積であるとみられることに加え、弥生時代後期の土器も出土しているので、古墳時代前期まで下るものであるかどうかは不分明である。

これまで芦辺高原地区では包含層から円形粘土帯土器１点、三角形粘土帯土器２点、擬粘土帯土器１点、楽浪系土器６点、三韓系瓦質土器11点が出土している。芦辺高原地区での調査は相対的に少なかったので、韓半島系土器の出土も少なかったが、今次の調査で遺構に伴う出土事例を得ることができた。また、上記のとおり１号溝と関連が想定される2004年 SD１で平行タタキの陶質土器１点が出土しており、関連が想定される。原の辻遺跡全体でみると陶質土器は不條地区・八反地区・原地区・石田高原地区と北部で多く出土している（古澤2016b，c）。陶質土器や楽浪系土器が丘陵北部から流れ込んだ可能性もある一方で、１号遺構のように遺存状態の良好な古式土師器と共に出土した陶質土器の事例などは芦辺高原地区における陶質土器の利用を示すものと考えられる。

なお、楽浪土器と陶質土器の双方にみられる縄タタキについて原体の縄の撚りの方向でみると楽浪土器では原体Ｓ撚が多く、陶質土器では原体Ｚ撚が多いという傾向を指摘してきたが（古澤2016a）、今次の調査事例も同様の結果となっている。

４．今次の調査区における時期的変遷

最後に、今次の調査によって明らかとなった調査区の時期的な変遷について述べる。今次の調査出土品の中で最も古い資料は須玖Ⅰ式の資料である。溝出土の資料であり丘陵北部からの流れ込みも想定される。須玖Ⅱ式の資料は須玖Ⅰ式の資料よりも増加する。１号遺構では遺存状況が良好な資料が出土しており、その全てを丘陵北部からの流れ込みとみるよりは、芦辺高原地区周辺で土地利用が本格化したことを反映しているものと考えられる。弥生時代後期の資料も一定量確認される。

古墳時代前期までに包含層が形成されるにいたったが、大きな土地利用の変化がみられるのは、古墳時代前期（原の辻古墳時代Ⅱ期）である。１号溝、２号溝、１号遺構、２号遺構が構築される。これらの遺構は環濠の機能不全による滞水を排水することや水田への給排水に用いられたものと考えられる。そしてこれらの遺構は原の辻古墳時代Ⅲ期には埋没する。

文献

副島和明・山下英明編1995『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第124集
中尾篤志2005「東側環濠」『原の辻遺跡総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集
中尾篤志編2003『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集
中尾篤志編2005『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集
古澤義久2016a「大陸・半島系土器」『原の辻遺跡総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集
古澤義久2016b「原の辻遺跡の性格と他地域との関係」『勒島와 하루노쓰지를 通해 본 東아시아 交流의 様相』国立晋州博物館
古澤義久2016c「原の辻遺跡における日韓交流」『大海を渡り、一支国に至る。―国境の島壱岐・原の辻遺跡における日韓交流―』長崎県埋蔵文化財センター
古澤義久編2014『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第12集
古澤義久編2017『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第20集
宮木貴史・松元一浩2017「壱岐島の古式土師器」『九州島における古式土師器』第19回九州前方後円墳研究会長崎大会資料
宮﨑貴夫2005「土器」『原の辻遺跡総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集
山下英明・川口洋平編1997『原の辻遺跡・安国寺前Ａ遺跡・安国寺前Ｂ遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第１集

2016年度原之辻遗址芦边高原地区的考古发掘

2016年10月30至12月26日，为了弄清土地利用状况，长崎县埋藏文化财中心对原之辻遗址北侧洼地进行了考古发掘。在发掘区内布了南北5米×东西30米的探方1处，南北5米×东西20米的探方1处，以及南北5米×东西10米的探方1处。在以往的考古发掘中，发现过弥生时代的河川遗迹。

在本次发掘中，发现了2条古坟时代早期的积水沟。这些积水沟，可能是丘陵北部的环壕等设施的排水及水田的进排水为目的所挖的。此外，还发现2座同时期的灰坑，推测为上述积水沟的进出口。

出土遗物有弥生时代陶器及古坟时代陶器。在古坟时代早期的陶器中，含金云母的陶器占57%，说明这些陶器大多来源于岛外。另外，在出土的朝鲜半岛系陶器中有乐浪系陶器、三韩系陶器及三国时代陶器。其中，三国时代陶器是了解其与古坟时代早期陶器共存关系的重要资料。

（訳：王達来）

2016 년도 하루노쯔지（原の辻）유적

아시베타카하라(芦辺高原)지구 발굴조사 성과

2016 년 10 월 31 일～12 월 26 일에 걸쳐, 하루노쯔지유적 북측 저지부의 토지 이용을 밝히는 것을 목적으로 발굴조사를 실시하였다. 발굴조사구는 남북 5m×동서 30m 조사구 1 개소, 남북 5m×동서 20m 조사구 1 개소, 남북 5m×동서 10m 조사구 1 개소를 설정했다. 현재까지 발굴구 주변 조사에서는, 야요이시대 하천이 발견되었다.

이번 발굴조사에서는 고분시대 전기의 구(도랑) 3 조가 발견되었다. 구릉 북부의 구와 하천을 연결했던 것으로 생각된다. 이 구들은 구릉 북부의 환호 등의 배수나 수전의 급배수를 목적으로 구축된 것으로 보인다. 또 구상 형태를 한 고분시대 전기의 유구 2 기도 발견되었다. 이들 2 기의 유구는 구의 출입구였다고 생각된다.

출토유물로는 야요이토기와 고분시대 전기 토기가 발견되었다. 고분시대 전기 토기 중 금운모를 섞은 것이 57.5% 정도를 차지하고 있으므로, 많은 토기가 섬 밖으로부터 반입되었다고 생각된다. 또 한반도계 토기로 낙랑계토기, 삼한계토기, 도질토기가 출토되었다. 특히 도질토기는 고분시대 전기 토기와의 병행관계를 알 수 있는 중요한 자료이다.

（訳：古澤義久，校：金恩瑩）

原の辻遺跡（芦辺高原３区）自然科学分析報告

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

本報告では、原の辻遺跡の芦辺高原３区において花粉分析を行い、古植生・古環境を推定する。

２．試　　料

分析試料は、芦辺高原３区の２号溝より採取された①層と②層の２点と、基本層３ｃ層の計３点の堆積物である。

３．方　　法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）試料から１㎤を採量
２）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
３）水洗処理の後、0.25㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
４）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
５）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す
６）再び氷酢酸を加えて水洗処理
７）沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
８）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

４．結　　果

⑴　分類群

出現した分類群は、樹木花粉25、樹木花粉と草本花粉を含むもの５、草本花粉24、シダ植物胞子２形態の計56である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、花粉数が200個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図１に示す。

主要な分類群は顕微鏡写真に示した。同時に、寄生虫卵についても検鏡した結果、２分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、ヤナギ属、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、サンショウ属、モチノキ属、ニシキギ科、ブドウ属、ノブドウ、ツバキ属、ハイノキ属、モクセイ科、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、フウロソウ属、キカシグサ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、アカネ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵

以下にこれらの特徴を示す。

①回虫　*Ascaris lumbricoides*

回虫卵は、比較的大きな虫卵で、およそ80×60μm あり楕円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。回虫は、世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられる。

②鞭虫　*Trichuris trichiura*

卵の大きさは、50×30μm でレモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、３～６週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。鞭虫は、世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。

⑵　花粉群集の特徴

各試料において、花粉構成と花粉組成の特徴を記載する。（図１）

１）２号溝①層・②層

②層では、草本花粉が66％を占め、樹木花粉は23％である。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）の出現率が高く、ヨモギ属、セリ亜科、カヤツリグサ科が伴われ、オモダカ属が出現する。樹木花粉では、シイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属を主にエノキ属－ムクノキ、コナラ属コナラ亜属が出現する。回虫卵、鞭虫卵がわずかに検出される。

①層では、草本花粉が62％を占め、樹木花粉は30％である。草本花粉では、ヨモギ属の出現率が高

く、次いでイネ科（イネ属型を含む）が多く、セリ亜科が伴われる。樹木花粉では、シイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属が比較的多く、コナラ属コナラ亜属が伴われる。

2）3c層

花粉密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されないが、ハンノキ属、クマシデ属－アサダ、エノキ属－ムクノキの樹木花粉と、イネ科、アブラナ科、フウロソウ属、キク亜科、ヨモギ属の草本花粉がわずかに検出される。

5．花粉分析から推定される植生と環境

1）2号溝①層・②層

下部の②層の時期は、イネ科、ヨモギ属をはじめ、カヤツリグサ科、セリ亜科、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、チドメグサ亜科、クワ科－イラクサ科、ミズアオイ属、オモダカ属、イボクサなどの水田雑草の性格ももつ水辺の雑草や比較的乾燥した環境を好む草本が、溝および周囲に分布していた。わずかに寄生虫卵が検出されたが、密度は生活汚染程度であることから、溝に近接して居住域が分布していたと考えられる。イネ属型が水田雑草を伴って検出されることから、周辺では水田稲作が行われていた。シイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属を主要素とする照葉樹林が分布し、二次林要素のエノキ属－ムクノキの樹木が生育していた。上部の①層の時期になると、ヨモギ属が増加する一方、比較的湿潤な環境を好むカヤツリグサ科、ギシギシ属、イボクサなどが減少しており、溝周囲はやや乾燥化した。周辺では、継続して水田とシイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属を主要素とする照葉樹林が分布し、コナラ属コナラ亜属の落葉樹も生育する。

2）3c層

花粉密度は極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度が速かったと推定される。花粉はわずかであるが、アブラナ科、フウロソウ属、キク亜科、ヨモギ属などの比較的乾燥した環境を好む人里雑草が分布し、周辺はやや乾燥した環境であったと推定される。また、ハンノキ属、クマシデ属－アサダ、エノキ属－ムクノキの樹木も分布していた。

花粉の検出数は少ないが、コナラ属アカガシ亜属やシイ属といった明かな温暖要素や、イネ属型などの栽培要素は検出されず、寒冷期に多いハンノキ属やフウロソウ属が出現することから、その堆積時期は比較的古い更新世まで遡る可能性もある。

6．ま と め

原の辻遺跡芦辺高原3区において花粉分析を行った。その結果、2号溝の下部（②層の時期）では、イネ科やカヤツリグサ科、セリ亜科、ミズアオイ属などの水田雑草の性格ももつ水生植物が生育し、周囲にはヨモギ属やアカザ科－ヒユ科などのやや乾燥を好む草本が分布していた。上部（①層の時期）になるとヨモギ属が多くなり、乾燥化する。下部、上部とも周辺には、水田とシイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属を主要素とする照葉樹林が主に分布していた。3c層は、ハンノキ属などの樹木とイネ科などの草本が生育するが、更新統である可能性もある。

参考文献

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，８，医歯薬出版，p. 9-55.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，p. 14-15.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p. 248-262.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学，２，同成社，p. 151-158.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p. 82-102.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p. 187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p. 21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

表１　原の辻遺跡芦辺高原３区における花粉分析結果

分類群		２号溝		３ｃ層
学名	和名	①層	②層	
Arboreal pollen	樹木花粉			
Podocarpus	マキ属	1	1	
Abies	モミ属		1	
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	1	1	
Cryptomeria japonica	スギ	1	1	
Salix	ヤナギ属	1		
Platycarya strobilacea	ノグルミ		1	
Alnus	ハンノキ属	3	1	8
Betula	カバノキ属	1	1	
Corylus	ハシバミ属	3	2	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属－アサダ		3	4
Castanea crenata	クリ	5		
Castanopsis-Pasania	シイ属－マテバシイ属	49	38	
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	19	7	
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	48	33	
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属－ケヤキ		1	
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属－ムクノキ	3	13	2
Zanthoxylum	サンショウ属	1	1	
Ilex	モチノキ属	1	1	
Celastraceae	ニシキギ科	1		
Vitis	ブドウ属	2		
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ	2	1	
Camellia	ツバキ属	1		
Symplocos	ハイノキ属	1		
Oleaceae	モクセイ科	4	1	
Lonicera	スイカズラ属	1		
Arboreal·Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科	20	32	
Rosaceae	バラ科	2	1	
Leguminosae	マメ科	11	8	
Araliaceae	ウコギ科		1	
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属－ガマズミ属	1		
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Typha-Sparganium	ガマ属－ミクリ属	1	1	
Sagittaria	オモダカ属		1	
Gramineae	イネ科	99	156	7
Oryza type	イネ属型	10	27	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	11	
Aneilema keisak	イボクサ		1	
Monochoria	ミズアオイ属		1	
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	2	1	
Rumex	ギシギシ属	2	8	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	4	9	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	3	
Ranunculus	キンポウゲ属	3	1	
Thalictrum	カラマツソウ属	4	2	
Cruciferae	アブラナ科	2	1	1
Geranium	フウロソウ属			2
Rotala	キカシグサ属		1	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科		9	
Apioideae	セリ亜科	21	14	
Plantago	オオバコ属		1	
Rubiaceae	アカネ科		3	
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	1	
Asteroideae	キク亜科	1	9	2
Xanthium	オナモミ属		1	
Artemisia	ヨモギ属	152	45	2
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	1	3	6
Trilate type spore	三条溝胞子	1	4	
Arboreal pollen	樹木花粉	149	108	14
Arboreal·Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	34	42	
Nonarboreal pollen	草本花粉	304	307	14
Total pollen	花粉総数	487	457	28
Pollen frequencies of 1㎤	試料１㎤中の花粉密度	6.2 ×10^4	4.1 ×10^4	3.1 ×10^2
Unknown pollen	未同定花粉	4	5	6
Fern spore	シダ植物胞子	2	7	6
Helminth eggs	寄生虫卵			
Ascaris (lumbricoides)	回虫卵		1	
Trichuris (trichiura)	鞭虫卵		4	
Total	計	0	5	0
Helminth eggs frequencies of 1㎤	試料１㎤中の寄生虫卵密度		5.0 ×10	
Stone cell	石細胞	(－)	(－)	(－)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(－)	(－)	(－)
Charcoal·woods fragments	微細炭化物・微細木片	(＋)	(＋)	(＜＋)
微細植物遺体(Charcoal·woods fragments)	(×10^5)			
未分解遺体片			1.6	
分解質遺体片		44.1	2.1	0.5
炭化遺体片（微粒炭）		4	3.7	

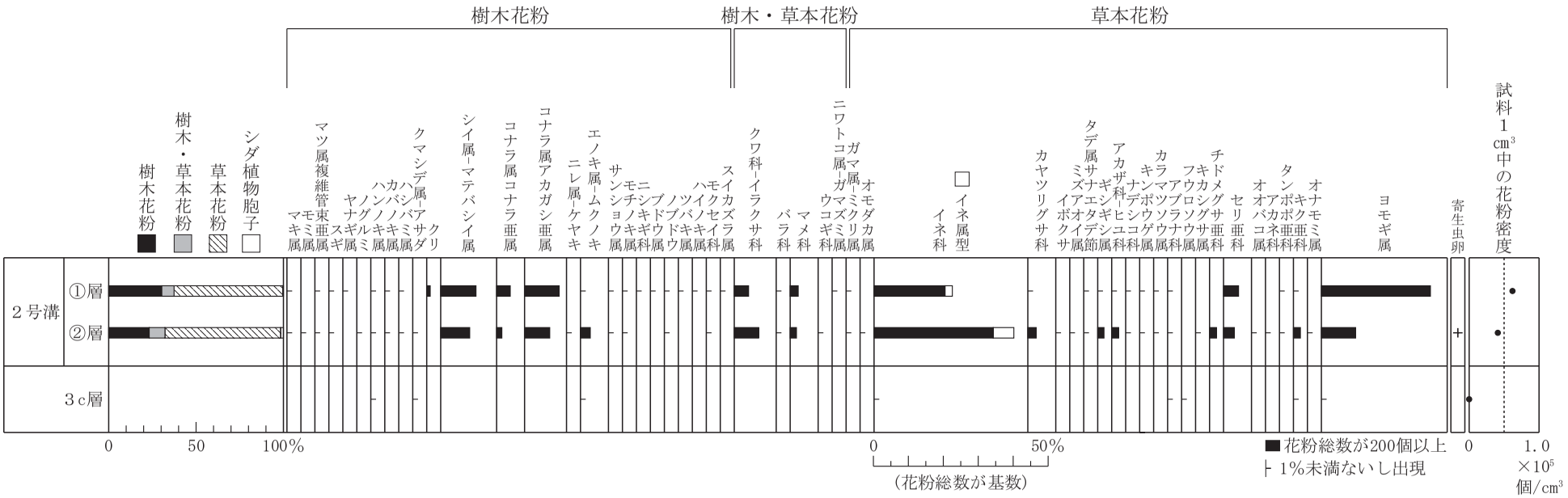
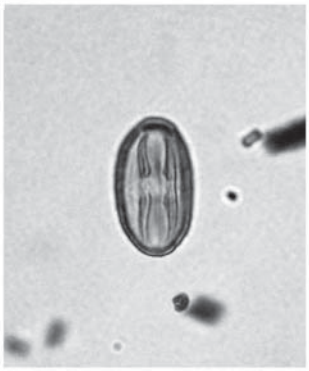


図1　原の辻遺跡芦辺高原3区における花粉ダイアグラム

原の辻遺跡芦辺高原３区の花粉・寄生虫卵

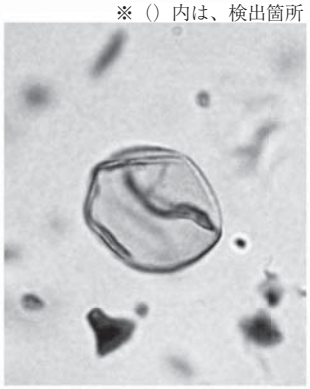
※（）内は、検出箇所



1 シイ属-マテバシイ属
（2号溝②層）

2 コナラ属コナラ亜属
（2号溝②層）

3 コナラ属アカガシ亜属
（2号溝①層）



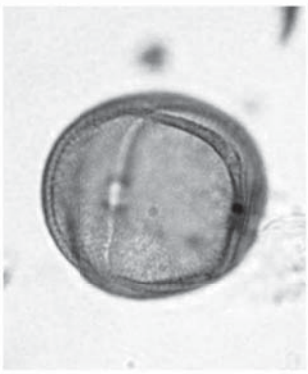
4 クワ科-イラクサ科
（2号溝②層）

5 マメ科（2号溝①層）

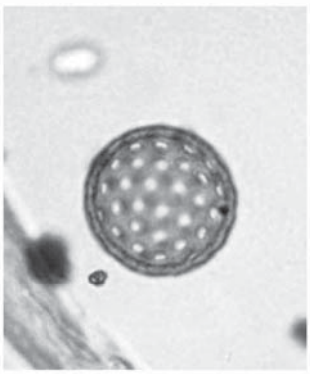
6 イネ科（2号溝①層）

7 イネ属型（2号溝②層）

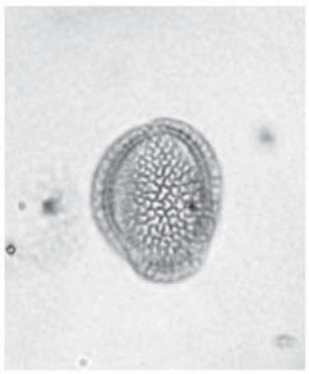
8 ミズアオイ属
（2号溝②層）



9 ギシギシ属（2号溝②層）



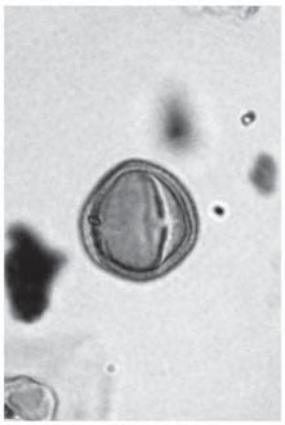
10 アカザ科-ヒユ科
（2号溝②層）



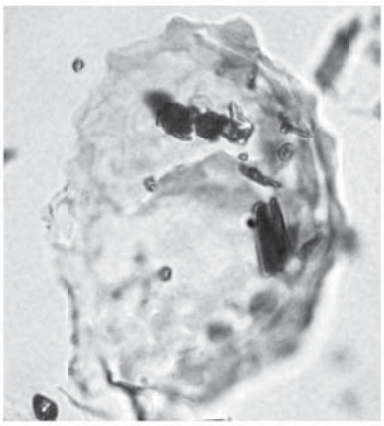
11 アブラナ科
（2号溝②層）

12 チドメグサ亜科
（2号溝②層）

13 セリ亜科
（2号溝①層）



14 ヨモギ属
（2号溝②層）



15 回虫卵（2号溝②層）

16 鞭虫卵（2号溝②層）

10 μm

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はるのつじいせき
書　　名	原の辻遺跡
副 書 名	原の辻遺跡調査研究事業調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第27集
編 著 者 名	古澤義久（編）・川道寛
編 集 機 関	長崎県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地１　電話0920（45）4080
発 行 年 月 日	西暦2018年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
原の辻遺跡	長崎県壱岐市 芦辺町深江平触	42424	72-92	33°45′30″	129°45′55″	2016 10.31～ 2016 12.26	300㎡	原の辻遺跡調査研究事業（国庫補助事業）

収録遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡 （芦辺高原地区）	集落	弥生時代・ 古墳時代		弥生土器・古墳時代土師器・楽浪系土器・韓半島南部陶質土器・石器	

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第27集

原の辻遺跡

2018（平成30）年３月31日

発行　長崎県教育委員会
　　長崎市尾上町３番１号

印刷　株式会社　昭和堂